

日曜学校教授法
教文館発行

97

515

(M)

021091-000-6

97-515

日曜学校教授法

エーチ・クレール・トランブル/著

M40

ABI-0952



TEACHERS AND TEACHING

日曜學校教授法

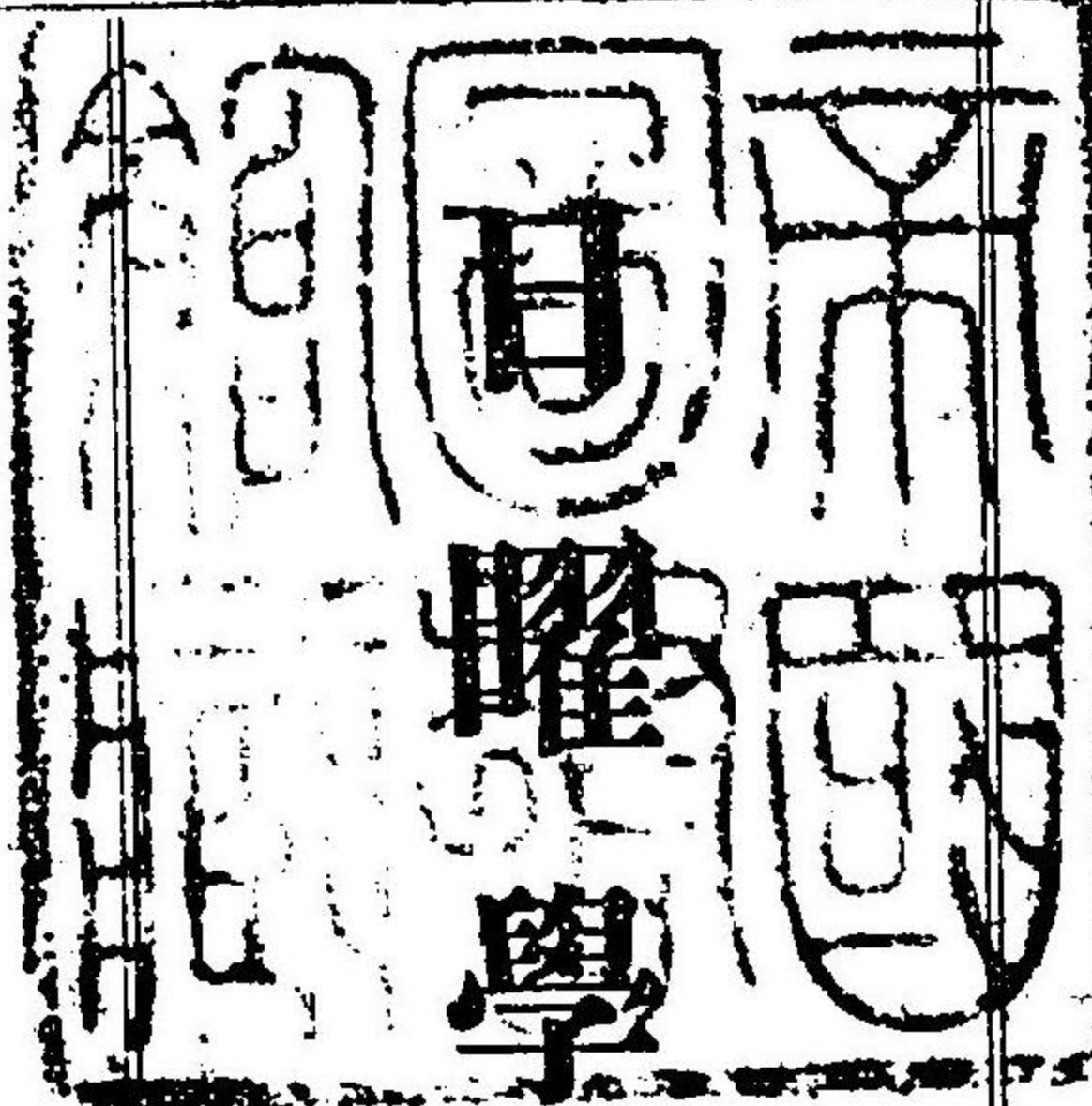
米國 エーナ、タレー、トランブル著
英國 アグネス、コーツ
日本 櫻井成明合譯

發行所

東京教文館

97-515

TEACHERS AND TEACHING



米國 エーナ、クレー、トランブル著
英國 アグ子ス、コー合譯
日本 嬰井成

校教授法

發行所

東京教育館

明治
40 12 14
内交

日曜學校教授法目錄

內 篇

日曜學校教師の教授事業

教 授 法

第一章 教授の性質	一
緒 言	一
第一節 謂ゆる教授なる者は凡て教授に非ざる事	二
第二節 說話は教授に非ざる事	四
第三節 諳誦を聽檢するは教授に非ざる事	八
第四節 教授とは何ぞや	一三
第二章 教授の主體	一七
緒 言	一七
第一節 我が教授すべき對手を識らざるべからざる事	一七
第二節 我が教授すべき事物を識らざるべからざる事	二六

第三節 教授は如何に爲すべきかを識らざるべからざる事 三一

第三章 教授の要素 三五

緒言 三五

第一節 生徒をして我が教授に注意せしむる事 三六

第二節 我が教授すべき事物を明瞭に爲す事 四〇

第三節 生徒の同心協力を得る事 四五

第四章 教授の方法 五二

緒言 五二

準備の方法 五三

第一節 如何にして生徒の人となりを研究すべきかの事 五九

第二節 教授の爲めに如何に學課を研究すべきかの事 六二

第三節 學課教授に如何なる方針を立つべきかの事 七二

實行の方法 七二

第一節 如何にして生徒の注意を獲べきかの事 八〇

第二節 如何にして明白に教授すべきかの事 八二

第三節 如何にして生徒の同心協力を獲べきかの事 八二

試験の方法 一〇六

第一節 生徒の知識を試験する事 一〇六

第二節 一たび教へたる事を忘れざらしむる事 一一〇

第三節 全課程の新見地を發明せしむる事 一一六

外篇

日曜學校教師の教授以外の事業

生徒の陶冶及び嚮導

緒言 一二八

第一節 感化力の事 一二九

第二節 生徒を愛する事及び生徒に愛せらるゝ事 一五三

第三節 生徒缺席の時これが取扱の事 一六五

第四節 生徒を勸勉して基督を信する決心を爲さしむる事 一七五

第五節 如何なる時にも生徒の相談相手となり、又を誘掖する事 一八〇

日曜學校教授法目錄終

日曜學校教授法

米國 エーチ、クレー、トランプル著
英國 アグチス、コーツ
日本 櫻井成明合譯

内篇

日曜學校教師の教授事業

教授法

第一章 教授の性質

緒言

本書著述の本旨は日曜學校に於ける教授の性質及び方法を指示、定義し、又その正當なる教授の世間には餘り行はれをらざることを摘示し、併せて日曜學校教師をして彼等は果して日曜學校に於て眞に教師たりや否やを知らしめんとするに在り。實に此點

に關して眞面目に考ふべき實際上の必要あり、殊に日曜學校の教授事業を輕視して、未だ嘗て教授の方法、教師の職責に對して、さる重要な問題の存せりとは思はざりし者にはその必要の多大なるを見る。

實にかゝる緊要なる問題に接觸して思考するあらば必ずや心に不安の念を生じ、茫然として自失するとあらん。然れども發明は常に此間に生ず。故に人若し教授の方法に關く、教師たる責任を完うしをらざりしを自覺せば則ち其道を研究せざるべからず。要するに心の不安疑惑は實に新智識新發明の引たるなり。

第一節 所謂教授なるもの凡て眞の教授には非ざる事

何人も世間の謂ゆる凡ての教授なるものは必ずしも眞の教授には非ざることを承認するならん。たとひ一般の人が之を承認すると、せざるに拘はらず、兎に角世に『教授』てふ名を冒す所の多くの事業が決して其名に適當せざると、たとひ名は『教授』たりとも其實は教授に非ざるとは事實なりとす。從て自ら『教師』と稱する輩にして教授とは果して如何なる者なるかを明言し得ざる者さへあるなり。『教授』てふ一語は彼等の心に漠然として一定の意義なし、彼等之を説明せんとするも終に一辭の能く當る者なく茫然自失して止むのみ。

蓋し吾人の通弊は日常使用する所の言語文字に馴れて、更にその眞意義を思考せざるに在り。從てその意義を誤つて惡しく解釋し居り、或は全く明確なる解釋を有せずして、常に之を口にせると少からず。此『教授』てふ一語も實に其一なりとす。然らば『教授』とは果して如何なる意義を有するか。

世には眞の教師たる資格なくして『教師』てふ名を冒し居る者少しとせず。日曜學校の校長若くは教會の牧師は動もすれば教授するに實力なき所の人物を容易に日曜學校の教師の職に補して顧みざるなり。彼等は此の如き人は記録上には一個の『教師』たらしめ得れども、事實に於て之を教師たらしめ得ると能ざるなり。童兒あり、嘗て問ふて曰く『犢は若しその尾を一の足と見做さば幾個の足を有するか』と。一童之に答へて『五個なり』といふ。他の童之を拒みて『尾は則ち尾なり、汝如何に之を足と見做すとも犢は唯四個の足を有するのみ』といへり。嗚呼米國にまれ日本にまれ、日曜學校の記録中に登録せられある所の教師を惣計して、その中に果して幾人の眞教師ありや。

されば予は此『教授』なる語の眞意義を世人が知らずして、一般に不適當に使用する三三の例を擧げて、その謂ゆる教授なる者の眞の教授に非らざることを示めさんと欲す。その誤解せる意義を摘示するは、その意義を發揮するに最も捷路たらんと思へばなり。

第二節 説話は教授にあらざる事

日曜學校教師たる者に免れざる誤謬の一は生徒に説話するを以て直ちに是れ教授するなりと思へるにあり。説話は素より教授上の一方法たるには相違なれども、説話其物は決して教授には非ず、且つ教授たり得べからざるものなり。苟も教師にして此理を能く會得するに非ざる限りは其人は眞の教師にあらず。

例へば茲に雙かたしひたる一人の生徒ありとせん、われ之に口より出づる言語を以て一事を語り而して我が頭を下面に垂れて生徒をして我が唇の語る毎に動くを見る能はざらしめなば、我が彼に語りしことを彼に得教へざりしは明かなり。若し耳雙かたしひざるも我れ彼に説話するの際、彼れ他の事に心を寄せてありたらんには、又は生徒の解し得ざる六ヶ敷言語を以て説話せんには、均しく我が説話は教授ならざるの理は明白なり。嘗に之のみならず、何人と雖も耳に聽ける凡ての事物を即座に識得すること能はず、又何人も其事其物を識得するに非る限りは教授せられたるに非ず、又識得したるより以上を教授せらるる者にあらず、幼童にいろは四十七字を一時に説き話すは之を幼童にいろはを教授すといふべからず。文典及び數學の諸規則、博物學及び道德學の諸原則を列舉して學生に告ぐるは、斷じて此等の諸規則、原理を教へたるにあらず。若し説話にして教授たらんには謂ゆる教授なる者は實に單純にして容易なるものなるべし。

誰か年期奉公の徒弟に向ひ、かくくせば馬に鐵蹄を穿たしめ得べく、活字を排列し得べく、懷中時計を製し得べしと告げて、以て之を教へ得たりと思ふ者あらんや。誰か美術家や著述家や、軍人をして人に其守るべき務を唯一言告げしめて、以て其人に此等の業務を教へ得たりと信する者あらんや。若し男にもせよ女にもせよ、或は講壇の上より、或は對座の談話により、又は直接の個人的訓誡によりその告げられたる教訓箴言を悉く識得する者ならば此世の文明は期して待つべきに非ずや。説話の決して教授にあらざることは一見して知り得べし。

説教者が其講壇より福音を宣傳し、各聽聞者は悉皆之を了得せしなるべしと思ふまでに丁寧反覆して熱心に説き教へしに、數年間之を聽きし信男信女が其教の要點を了解し居らざりしことを發見して浩歎するは世に希有のことに非るなり。予の知る所の人にして、非常の信實と材幹とを有し數十年間一教會を牧する説教者あり、此人嘗て予に證言して曰く、「我が教會に一人の婦人ありき、普通以上の知能を有し、數年間常に教會の禮拜集會に出席し、予の最も喜ぶ所の聽衆の一人たりき。予は此婦人が我教會の會員にはあらざれども予が説教する時能く注意して聽き、又會得せし所あるかの如き容體を視て予が心頗る勵まされ喜ぶと少からざりき。其後此婦人病に罹れり、予往て之を訪ひ、此婦人が罪人として反省し、其要すべき所の者と、爲さる可らざる

ことを猶一層深く教へ感せしめんとしたりしに、計らざりき此婦人が日頃聴問せし福音の大眼目大主意に關して少しも了解し居らざること、異教國にて人となりし所の者と異らざるとを發見せり。予は此婦人が臨終の際其枕側在りて、予が嘗て講壇の上より繰返し／＼て説き明し、而して彼が既に能く了解せりと思ひし單純なる救拯の福音を今又更に會得せしめんとするに當りて、心竊かに發明せしことは如何に明白に反覆して説明するも、單に言説するとは我が教へんと欲する所の事物を聴者の所有たらしむるに足らざるとなり」と。即ち此説教者は説話は教授に非ずといふことを發明したるなり。

説教者若くは日曜學校の教師は其立ち且つ語る所の場所が聴衆又は生徒と隔たり、又膝組みての談話に非ずして、凡ての會衆、凡ての生徒に説話すといふ一點を以て其説話は教授に非ずといふに非ず。かの婦人が會衆中に在りて説教者が其講壇より述ぶる所の教を會得せざりし如く、生徒も亦其教師が丁寧明白に反覆し、又幾度か個人的に説話せし所の眞理を會得せざる者なしとせず。予が少年の時自ら實驗せる適例あり、嘗て有徳にして學識ある人にして、日曜學校の教師たりし所の者ありしが、其教授は不幸にも失敗に歸せり。此人は有數の法律家にして、各所の教會に嘖々たる名聲を有し、各日曜學校の書庫には必ず此人の傳記を藏する程の人なりき。此人其教課の

準備下調を爲すに最も心を用ひ、其教科書には所狭きまで種々の書入れを施し、さて巧みに、明白に、直截に其時間の初めより終りまで能辯に講話せられしが、其兩眼は常に閉ぢて人を視ず、又常に生徒に質問を試みしと無かりき。此人は自己が時間を守るの嚴正と、信實なると、基督の如き博愛の精神との實例を以て多く予等生徒を教へたり。されば其教ゆる所の級よりは愛せられ、重んぜられ、其學生よりは感恩の情を以て今猶記憶せらる。然るに予は此日曜學校教師の口によりて直ちに教へられし所の一の事實も、一の教訓も、一の教理も今思ひ出すと能はざるなり。此は決して日曜學校の教場に於ける説話は教授に非ざる例證の極端なる者に非るなり。

説話の教授に非ざるとは未だ一般世人の注意留心する所とならずと雖も、苟も一雙眼を有する説教者及び教師の承認する所とはなれりき。有名なる英國の一教師いへるとあり、「世に笑ふべきと多しと雖も、水を瓮に注入すると同じく、科學は人の心に注入せらるべきものなりとする教授上の誤解は甚しき者あらず」と。トーマス、カライルは恰も之を評釋したる者の如く「聴者が空桶に水の注入せらるゝ如く黙坐せば如何に辯士が懸河の辯をふるふとも終には何人能く退屈せずしてあらるべき」といへりき。

謂ゆる聖書研究會の教授の如き、概して説話にして、教授にはあらず。其説話は恰

も教會の説教、演説を聴くが如く、しかも第一流の説教演説は希有にして、多くは第二流第三四流の拙劣なるもの多し。是れ豈に教授と稱すべけんや。要するに教師は唯喋々として説話するのみ、生徒は黙々として聴聞するのみ。蓋し教師は必ずや其心に其言ふ所の者を得居れるなるべし、然れども黙々として之を聴ける所の生徒は未だ之を心に會得せざるなり。彼等は唯聞けるのみ、學び得ざるなり。日曜學校の教授も亦之に異らず、教師は語り、生徒は聞けるのみ。故に日曜學校には教師ありて一の教授なく、學生ありて一の學習なし。歎せざるべけんや。

抑も説話は教授上の一法として欠くべからざるものなり、たとひ教へ込むといふには効なくとも聴者に益なしといふべからず。然れども尙も教師たる者は説話は直ちに教授に非ず、説話以外猶他の方式に由りて教授せざるべからざることを了得するを要す。

第三節 誦讀を聴檢するは教授にあらざる事

生徒に語句若くは事實を誦記せしめ、これを聴檢するを以て直ちに是れ教授なりと思惟するは是れ亦日曜學校教師に免れざる誤謬の一なり。此誤謬や單に日曜學校教師にのみ止まらず、普通諸學校にも亦免れざる所なりとす。素より誦讀は教授上必要な

る者にして、生徒には益あり、教師には之を聴檢すべき義務あるべし、然れども此誦讀を聴檢すといふとは直ちに教授とはいふべきものに非ず、又教授上の本質たる者に非らざるなり。ハート教授嘗ていへるとあり、『生徒の誦讀とは嘗て一たび學びし所のものを背誦するとにして、其教授せらるゝは未だ嘗て知らざる所のことを教師より學得するに在り。此の二の事は實際屢ば相伴ひて行はるれども、其本來の性質は全く異れり』と。夫れ我れ書籍を手にし、生徒をして書中の記事を背誦せしめ、其一字一句誤るか誤らざるかを檢するは固より教授とは稱するを得ず、生徒間相互にも能く爲し得る容易の業にして、その之を聴き之を檢する所の生徒を稱して教師とは何人もいはざる所ならずや。

生徒、漠然として唯誦讀すると甚だ多しと爲す。生徒はその意義も知らざる、若くは誤りたる意義を自ら付して幾多の語句を記憶し、その記憶したる語句を、問はるれば鸚鵡返しに喋々背誦して、更に其眞意義の如何を究めざるなり。誰か之を以て其生徒は何事か教授せられたりとせんや、又其知識は記憶したる所のことを背誦するによりて試験せられたりと思はんや。たとひ其記憶せる語句の意義を了解し居れりとするも、唯漠然として教師に對して誦讀したりしに過ぎず。故に其答辯は問はれし問題に眞の關係を有せざるなり。他の異りたる問題にも前の答を爲し、同一問題も二度び發

せらるれば誤て他の答を爲すに陥ることあらん。是は則ち其記憶せる所は單に答辯の語句の實にして、能く問題と答案との關係に注意せざるより生ずる弊習なり。

予は此事に關して早く一の經驗を有し、愕然として恐れたる所のとあり。予が年僅に十七歳の時日曜學校教師として、一の級を受持ちたるとありき。此級の教科書は各問題の條下に其答案を仔細に記載したる者也。生徒は其答案を記憶し、教師は其書の語句通りに、且つ其順序を以て問を發し、生徒が答案を誦するを以て例とせり。かくて或る日曜日、その日の課程は「エマフへの道」なりき。而して其頁の第一問題は「エマフは何處にありや」也。予は立ちて此第一問を發せんとて、予が右方に坐せる一生徒に向ひしに、予は此生徒は前日曜日に缺席したりし童兒なるを思出したれば、乃ち「ジョセフよ、君は前日曜日何處へ往きしや」と問ひたりしに、言も未だ畢らざるに、「エルサレムの西北七哩半なり」と答へたり。予苦笑して曰く「しからば君が此日曜學校に來らざりしも道理なり」と。予は是に於て始めて此生徒は誦せしむるを教授と信する學級にて何の得る所もなく、たとひ此學校に絶えず出席するも猶ほエルサレムの西北七哩半の遠きに居れると異るとなきを知り得て忤怩たりき。此は實に久しぶり以前の事なり、予は切に此種の事例が今日の進歩したる日曜學校に再び現はれ出でざらんことを望むなり。

夫れ語句を記憶すればとて直ちに其思想を得る者に非るとは、恰も書籍を購入し、飾り置きたるのみにては少しも其知識を獲ると能はざるが如し。茲に人あり文學、美術、科學の各方面に於ける精選したる最良貴重の群籍を以て其文庫を充たすとすも、之を讀破研討せざるに於ては甞に其書中に存せる知識を獲る能はざるのみならず、從て其利益をも享有する能はざるなり。之と同じく兒童も亦其問答書に記載せる各答案を悉く記憶し、其答案中には聖書より精選したる語句も數少からず挿入しありて、皆之を誦記し得るにも、唯これ誦記背誦し得といふに過ぎずして、貴重なる其思想は毫も獲るとなきなり。たとへば生徒は其解せざる所の外國語にて記せる答案を誦記答辯すると均しく、何をおのれは答辯し居れるかを知らざるなり。又たとへば自國語の答案を背誦するも其意義を解せざる時には其背誦し答辯せる所は果して何事なるか知らざるが如く、其思想を獲ずして、唯其語句を誦記背誦するは信に徒勞の業といはざるを得ざるなり。故に曰く思想を獲ると語句を誦記するとは全く別事に屬す、而して此二者は同時に並行することあり、又並行せざることあり、然れども如何なる場合に於ても同一のものなる能はざるなり。

予は茲に讀者の誤解せざらんことを望む、予は決して語句の誦記は一の利益なしといふに非らざるなり。唯予は語句の誦記は書籍の購入と同じく、是れ直ちに知識の獲得

に非ずといふなり。諳記や書籍や是れ實に知識の材料、若くは知識を獲得する器械の蒐集たるに過ぎず。かく諳記せる語句は直ちに知識たらざるが故に此等諳記せる語句の背誦によりて知識を得る能はざること、恰も書籍を購入し、その分類排列を爲したればとて毫も知識を得る能はざるが如きなり。蓋し語句の諳記は學生の生涯に利益渺しとせず。世の小中學校にては背誦して深く記憶せしめ得んために種々の規則、表等を製し、以て生徒が將來に於て参照の便に供せしむるなり。日曜學校、又は家庭に於て宗教上の訓練を授けんために、聖句や讚美歌や重要な教理等を其語句のまゝに記憶せしむるもよきことなるべし。然れども如何なる良善卓越なる諳記の方法を案出すとも、其諳記なるものが直ちに其語句中に含まれたる思想意義をまで獲得し得らるゝものと誤想せざるを要す。謂ゆる思想意義なるものは此の如き諳記に由らざるも能く獲らるべきものにして、却て諳記に誤れる思想を傳へ、若くは毫も意義を解せずして止むの弊ありとなす。要するに語句の諳記と思想の獲得とは如何なる事情場合に於けるも同一事たることなく、又同一事たるも能はざる所の者たり。故に如何に聰明なる教師と雖も唯背誦を聽檢するによりて、此二の異りたる事を同じものとするも能はざるなり。

第四節 教授とは何ぞや。

夫れ説話は既に教授に非ず、諳誦を聽檢するとも又教授に非ず。然らば則ち教授とは果して如何なるものなりや。

抑も「教授」てふ語の意義を解釋して明白に且つ完全ならしめんとするは頗る難事なりとす。幾多の辭書を繙き見るも其定義は種々にして漠然たり、又多くの學術上の論説を檢するも此語の範圍及び意義を十分明白ならしむるものなし。予は二十年の久しき此語の解釋定義に關して検討したりしが、終に能く満足を興へし學者の説を得るとなかりき。

なかに稍予が心を得たる定義二つあり、一をジャコット氏の説と爲す、曰く「教授するとは他をして學習せしむるなり」と。一をハート教授の説なりとす。教授はジャコット氏の此定義を一層明晰に説明したる者にして、即ち「教授とは他をして事物を知らしむるの術なり」と是なり。おもふに此二個の定義の如く簡潔にして的當せる者は未だ嘗て之れあらざるべし。實に此二定義は眞個教授の本体を指示せるものなり。蓋し教授てふ語は實際對手に於ける學習てふ思想を、その要素として包含せるものなり。故に彼に學習なくして此に教授ありといふとは天下廣しと雖も未だこれあらざるなり。即ち學習の進行次第順序は教授の進行順序と相伴はざるべからず。並行

せざるべからざる所の者なり。是を以て一方に於ける學習の程度に應じて、他方には教授の程度あり。若し學習の進行にして、其歩を停めなば教授の進行も亦その歩を停む。學習の進行の終る所即ち教授の進行の終る所なり。

『教授』てふ語は固より此學術的意義以外に用ゐらるゝとなきにあらず。吾人が日常表現せしむる所の精神、行爲の上に於て他を教ふるとなくんばあらず。此點の意義よりいへば吾人は悉く常に他の教師たり。吾人は絶えず吾人の周圍に在る所の人々に善道にまれ、悪行にまれ教へつゝあるなり。然れども吾人が今日曜學校教師として教授の事を論ずるは初めより此種の意義に關していへるに非ず。吾人は此種の、希望するも、せざるも、必然避け得られざる無意識の教授は今置いて論せず、唯活動的にして、目的ある勤務に關して論述しつゝあるなり。即ち吾人が知得せる事物にして、他が未だ之を知得せざるが故に之を知らしめんとするところ吾人が學術上の意義に於ける『教授』なれ。此點の意義に於て『教授』てふ語には明かに教師、課業、生徒なる三個の思想を包有し、知識は初めより教師に存し、生徒は之を缺き、而して教授の終る迄に教師の心より學生の心に此知識を實際に傳習せしむるなり。故に吾人は「課業を教へたり」といへば則ち生徒はその課業を學び得たりとの意はおのづから含めるなり。何となれば生徒の方に學習てふとのあらざるかぎりには教師の方に教授てふもの有り得

べき理なく、又教師が一の課業なり、真理なり、生徒をして之を知得せしめ得るまでは、教師は唯之を教授せんとして務めたるのみに止りて、その効果あるとなきが故に未だ之を教授とはいふを得ざればなり。

そもく教師たる者の事業は決して課業の教授のみに止まらざるなり、又此教授は當に教師が最要の事業にも非らざるなり。生徒の心に深く印記する所あらしめ、感化する所あらしむるは教師の事業中最も切要なるものなりとす。教師の精神、教師の性格、教師の態度及びその日常生活の如何は教師の教場に在りての言語と同じく生徒を感化し心に銘記せしむると甚だ大なり。生徒を愛し、同情を有し、而してその愛と同情とを事實に顯現せしめ、教授時間中も時間外も生徒の情操の緒を握り居り、特に彼等の爲めに絶えず祈るは實に教師たる者の義務なり。此等は凡て學術上よりいへる教授には屬せざる者なれども、誰か能く此種の情致なくして學術上の教授に功を奏し得るものあらんや。日曜學校の教師中には教授以外に幾多の善を爲す所の者あり、此種の人々は他の唯教授をのみ爲す所の僚輩よりも日曜學校に於て或は遙かに善事を爲す者なり。さればその事業は教授に非ずとて決して卑まるべきものに非ず、又教授と混同せらるべき者にも非らざるなり。

受持級の生徒を感動銘記せしむると、聖書の課程を教授するとは全く別事に屬す。

此二者は相伴ひて並行するを得、又相伴はざるをも得べし。二者その一を缺くべきか、若くは二者具備すべきか、是れ教師が教授とは如何なる者なりやと思考するに於て三たび意を致さざるべからざる問題なりとす。是故に日曜學校課業の終りに教師が自ら問ひて自ら答へざるべからざる一問題は我は我級に臨むの前此日の課業に關して自ら能く準備したりしやに非ず。我は我級の生徒に知らしめなは宜かりしならむと思へる切要なる眞理を條擧して説明したりしやにも非ず。又我が生徒は能く注意して我が教授を受け、銘記せる氣色ありしやにも非ずして、實に我は今日の課業につきて何人かに何事かを新に知得せしめしや、如何に在りとす。此等の問題は何人もその生徒のうちいづれにても吾人教師たるものが彼等をして知得せしめんと務めし所のものを、果して學習し得たりとの實證を見るにあらざる限りは信實に之に答ふる能はざるべし。故に何人も此點に關し斷乎として明答し得るまでは、其人は未だその課程の全部又は一部分を、その級全体又は一人にだに教授せりとも教授せずともいふ能はざる者なり。

されば教授の效果如何の徵證は常に學生の方に存し、學生の長少に拘はらず教師の方には存せざる者なるを記憶せんを要す。教師は能く教へんとして務めたるを證し得べく、而して學生は獨り能く教師が成功したりしとを證し得べし。

第二章 教授の主體

緒言

教授法の性質既に明かならば次には其主體如何を研討せざるべからず。夫れ教授法には學習と教授との二様の性質を包有し、その謂ゆる教授てふ語の中には學ばんとする所の者と、之を啓發提命する所の人と、及び學習せしめんとする所の眞理との三意義を包含する者なるが故に、能く教授の効を收めんと欲する所の教師は先づその教授の業を開始せんとするに當りて、須らくわが今教授しやらんとする所の者は如何なる人物なりや、わが今教授せんとする所の事物は如何なる事物なりや、又教授は如何に施行すべきやを知らざるべからざるは尤も明白なることならん。吾人が今序を遂ふて研討せんとする此三要件は則ち教授の主體にして、之を熟知せずしては到底眞正の教授は爲し能はざるものとす。

第一節 我が教授すべき對手を識らざるべからざる事

教師としては先づ第一に教授せんとする對手たる生徒の如何なる人物なるかを識らざるべからざるなり。唯その面貌を知るのみならず、その姓名を知るのみならず、又

その相識として日常出入に挨拶するだけの交りのみに止まらずして、深くその個々の才能、知識及びその缺乏せる所の者を知悉せざるべからず。此等を知悉するとは我が教授上最も先づ必要なるは明白の事なりとす。生徒のうち或は盲目の者あらん、盲目なればとて教授を施さざるの理由なし、たゞ普通用ゆる所の地圖や、繪畫や黒板を使用し得ざるのみ。或は聾者もあらん、又啞者もあらん、これには聾者に使用し得ざりし地圖、繪畫、黒板の如きは最も有用なる教具なり。是れ皆その面貌を見て而して後ち教授の方法を盡くし得る者にあらずや。或は目能く物を見、耳能く事を聴き得る者とすも果して能く我が言語を了解し得るや、又我が使用する言葉は彼等も平生使用し熟知し居るや否やを知らざるべからず、然らずんば彼等の目と耳とは更にその用を爲さず、我が教授は勞して効なきに終らんのみ。

ソクラテイスは自己の無識を知るは知識に進むの第一着歩なりといひたりしが、思ふにコレソクラテイスなりしならん、之を敷衍して「吾人は先づ對手の無識を知了するまでは其人をして吾人の知る所の事物を知了せしむる能はず」といひき。蓋し生徒が未だ知らざる所の事物を既に知れりと吾人が思ひ誤り居れる限りはその生徒にその事物を知らしむる能はず、從てその事物を知りて而して後ち始めて了解し得べき所の事物は決して知らしむる能はざるなり。此種の誤謬は教師が生徒の無識の程度を知

らざるよりして所在の日曜學校に普く行はれてその迹を絶たざるなり。今その二三の例證を擧げんに、嘗てホーレース、マーン夫人といへる人某所の日曜學校を參觀せし時夫人「善良たらんと欲する所の子供は起立せよ」といひし時その座の衆生徒は皆起立せしに一人の小童のみ起立せざりしかば、教師は之を視て、他の生徒の如くに亦起立せよといひしに、かの小童忽ち泣き出し、嗚咽せるなかより微かなる聲して「否、否」と拒めり。マーン夫人あやしく可笑しくも思ひて、かの小童の側に往き向ひ、手をその肩にのせ、物優しく「善良たらん」とは如何なるとかおん身は知り玉ふや」と問ひしに童は「鞭にて打たるゝとぞ」と泣きながらに答へけり。あはれ此のわらへはその平常惡戯して答たるゝ毎に、こは汝を善良にするためなるぞと聴き馴れたりしため、此の如き誤解を爲し、人をして失笑を禁じ得ざらしめき。然れども教師にして若し此小童の無識を知りたるらんに他は他の語を用ひておのが問意を達せしめ得しならん。

新英州の一教會に聖書研究會あり、會員は十二二人の壯年の信者にして、中には永年の間教會の役員たる者もありき。一日使徒行傳の首章を講ずるに當り、教師は耶穌の「passion」(苦難を受く)てふ字義を問ひたりしに、直ちに答ふる者無かりしかば、教師は重ねて「茲に記るせる「夫イエスは苦難を受けし後、己の活きたる事を現は

し」とあるは耶蘇の傳記中如何なる事實をいへるにや如何」と問ひしに又一人の答ふる者なし。さては我が問ひ様のあしくて、答辯を躊躇するにはあらずやと思ひ、是に於て自らその間に答へて説明し、さて何故にかくは答へざりしと聞きたゞせしに、豈に計らんや、此の『passion』てふ語は基督が此世に於ける最後の受難にあて用ゐたるものなるを彼等は全く知り居らざりしならんとは。蓋し英語にて日常の言語にパッションとは憤怒の意に用ゐられしを以てなり。此事ありしのみち此教師が教授の方法は全く一變して、今日に至るも此人は先づ學生の知識の程度如何を知りて而して後ち業を授くるを第一の務となしをれり。さればにや此教師の受持級は米國の諸日曜學校の各級よりも遙かに優りて獨歩の姿なり。夫れいづれの生徒も此受難の字義を知らざるにはあらざるべし、然れども此文字と同じく、平生使用し馴れをる他の多くの文字言語の意義を了解しをらざる者は蓋し少きにあらざるべし。

フヒラデルフエア府の日曜學校の一教師は手に告げて廿五歳の伶俐なる一生徒より「棄てられたるガリラヤ人とは誰のとなりや」と問はれて其生徒の無識なるに驚きしとありといひぬ。予も亦一の經驗を有せり、紐育市の日曜學校を參觀し、自ら十四歳より十七歳までの少年にて、同地の基督教徒にて上流社會に屬せる家の伶俐なる子弟より成れる一級に教授を試みしが、當日の課程は摩西の教訓と基督の教訓との別、即

ち律法と福音との別といふに在りき。予は此律法と福音との文字の意義を問ひしに、驚くべし、彼等は律法とは今日國家の制定せる成文律の如き法律なると(譯者註、律法も法律も英語にては同じくLawなり)、福音とは新約全書の馬太、馬可、路加、約翰の四傳なると(譯者註、福音も聖書の四福音書も英語にては同じくGospelなり)との外は一人もその眞意義を知れる者なかりき。かくの如く日曜學校の教師が發する問題の字義を能く知了せざる生徒より案外の答辯を得、又は生徒が全く答辯し得ざるは更に異しむべきことには非らざるなり。

夫れ兒童は平生目に馴れをる所の事物や、口に用ゐ馴れし所の言語を意外にも知りをらざるものなり。教授スタンレー、ホール氏は兒童研究に熱心なる人なるが、ボストンの多くの小學校初年級に入學せし兒童に就いて、彼等が普通の事物に關して有せる所の知識を審査し、近頃一表を著して世に公にせしが、此等の兒童二百人のうち、その五分の一は自己の右手とはいづれなるか、左手とはいづれなるかを知らず、三分の一は未だ嘗て雞を見しとなく、三分の二は蟻を見しとなく、三分の一は雲を知らず、三分の二は虹を見しとなく、二分の一以上は木製の器具は櫛着たる樹木を切斷して製造せしとを知らず、三分の二以上は地球の形体を知らず、十分の九は「うごん粉」は何物より製造せられしものなりやを知らざる所の者なりき。是に於てホール教授は斷案

を下して、兒童が學校入學の際其智識の程度を臆測斷定するは教育上些の價値なきものなりといへり。故に日曜學校の教師はその教授を開始せんとするに際して、先づ生徒の智識程度の如何を考察するの勞を取るに非らざれば、必ずやその無識の程を知らず、從て十分之に教授する能はざるなり。

深遠なる學識ある人が多くは教師として最も不成功なるは職としておのが教授を施す生徒の智識の程度如何を知らざるに由らずんばあらざるなり。英國屈指の教師ペイン教授は「博識なる學者は自己の學識の甚だ高きと博きとによりて、却て教授するに拙なり。その心は常に高尚なる事物の上に存するが故に卑近なる事項に對して同情の念乏し。おのれは學者として既に年久しきために嘗ておのれが學生時代に實歷せし困難患苦を忘れ、今の學生がその同じ情境に在るとに思ひ到らざるなり。故に學者をして身を下して學生の情境に置き、自然に感せざる所の同情の念を喚起せしめんとするは最も難事に屬す」と。さればにや學者は一般に自己と學生との間に一大溝渠の存するあるに心付かず、おのれは能く教授せんとする事物の智識に富むも、おのれが教授を受けんとせる學生の智識の程度を知らず、又知らんともせざるが故におのれは致々として教授するも學生は更に學習する所これ無きなり。故に又日曜學校の年少の教師は教師としては概して老年の教師よりも成功するに多し。蓋し年少の教師は生

徒の智識缺乏の點に同情の念多きを以てなり。若し老年の教師にして成功せる者日曜學校に在るならば其人は必ずや意氣若やかにして、感情も亦若やかなる者なり。感情既に若やかなるが故に能く少年の感する所は如何なる事物なるかを知る、既に其感情を知る、故に能く少年の情態を知りて適切なる教授を施すとを得るなり。

教師が學生に就て知るべきとは管にその智識の程度如何のみに非らざるなり。その好悪、性癖の如何その感情願望の如何、その思想行爲の如何、その性質傾向の如何、及び其家庭の良否、其平生周圍の空氣如何等は又能く討査して而して後ちそれらの教授を施さざるべからざる所の者なり。佛國の大毒物學者オルフヒラ教授に關して一の佳話あり。教授が嘗て法廷に於て一の毒藥の些少なる服量の効力如何に就きて試験せし時、その裁判事件に關係ある一狀師戯れに教授に「此毒藥が一個の蒼蠅を殺し得る精密なる最低服量を能く手に告げ得給ふや」と問ひたりしに、教授は笑つて答へいへるやうは「然り、予は其分量を脚に告げ得べし。然れども予は先づ其試験すべき蠅に關して多少研究し置かざるべからざるとあり。予は其蠅の形体の大小、年齢の長幼健康の良否ヨ日常生活の状態、交尾せしとありや未だしや、及び今日までの境遇等に就きて逐一知悉せざるべからず、凡て此等の條件は藥物の分量を加減せしむる者なればなり」と。此の如く學校の教師もその將に教授せんとする所の生徒に關して深く研

究して而して後ち始めてその適切なる教授を施し得べきなり。

デイーン、スタンレー氏嘗てトーマス、アーノルド博士の教授上の方法につきて「博士の教授法は生徒各個の智能を醒覺開發すとの主義を以て貫通せり」といへり。げに此開發主義は堪能なる教師が教授法の根柢たらずんばあらず。

紐育州立師範學校の有數なる一校長いひしとあり、彼れ若し五十人一組の一學級を受持つ時は此五十人の生徒各個に適當なる教授を爲さんが爲めに、身は一個なれども心は五十に活動し、即ち五十人の生徒に五十人の教師とならんと務むるなりと。此校長は此の如くして始めて其職を盡くせるものと爲す、實に卓拔なる心懸と謂はざるを得ず、然れども吾人はかくして其職を盡くすを得るは、先づ生徒個々の情態特性を詳に討査して後ち始めて能く得る者たることを知らざるべからざるなり。故に教師は先づ其生徒の特異なる諸點に留意せざるべからず、然らずんば如何なる教授法を用ふとも其效なきに終はらんのみ。若し其生徒にして既に堅實なる教會員たらばこれが教授の方法は他の惡少年と全然異らざるを得ざるなり。若し其心志溫柔にして情致濃かに、其神經鋭敏たらんか、その冷頭にして思索的なる少年とは教授の方を同じうすべからざるなり。一の生徒にはその感情に訴へつべく、他の生徒にはその理性に訴へて教ふべし。此は繪畫及び説話を喜び、彼は新らしき思想を追求せんとす。實に十人十色にして、

教師が其事業に成功すると、せざるとは一にこの特性を甄別してその教授を施すと施さざるに在りと爲す。

我が模範的教師たる耶蘇基督は多くの人々に教を説き給ふ時、その聴衆の如何を視てその説教の方を異にし給へり。即ち天國の奧義を知れる弟子等と異りて無識なる多くの聴衆には多く譬喩をもて教を説きたまへり。使徒保羅も亦その教へんとする對手の個人的特性に注意して、その方を異にせり、曰はく「ユダヤ人には我れユダヤ人の如くなれり、これユダヤ人を得んためなり。弱柔者にはわれ柔弱者の如くなれり、これ柔弱者を得んためなり。又すべての人には我れその凡ての人の狀に循へり、是れいかにもして彼等數人を救はん爲めなり」と。保羅は決して一學級に於ける全生徒を同一の様を以て教授せんとはせざりしならん。

故に教師が各生徒の人と爲りを研究するは自己の教程を研究準備すると均しく切要なり、而して前者の研究は後者の研究よりも實際に於て先だたざるを得ず。何となればわれ若しわが教ゆべき所の者の人物如何を知らざらんか、如何ぞ能く我は之に教授すべき所の事物、眞理を選択し判斷し得んや。

所羅門も亦遠き古の世に於て既に各兒童をその特殊の人と爲りに應じて教練すべきことをいへり。曰く「子をその道に従ひて教へよ、然らば老たる時も之を離れじ」と。一

註釋書此條に關して、「箴言はあらゆる兒童、あらゆる生徒によき道なればとて、單調にして變化なき教練を強はずして、却て出來得る限り各兒童の人と爲りを討査し、之に相應せる方法を採用して教ゆべきことを指示せり」と註しぬ。所羅門の謂ゆる教とは教練の義なれども、對手の人と爲りを知りて而して後ちその方法を選ぶべきは教練に於けるもわが謂ゆる教授に於けるも其理は相同じきなり。故に生徒を個人的に知悉するとは生徒を最も切に教授するの主體なりとす。

第二節 我が教授すべき事物を識らざるべからざる事

吾人既に教授せんとする所の生徒の人と爲りを個人的に知悉したれば、次に來るべき問題は、我が教授せんとする所のとは何物なりや、是れなり。

吾人は教師が生徒に學習せしめんと欲する所の者を知らずして、教場を臨みしことを教師が自白せるを一たび聞けるに、生徒が勉強せずとの教師の愁訴を十たび聞くなり。生徒が勉強するとせざるはその智力の練達、その心意の貯藏の上に至大の關係ありと雖も、生徒の準備的勉強は教師の教授には關係なく、教授上の要素には非らざるなり。蓋し生徒が教師より教へらるゝに先立ち、自ら之を學習せるとはその生徒の特色にして、教師が生徒に學習せしめんとする物は、生徒に之を學習せしむるに先立ち

て、おのづから別問題に屬す。

若し生徒の諳誦を聽檢するが教授と稱すべきものならば、教師が之を前以て自ら知り置くは必要なることに非ず。即ち此は生徒が家に在て準備し勉強すべき務にして、此の如き授教には、教師は教場に臨むも、何の準備する所なくして容易に業を執り得べし。世間の謂ゆる教授なる者は實に此の如き者にして、名は教授たりと雖も、實は決して諳誦と稱すべきものに非らざるなり。

何人が能くおのれの知らざる所の事を人に知らしめ得んや。替者は悉ろに替者の手引し得べれども晚かれ早かれ必ず共に失脚して溝渠に陥らざるを得ざるべし。日曜學校てふ一大道路の上にも此の如き嚮導と失脚とは今日多々之れあるなり。ホストン港内に一の船あり、不良少年の感化教育の爲め之を學校に代用して、茲に幾多の兒童は航海學の初歩と學術及宗教を學習しつゝあり。一日校長の上陸して不在なりし時、一人の此の學校を參觀せる者ありて、その慣例に従ひ生徒を集合せしめて一場の演説を爲しぬ。演説家の常として種々の譬喩を用ふるとなるが、此人自己の熟知せざる航海學上の用語譬喩等を不適當に使用したりしを以て、その演説は徒に伶俐なる少年等の嘲笑を買ふに過ぎざりき。客は去り、校長は歸船しぬ、其夕禮拜の爲め一同集會せる時校長は少年等に向ひ「本日參觀者ありし由なるが定めて諸子の爲めに演説を爲せし

ならん』といへば一同聲を均しくして『然り、然り』と答ふ。『其人は何事を演説せしや』狡慧なる一童あり曰く『二つの事に關して語りしが、そは其人自ら能く知らざる所の者なり』。意外なる答に校長は異みて『二つの事とは果して何事なりしや』と問へば『船舶と宗教とに關して』と答へたり。是れ實に客の巧みに述べ試みんとせし話題に對する其知識の程度に斷案を下したる者なり。されば何人も自己の熟知せざる事項に關して教授話説するは最も慎むべきことなり。

夫れ人將に教授せんとす。何を教授せんとするか。曰く聖書の眞理を教授せんとするなり。曰く聖書の眞理は廣くして大なり。そのすべては一時に教授するは能はざるなり。今教授せんとするはその何れの部分なるか。曰く固より今日の課程に屬す。今日の課程とは何ぞや。馬可傳第五章廿一節より四十三節までの所なり。否、予は課程の何處なりやを問ふにあらず、唯その何なりやを問ふなり。曰く病と死とを左右する權能なり。曰く予はその課程の話題の何と稱するかを問はず又、その何事に關するかを問はず、唯課程とは何なるかを問ふなり。曰く課程は馬可福音書中の數節にして、耶蘇基督の傳記中、その能く病者を愈し死者を甦らしし權能を顯はし、所の事蹟並にその智識、又その嘉納し給ひし信仰の精神等に關する種々の事項なりとす。然らばその課程中には地理及び歴史並に耶蘇在世の時に於ける猶太の風俗習慣等に關する諸事

項を包含せり、子果して能く此等の諸事項に通達せりや。曰く、多少之を知らざるにはあらず、然れども予は之を左程重要な教授上の物件なりとは見ざるなり。曰く善し、子は此課程中何物を以て最も重要な物件と爲すか。生徒が皆此聖句數節を背誦し得んが爲めにその字句を教へんとするか、若くは其事實か、若くは此句中に包含せる教理か、或は此等の事實と教理との實際的適用なるか。曰く予は固より字句や事實の諸記にのみ予の教授を限らしめんとするに非ず、されど又字句事實を輕視せざらんとを期す。猶又その教理や、教理の適用に心を注ぎて、場合に應じて其多少を教授せんと欲するなり。曰く然らば則ち子はその事實、教理、教理の適用を子の受持級全体に對して一様に教授せんとするか、或は個々別々に其人に應じて教授せんとするか。子が能く此事に留意せざる限りは能く之を彼等に教授すると能はず、若し子にして茲に留意せんか、子は實に今日の課程に對して最善の準備を爲したる者と謂つべし。

事物の説話が果して謂ゆる教授ならんか、教師がその教授上必要な準備は實に容易なるものならん。教師は唯その知り置くとの價值あり、又は説話するの價值ありと思へる事物を心に留めて、之を滔々として水の流るゝが如く教場に於て演説すれば足れり。聖書の地理、歴史、若くは聖書に記載せられたる國々の風俗習慣、若くは當日課程の事實、主なる教理、事實と教理との適用等を偶然思ひ浮みたるの時、又は生徒

等が我が説話に興味を催し來りたるが如く見えし時之を語り聞かすれば足れり。然れども此等は名けて教授と稱すべきものに非らず。夫れ學習の彼に在らざる所に教授なる者我に存せざるなり。彼が學習し得るまでは我が勉めたる教授は成功したるに非らざるなり。

抑も我が教授せんとする所の事物を識らんに其當日の課程を十分に研究するを要す、之と同時に教授せんとする生徒の人物性行がありくと我が課程研究中の心眼に顯現しをるを要す。

吾人は教師として受持級の生徒の才能及び需用を其級全體としても知り、又個々一人としても知らざるべからず。吾人は其日の課程に於て生徒をして取分け學習せしめんと欲する事項は何事なるかを知らざるべからず、又生徒の能力果して能く之を學習し得るか得ざるかを知らざるべからず。若し生徒が果して之を了解し學習し得るとせば吾人は之を巧みに生徒に教授し得んために先づ我にその準備を爲し置かざるべからず、此の如くに課程を知るまでは決して教授する所以の道を知らざるなり。此の如くに吾人が了解し得るまでは、吾人は決して教授上の準備を爲したる者にあらざるなり。

第三節 如何にして教授すべきかを識らざるべからざる事。

たとひ我が教授すべき對手たる生徒の人物如何を知り、又教授すべき事物を熟知すとも、如何にして之を教すべきか其方を知らざらんか、則ち教師として猶未だ其道を盡したる者と謂ふべからざるなり。學生は我が前に在り、その人物性嚮は我れ能く之を識れり、我が教授せんとする眞理はわれ能く心に之を得居れり、然れども、如何にして之を教授すべきや。今わが心の庫に藏しある所の知識眞理は如何にせば生徒の心に移し藏せしむるを得べきやの問題は猶未だ解決せられざるなり。

凡そ我が爲し行はんと欲する所の事にして、その之を爲し行ふべき方式を知悉するとは第一に必要な者とす。何人もその方法を知らずしては牛乳を搾取する能はず、靴を造ると能はず、繪畫に彩色する能はず、凡て何事も爲すと能はざるなり。宗教的事業と雖も亦須らく其方法を知らざる可らず。人もし説教せんとするか、如何にして説教すべきやを知らざるべからず、若し教授せんと欲するか、如何にして教授すべきやを知らざるべからず。何人たりとも、如何にして教授すべきやを知り、又教授の良方式を知るのみならず、その方式によりて自己獨特の方法計畫を裁決採用するに非る以上は自ら稱して我は教授するに堪ゆといふべからざるなり。

夫れ一科の學術に通達せりといふこと、この通達せる學術を他人に實際上利益あら

しむるに堪ゆといふことはおのづから別事たりとす。茲に一の青年醫學生あり、此人醫學の内外科の學理及び應用を研究し、各科に於ける有數なる大家先生の講義を聽きたりとも、たゞ此のみにては直ちに良醫と稱するを得ず。醫學生が卒業試験に當りて、彼が唯諸大家の講義には一回の欠席もなく之に列り、教科書參考書を悉く涉獵し、又は人體の構造疾病の理を知り、其治療の性質効力等を究めたりとて、未だ完しとは謂ふべからず、彼は猶此上に問題として與へられたる急病者に應じて與ふべき藥石、及び如何にして特別なる病名を扱ふべきかを明かに答辯せざるべからざるなり。

茲に一例として左の醫學生の試験問答ありと假定せよ。曰く「卿は今阿片機那を過度に服用して昏睡に陥らんとせる者の治療を委托せられたらんには如何に之を取扱ふや。」答へて曰く「予は直ちにその人の甚だ危篤なることを予が責任の甚大なることを認め、此に對して最善の療法を用ゐざるべからざることを認むべし。」可なり、然らばかゝる急病者に卿が採るべき治療上の知識は如何。」曰く「予は三年間醫學を研究し、有名なる毒物學者の講義を聽き、且つ讀書の點に於ては同窓者の能く及ぶ所に非ずと自ら信せり。予は病者に告ぐるに其吞下したる阿片機那を胃腑中より取出さば生命を全うし得べきことを以てすべし。」然り、若しその病者にして昏睡して卿の言語を聽き分くると能はざるか、又は治療せらるゝとに氣付き得ぬ場合には如何。」答へて曰く「嗚呼予はか

ゝる場合に際しては施行すべき所のことを精細に答ふるに能はざるなり。予は忠實に醫學を研究し、人身の生理、藥劑治療の萬般のを知れり。予は如何なる場合にも其疾病の現狀を診察し、而して後ちその状態に應じて最善の療法を擇ぶを常とす。予は豫め爲さんとする所のことを明答するに能はず。」曰く「卿にして若し此病者を救ふべき方法を知らずとせば、卿が何の藥を投すべきかその決斷を爲すの間、その病者を卿の手に委ぬるは甚だ危険なるにあらずや。たとひ卿は最良の講義を聽き、數多の醫書を讀めるにも拘らず阿片機那過服の病者は終に卿の手に死せん、予は如何にして此病者に施術すべきかを卿が知れるに非らざる以上は、卿を稱して應病與藥の人といふを肯はざるべし。」

時に傍に在りて此問答を聽きおし者あり、其見る所の治療の法を述べて曰く「予は未だ嘗て醫學の講義を聽きしとなく、又多くの醫書を讀みしとなし、されど予は今先生の問ひ玉ひし如き患者に對して醫博士の施術を傍觀せしとあり。若し手にして貴問の如き場合に遭遇し、他に治療すべき人これ無き時には予は此患者に芥粉又は石鹼を混化したる微温湯を一時に三合ばかり頓服せしむべし、而して若し其効驗の見えざる時には予が指を患者の咽喉に差入れて以て其毒物を吐出せしめ、而して後ち熱く濃き茶又は珈琲を吞ませ、床上に安臥せしむべし、かくて摩擦或は湯たんぽを用ゐて呼吸

及び脈搏を持続せしめ漸次快方に趣かしむべきなり。曰く「大に善し、是れ實際的なり。實に如何にして施術すべきやを知るとは斯る場合に於ける最良の知識といはざるを得ざるなり。」

凡そ如何なる職業も醫術に於けると同じく、大は國家の經營より小は食物の鹽梅に至るまでその之を經營し鹽梅する該博なる知識を胸中に藏すると同時に、如何にして之を經營し鹽梅すべきかその方法を知るは尤も切要なること爲す。

抑も日曜學校の教師にまさりて其事業を爲すに最良の方法を知るの必要なる者あるべし、而してその方法を知らざるによりて此最良の事業に失敗せるもの又日曜學校教師より多きはなからん。嘗て新英洲に開かれたる日曜學校地方會に於て此の如何にして教授すべきかその方法を知ることにつきて討議せられしとありき。時に一人の曰く「若し教師にしてその教授すべき事物の知識富贍ならば如何にして之を教授すべきか、その方法を知るは最も容易のことならん」と。他の一人之を駁して曰く「かの酒樽を見ずや。その空隙もなく充滿せるが爲めに栓口を引きあくるも酒の注下するとなし。之を注下せしめんとするには栓口以外に一の穴を穿たざるべからず、故に人は先づその何處に穴を穿つべきか之を知らざるべからず」と。旨あるかな言や、實に學問の富贍は頼んで以て教授の最善なる器と爲すべきものに非ず、又學問の淺薄は今日日曜

學校教師の大猷陥といふべきものにあらざるなり。酒樽の適當なる處に穴を穿つて始めて栓口より酒の注下せる如く、富贍なる學術もその用法を究めざれば生徒に益を爲さざるなり。

教授の方法は頗る多し。一の方法によりてあらゆることを教授し得べからず。あらゆる教師は同じ方法を用ゆると能はず。あらゆる方法は各生徒に均しく適するものに非ず。要するに教授すべき事物の如何、生徒の如何を視て隨時適宜の方法を用ゆるに在り。

第三章 教授の要素

緒言

吾人は今や教授法に於ける主體よりその諸要件に論じ移らんとす、換言すれば、吾人が將に教授せんとするに當りて必ず先づ準備せざるべからざる所の者より現に教授するに際して必ず有せざるべからざる所の者に論じ移らんとするなり。前にもいひしが如く教授には二様の性質即ち一方には教授あると共に他方には學習あるが故に、其要素にも三様あり、即ち教師も有し生徒も有する分と、教師生徒合同して有すべき分

と是なり。

夫れ教師は己の有する所の知識を傳へんと心構へし居らざるべからず、生徒は己の欠乏せる所の知識を受け補はんとし居らざるべからず、而して教師と生徒とはその授受の際に於て心を同うせざるべからず。教師に生徒なくんば教授する能はず、生徒に教師なくんば傳習する能はず、教師と生徒と同心ならざらんか決して授受の功を成し完うする能はざるなり。故に其教場に在るや、先づ生徒は我に教授せんとする教師の言語指示に注意留心せざるべからず、次に教師は我が教授せんとする所の事物を明白に解釋し説明せざるべからず、而して後ち教授と學習とは教師と生徒との同心協力によつて始めて能く各其効果を收むるを得るなり。

是故に教授法の要素は教師としての地位より論ずる時は、生徒をして我が言語指示に注意せしむると、我が教授せんとする事物を明白に解釋し説明すると、及び生徒をして我に同心協力せしむるとの三件なるや明かならん。若し此三要件なき時は其教授は決して完全なるものに非ず。

第一節 生徒をして我が教授に注意せしむる事。

教師既に教場に臨み、生徒我が前に在り、われその個人的性行を知り、我が教へん

としつゝある事實又は眞理をわれ自ら能く知悉し、且又如何にして教授すべきやその方法を熟知せりとも、若し教師にして我が言説する所に生徒をして注意せしむるとなくんば如上の諸準備は一の効果を收むる能はざるなり。生徒わが言説に注意するとなくんば如何に善良有數の教師たりとも其生徒には教師たる能はず。最優等の教師も最劣等の教師も生徒の注意を得るとなくば更に擇ぶ所なきなり。

謂ゆる注意とは何ぞや。曰く我が知らんと欲し了解せんと欲する所の事物に精神心意を集注するとなり、凡てのものを忘れて我が知らんと欲する一事に我が一身を投與するとなり。夫れ注意に沈黙あり、然れども時に不注意又は坐睡より來る沈黙あり。注意に凝視あり、然れども時に目的もなく徒に張目する所の凝視あり。注意に靜聽あり、然れども人はその乗れる車輪の輾轉たるを聞き、途上に工場の喧々囂々たるを耳にし、冬夜家に在りて戸外の風雨の慘慄たるを聞くとも更に心に留らざるなり。人はわが周圍に間斷なき喧囂雜鬧のなかに在りて、その讀む所の書籍に、その思案せる事務に、その審査する繪畫にその心思を集注するを得べし。注意に思望あり、何人もその健康ならんとを思ひ、その名譽あらんとを望めども而かも之に注意せざるもの少しとせず。故に眞の注意には沈黙、凝視、靜聽、思望を包含し、確乎たる意思を以て我が知らんと欲する所の事物に熱中するを注意とはいふなり。されば生徒が斯の

如くに注意するに非る以上は能く之に教授し得る所の教師は世界廣しと雖も一人も之れあらざるべし。

クリケット戲を爲して、若し對手の舉動に注意するとなくんば、何ぞ之と勝敗を争ふを得んや。銃獵に出で、若し注意を爲さざらんか、何ぞ鳥獸を獲るを得んや。夫れ遊戯すら注意を要す、況んや新に知識を得んとするに當りて注意を欠きて以て如何ぞ之を得るとあらん。我は生徒をして注意の心を起さしめずしては教授を試むると能はず。生徒は知識なきも可なり、聰明ならざるも可なり、善良なる性質ならざるも亦可なり、我皆之を教へ得べし、然れども若し一の注意の彼に存するなくんば、我が教授は斷じて行はるべからざるなり。

軍隊に於けるも亦然り。將校の権力は其統率する兵卒の中に存し、兵卒の勇猛は將校の指揮に存す。故に將校と兵卒とは相待つて以て戰陣の功を立て得べく、兩者の一を欠かば唯敗亡あるのみ。而して將校如何に堪能なりとも、兵卒如何に訓練せられ経験ある者なりとも、今行動を爲さんとするに當り、その大將より指揮の先聲として常に發せらるゝ所の一語あり、即ち「氣を付け」(注意)是なり。兵士は列を整へて立てり。彼等の靜なると林の如し。彼等の兩眼は一に大將の面に注げり。彼等の双耳は大將の囁きをも聞きもらさじと聳てり。而して其心は大將の命とあらば敢て水火の中に

も飛び入らんばかりに、活力あり、決斷あり、熱心あり、且つ同心協力の精神に富めるなり。數百千年間の經驗は將帥が先づその部下兵士の注意を得るとなくんば如何なる戰爭にも勝算なきとを一般軍人に教へたりき。而して世界の凡ての經驗は指導者の言説に注意するとに未だ訓練せられざる生徒は既に此種のとに訓練せられたる兵士の如くその従事する業に教師と共に同心協力するに非ざれば、決して學習の効果を收むると能はざることを證明するなり。

殊に日曜學校に於て生徒をして注意せしむるとは最も必要にして、又最も難きものたり。又初めに生徒に注意せしむるとは猶爲し易しと雖もその注意を持続せしむるは尤も難事たりとす。夫れ如何なる教師も先づその生徒の注意を得ずしては教授を爲し始むると能はず、而して教授の半途にして、生徒の注意を失ひなば之と共に我が教授も其効用を中止するなり。教師に取りて生徒の注意を持続せしむるとの教授上大切なるは猶網渡りする者のその中心を保つの大切なるが如く、一旦その中心を失はば顛倒すると同じく、教師も生徒の注意を持続せしめずんばその業は失敗に終らんのみ。故に教師が教場に臨むに當り、又その教授を爲すの間に際して最も切要なる問題は「予は説明せざるべからざる所の事物を説明しつゝあるか、及び生徒が咀嚼し會得し得るやう説明しつゝあるか」には非ずして、却て「予は生徒の注意を持続せしめつゝあり

や否や』なりとす。教師にして此點に失敗せんか、其人は教師たるの價値なき者なり。抑も如何にして生徒の注意を得んか、如何にしてその注意を持続せしむべきか、是れ實に教授の技術として、我が受持級全体の情況及び生徒個々の性行を洞察して、深く思考すべき者なりとす。然れども教師にして、われ先づ生徒の注意を得ざれば教授を爲し始めがたく、その注意を持続せしめざれば教授を爲し續けがたきとを了得するまでは教授法の第一要件を悟らざる者と謂はざるを得ざるなり。

第二節 我が教授すべき事物を明白に爲す事。

今夫れ教師胸に該博の知識を蓄へ、之を教授する方法を知り、且つ教授せんとする生徒の人と爲りを知悉し、而して教場に出で、は生徒は熱心に教授を受けんとて注意するに當り、教師には茲に新一の責任生ずべし、則ち我が教授せんと欲する事物を明白ならしむるとなり、眞理を明白ならしむるは唯その眞理を述ぶるよりも猶以上の方法を要すべきなり。

抑も眞理は唯口舌を以て之を他に傳ふると能はずして、他の方便を假るを常とす。思想傳達の方便としては言語、形容、若くは繪畫、模型等なり、然れども如何なる場合にてもその方便は單に思想觀念の符號たるに止りて、思想觀念そのものに非ず。教

師の使用する符號は時として生徒に解し得るものと解し得ざるものとあり、若し生徒に明白に解し得られ、又絶えず然るにあらざれば教師は必ず教授の効を收むると能はざるなり。

言語は繪畫、模型等目に見るべき所のものよりは其事物、眞理を説明するに力少きものなり。夫れ言語なるものはその意義を知らざる所の者には一の用を爲さざるものなり。『好む』又は『好まず』といへる言語は日本語に通せる人には能くその意義を解し得れども阿弗利加人、近くは支那朝鮮人にもその何の意たるや判然たらざるべし。若し形容もてその我が心に合ふと合はざるとを示めさば世界廣しと雖も通せざる所なからん。『犬』といひ、『薔薇』といふ語も、他邦人には更に通せざれども、若しその形を畫きて示さば、彼等は各自その邦語にて何といひならはしたるにも拘はらず直ちにその如何なる動物、如何なる花なるかを了解すべし。然れど形容も、繪畫も、言語も之を細心して使用するに非らざれば全く其用を爲さざると無しとせず。

形容状態はいづれの國も同じからざるものあり。西洋國にては寺院若くは他人の邸宅に入る時は帽を脱するを以て敬禮の標號と爲せども、東洋のある邦國にては帽は脱せずしてその穿てる靴を脱すといへり。繪畫といへども、之を觀る者の想像力の發達如何によりて、單に略畫略圖にて足れるものあり、又は寫眞を以て委細に示めざれば

ば通せざるものもあり。故に目に見るべき物體、形狀も教授上の方便として悉く目的を達し得べき者に非ず。教師はこれが使用上頗る細心ならんことを要するなり。

言語は顔色手足の形容、繪畫摸型の物體等よりは思想傳達の方便として誤解最も多きを以て教師は殊に之を明白ならしむるに細心ならんことを要す。蓋し説教者の常に使用する重要な言語の大部分はその聴衆の實際了解せざるもの少しとせず、又日曜學校教師が依て以てその思想を傳達せんと欲する言語にして、生徒にはその何の意なるやを解せず、或は誤て惡しき意義に解し、全く反對の義に取り、又は事實を混同すること其例甚だ多し。此等の誤謬の發見せられ、匡救せらるゝに非ざれば眞理を明白ならしむるとは到底望むべからざるなり。予は嘗て自宅に於て日曜學校の課程を兒女等に教へしとありしに、女子のいたくヨセフの物語を喜び聽きぬし者ありしが、その日課の創世記より馬太傳に移りしに、その女は聖子を守護して埃及に逃れしナザレのヨセフは、昔し埃及に住みて顯達を極めしヤコブの子ヨセフと同一人なりと誤解したり。予はその誤解を發見して、却て自ら慙愧せり、何となれば予は此同名異人のヨセフについてその人物及び時代の相違を明白に説明し置ざりしと信じたればなり。予は又嘗て某所の日曜學校に於て其日課たる埃及に於けるイスラエル人につきて問答せしとありき。予問て曰く「此時イスラエル人は何といふ國に住みたりしや。」

徒は異口同音に答へて曰く「埃及國なり。」曰く「然り、イスラエル人が埃及に在る間は如何なる情態なりしや。」曰く「奴隸。」予は彼等の應答水の流るゝが如くなるに驚きしが、彼等は果して其答ふる語の意義をも了解しをれるか如何と思ひて、更に問て曰く「奴隸とは何の義なりや。」數人の生徒聲に應じて「奴隸とは家(家屋の意)の名なり」といふ。是に於て笑聲一時に起れり、而して他の生徒等更に答へて曰く「奴隸とは囚繫せられて勞働する者なり。」予は直ちに前者の誤解の理なきに非ることを發見せり、萬國日曜學校學課本季の第一課程は「奴隸の家(家族の義)」と題せるものなりしを以て其字義を究めざりしより、此の如き誤解を來したるなりき。かゝる誤解し易き言語文字は先づ最初に明白に解釋し置くと至て緊要なりとす。又嘗て一紳士の子に告げしとあり、その人少年の頃自己の罪惡を覺知し、煩悶に堪へがたく、遂に其備主にして基督敎信者たる主人に面し、如何にせば可ならんかと謀りしに、主人答へて「今や子が此際唯一の望みは子の贖罪として耶蘇基督を受け容るゝに在り」といへり。「贖罪」とは何の義なりや、この人固より知らず、主人の基督信徒も明白に説明せざりしを以て、この人には此語却て救拯の門を開かずして、之を閉鎖せりきと。

是故に教師は其使用する所の言語にして、生徒の之を解し得ざるもの、又は一時なりとも誤解し易きものものは務めて之を避けて用ゐざるをよしとす、若し止むを得ず

して之を用ゆる時は十分明白に之を説明し、その言語、その真理を遺憾なく生徒に會得せしめざるべからざるなり。從て教師は自己に明白平易の言語なればとて安んじて使用するを得ず、又おのが教へたる真理を生徒がおのが使用せし言語を以て言説すればとて、その生徒は明白にその真理を會得したるなりと思惟するを得ざるなり。夫れ説話は直ちに是れ教授に非ず、又諳誦を聴檢するとも亦教授といふべきものに非ざるとは吾人の既に論究せし所なり。教師が説話に於て使用する言語は時としては生徒の了解し得ざる所のものもあり、又時としてはその語の意義は了解するも、猶教師の述べたる主意、目的を誤解するとなしとせず。故に教授上に於ける言語は最も注意して使用せざるべからざるものなり。

生徒をして真理を明白に會得せしむるは、教師のみづから能くその真理を明白に會得し居るに在り、又その生徒の知識の程度及びその思想、用語の如何をも明白に知悉し居るに在り。猶又生徒に於ては熱心なる注意と、教師に在つては真理を説明譬喩する最良の方法と互に相待たざるべからず。教師は吾が教へんとする真理を明白に解説せざる時はたとひ自己は能く之を會得し居れりとも、生徒をして會得せしむると能はず、從て其教授は勞して効なきに畢らん。教を受くる所の人に真理の明白に會得せられざる限りは所謂真理の教授なるもの一もこれなきなり。

第三節 生徒の同心協力を得る事。

教師既に生徒の注意を得、又教師自らその教へんとする所の事物を明白に解したるのちは、教師生徒の協同の精神によりて始めて教授の業を完うし得べし。若し教師と生徒との間に協同の精神を欠く時は教師が生徒に教へんと欲する事物真理は如何に力を盡すも終に徒勞に歸すべし。生徒の同心協力なくしては如何なる良教師も決して眞の教師たるべからざるなり。

心理學者は皆人間の心はその志なくしては知識を得る能はざると、單に耳に入り目に觸れたるのみにては、その物を永久に記憶し能はざるとを肯定せり。故に一の事物を知得して之をわが知識たらしめんには之を言説するか、記述するか、若くは少くとも意思の自覺的活動によりて之を消化し成形せしめざるべからざるなり。吾人は日常その性質、意義を知得せずして、多くの聲音を聞き、その形体を知得せずして、わが目の前に現はるゝ多くのものを見るべし。何人能く街上を歩いて偶ま耳に入る所の音調や、又は我が耳を聳せしめんばかりなる機械廻轉の響音を仔細に識り得んや。何人能く公會の席上にて邂逅する所の衆人の風采容貌を識別し、又は旅行の途上應接遠あらざる山川木石寺社堂塔の形状を記憶し得んや。何人能く一たび耳に入りた

る凡ての真理、又書籍新聞紙にて讀過したる凡ての事實を學得し得んや。何人が能く志なく、わがものとせんとして心を開くとなく、之を知り求めんとはせずして我は此事彼事を學び得たりと言ひ得る者あらんや。

吾人今一の説教を聴き、之に注意し、能く之を了解するも、その真理を悉く我が有たらしめ得んや。吾人は常にその説教の題目、演述の次第、又はその大主意を次週又は翌日他人に語り聞かせ得るほどに能く記憶し得んや。故に此説教の我心に存し明かなる間に我家に歸り、その大略又は主意を家人に語り聞かすとも、或はその題目、真理を記録し置くと、之を數年の久しき間わが知識として保有するとは實に難きとなり。又吾人が面白き説話を聴き、心の底より笑ひ興じたりとも此の笑ひ興じたるもの記憶に存すると共に、此の笑話の筋も悉く記憶に存せしめ得るとは甚だ難かるべし。然れども吾人が此笑話を兩三回も反復して他人に語り聞かすとありたらんには、則ちこれは新に我が知識の一となりて永久に記憶に存するものとなるべし。蓋し吾人が讀み若くは聴きたる一の真理を他人に語るか、或は之を未だ會得せざる所の人に説明するか、若くは又此真理を一の目的に適用せんと務むるか、此の如き場合には此真理は一層我が心に明白となりて、わが知識となるとは唯之を匆々に讀過し、漫然聽聞せし比に非らざるなり。吾人が聖書研究會に於ける經驗も亦此の如し、吾人は教師の語れ

る所にして後に至りて記憶し得ざる所のものあれども、當時吾人が言に發せしもの、たとひ吾人には其時極めて新らしき思想なるにもせよ一旦之を教師に向ひて發言辯說せし所のものは常に忘却するとなきなり。即ち一の真理に關して吾人の見解を吐露せんとて、内より我が心を開くはやがてまた自ら閉ぢ居たりし心の奥底にその真理を迎ふるの道たるなり。

授受の際に於ける相互の同心協力の必要なるとは今日の學者の始めて唱道したるに非らざるなり。ソクラテースは其教授するに當りて先づ學生に問を發し、以て其心を啓發し、教授上に其同心協力せしむるを常とせり、且つ學生たる者は唯講説を聞き、又聞く所のとを諳記するのみならず、その事物真理を「自ら探究する所の者」たらざる可らざるを主張したりき。キケロも亦同じ意義を他の方面より述べて「吾人は教ゆるによりて自ら之を學ぶ」といひ、支那の古典にも亦「教ゆるは學ぶの半」とも之れあり。モンテレーヌは「凡そ人は自己の智慧に因らずしては決して賢明なると能はずと予は斷言するに憚らず」といひ、且ついはく「ソクラテース及びアルセシラウスの如き先づその門人をして語る所あらしめ、而して後ち之に告ぐ」と。第十六世記宗教改革後輩出したる教育改革家の所説は皆「生徒をして教師より直ちに教授せらるゝよりも却て教師の指導の下に生徒自ら己を教ふる」を良法とせり、其理由は「學

生が自己智力の作用によりて發明する所の事物は教師より直ちに話説せらるゝよりも勝れり」といふに在り。故エール大學總長ノア、ポルタア嘗て讀書に關していへらく「吾人が閱讀せし所のことを記憶せんには之を先づ吾人の有と爲さるべからず、吾人は其著者の地位に立ち、^{その}思想をたどり、其事實を究め、その推論を肯定若くは否定し、その情緒及び意志の奥底に入りて之を研究せざるべからず」と。げにや學習の道たる、學生の注意深く自動的協同作用なくしては斷じて一の得る所あらざるなり。

博士アーノルドは教授上生徒の同心協力の効を論じて「兒童が自ら研究する勉勵は其勉勵の效果として得たる知識より百倍價值あるものなり」といひ、ハーバート、スベンツァアも「兒童には成るべく少しく教へて、成るべく多く自ら發明するやう仕向けざるべからず」といひぬ。その教授上生徒の同心協力の絶對的必要についてはハート教授曰く「吾人が生徒に教へんとする學問知識は彼等が之を咀嚼し吐露し得るまでは、決して彼等の有たらず……彼等は之をおのが口に上せ言ひあらはし得るまでは明白に之を會得し、永久に之を持續し得ず。是れ實に心理的作用の法則たり。吾人は何事にても之を他人に傳ふるによりて、之を我が心に固着せしめ、之を他人の爲めに説明せんと力むるに因りて吾人自己の心に之を明白ならしむ。語を更へていはば則ち吾人は之を他人に話説するによりて却て之を學び知り、之を與ふるによりて却て之を得るな

り」と。蓋し生徒の同心協力はその思考の上にも、話説の上にも實に教授上最も緊要なる要件たり。

大學又は専門學校に於ける高等なる學生に對する諸記若くは講義の教授法は是れ別問題なり。然れども此等の學生は單に教師の講義を聴くのみならずして、或は之を筆記復習し、或は定期の試験を受け、以ておのづから教師と同心協力を爲すなり。故に教授上講義の制は唯年齢學術共に進みをりて、自ら智識を獲んとて教師と協同の精神を有する者にのみ有益なる者なり。僅か數回もしくは數十回の講義を以て漫然聽聞する所の兒童にいろはを教へ得べく、掛算表を教へ得べく、文典の諸法則、文字の綴方等を教へ得べしと信せんや。

教授と説教とは亦おのづから異れり。説教は唯わが説かんと欲する所を説くのみ、然れども教授は然らず。人は他の聴くと聴かざるに論なく説教し得べし、然れども何人も他が心を我に傾けて學習するに非らざれば教授するに能はざるなり。神嘗てエゼキエルを説教者としてイスラエルの族に遣はし給ひし時宣はく「われ汝を彼等に遣はす汝彼等に主エホバかくいふと告ぐべし彼等は悖逆の族なり彼等は之を聴くも之を拒むも豫言者の己等の中にありしを知らん」と。説教者の本分は此の如し、聴衆をして彼等の前に説教者の在るを知らしむれば説教者は其職責を盡くしたるなり。然れ

ごも教師の職責は此の如く容易には盡くし得ざるなり。

或は言ふ者あらん、たとひ漫然として、説教なり、講義なり、若くは課業なり之を聽聞して一の記憶する所なしとするも、多少の得る所なくんばあらざるべしと。予は是に於て適ま思ひ浮びし二の話あり、一は牧師の説教の効果を布曝しに比したる蘇國婦人なり、赫々たる太陽の下、綠草の上に新しき布片を敷きて絶えず之に灌水すれば、水は此布片に何の痕跡を留めざるもその効果は布片の純白となりてあらはる、一は竹籃を流水に投じて水を汲まんとせし男なり、幾たび投じて幾たび汲むも其努力は一滴の水をも汲み取ると能はざれども、その竹籃は爲めに極めて清潔なるものとなれり。此二笑話は實に毎週欲かさず教會に出席するも一の説教題目も聖書の眞理も學び知りたるとなき懶惰なる聽衆には適切の針砭たると同時に忠實なる説教者に對しても、たとひその教訓の効は奏せざりしも、その感化の及ぶ所あるを視て、聊か慰むるに足らん。且つ自稱教師も亦此笑話によりてその謂ゆる教授なるものが、たとひ感化よりも教訓を目的としたるにもせよ、亦以て自ら慰むる所あるべし。

心を掃清すると心に供給するとはおのづから別事に屬す。若し説教の感化を受け、心裡全く淨清とならば是れ心は掃清せられて空虚となりたるなり、然らば何を以て之を充たすべきか、七の悪しき鬼をして此に居らしむべきか、或は「神の人の完全を得

て諸の善事を行ふに欲なからんために教誨と督責また人をして道に歸せしめ又義を學ばしむるに益ある』所の聖書の庫たらしむべきか。此問に答へんには、教師の目的よりいへば全く教師生徒の同心協力に存すと謂ふべし。故に若し教師にして眞に生徒がその心裡の邪惡を掃清せらるゝと共に良善を以て充たされんとを欲しなば其生徒をして此の良目的の爲めに教師と協同の精神を喚起せしむるとに心を用ひざるべからざるなり。

されば一人の教師となるに二個の人を要す。教師は固より其一人にして、他の一人は生徒なり。教師は到底生徒の補助を得ざるべからず。教師は生徒の協同なくとも、其品性若くは言語によりて知らず識らざるの間に生徒に感化を與ふるを得べし、然れども其協同を得ずしては何物をも教授すると能はざるなり。

吾人は教授法の哲理を論じて既に其性質、主體、要素を研究せり。謂ゆる教授なるものは我が教へんと欲する所の事物を單に話説するのみに止るに非らず、又學ぶべき所の課程の諸誦を聽檢することに存せずして、實に教ゆる所の教師の業と、學ぶ所の生徒の業との二つが包含せらるゝ所の者にして、換言すれば教授は教師には既に識られをりて生徒には未だ識られ居らざる所の事物を、教師が生徒を提命啓發して之を學び之を知らしむることなるを論述せり。吾人は又教師は我が教へんとする所の生徒の

人物如何を識別すること、我が教へんとする所の課程を己先づ明白に之を知ること、かゝる教師がかゝる生徒にその課程を如何にして教授し得べきや、又教授上の根本的要素にして又學習的要素たる所の者はおのづから教師に存する分と、生徒に存する分と、教師生徒を通じて共に有すべき分、詳言すれば生徒には注意を要し、教師には明白なる知識を要し、教師生徒を通じて教授受の上に協同の精神實行を要することを討究したりき。上條のこと既に明白たる以上は次に思索研討すべき問題は則ち教授の方式なり。即ち教授學習上其初步と、進歩の中間と完成との三期に於て其次第に従つて執るべき所のとを如何に爲すべきか是れなり。

第四章 教授の方法

緒言

凡そ事、その必然爲さざるべからざる所のものを條擧すると、此爲さざるべからざる所のものを爲すには如何なる方式を取るべきかを指示するとはおのづから別事に屬す。何事に限らず前者を指示するよりも後者を指示するは頗る難事たるが故に、こゝに日曜學校の教師たらんと欲する所の人にその教師として特に必要な條件を會得せしむるよりも、此必要な條件を如何にせば能く完うし得べきか、之を心に明白なら

しむるは尤も爲し難き所と爲す。蓋し教授の學理を知ると共に、其技術を知らざるべからず、學理と技術とを併せ知りて始めて良教師たるを得べし。

請ふ復た反覆して之をいはん、夫 教授には教師と生徒とを要す、生徒には生徒として爲すべきの事あり、教師には教師として爲すべきの事あると共に、教師生徒協同して共に爲すべきの事あり、生徒は受業に注意留心を要し、教師はその教授せんとする事物を明白にせざるべからず、而して教師と生徒とは教師が教授する所の眞理を生徒が會得する様相共に同心協力せざるべからず、教授の性質既に此の如くなれば次に來るべき實際的問題は如何にせば教師は教授上我が當に務むべき所の分を完うし得るのみならず、猶我が生徒をして其分を完うせしめ得べきか是なり。

抑も教師は教授の方法を知りて之に遵ふに非らざれば、決して教授の功を擧ぐると能はず。吾人は之れより其方法の研究に入るべし。

準備の方法

第一節 如何にして生徒の人となりて研究すべきかの事

夫れ學問あり、經驗ある男女の教師にして、均しくその授業に失敗する所以のもの

は職として其生徒の個人的性情の差違を甄別するの明なきに由れるなり。此の如き教師はたとひその性情は惡篤なるも、その學識は該博なるも、而かもその雙眼は實に失明せるなり。彼等は教授するに當りて其生徒の心意性情の各自同一ならざるに注意することなく、遊戯これ喜ぶ童男童女も、遲鈍入り難き壯年男女も、基督教信仰の家庭に養育せられたる兒童も、日曜學校に入れるまでは未だ嘗て一たびも宗教的訓誡を聴きたるとなき人々も一切問ふところ無し。故に此等の教師は其受持級を視ると同等同位の人の集合せる一學級にして、生徒は幾十人ありとも同一人の如く、隨て課業は唯一様の講説にして、人を視て教を説くとなし。此の如くにして之を教師といふ、誰か能く之を信せんや。予嘗て一人の軍隊布教師を知れり。此人實に善人にして、聖書に通曉せり。然れども人の性情を識らざりき。彼れの幾多苦辛の後軍隊は布教師の爲めには失望無効の地なるを發見し、予に告げて曰く兵士は我が説教を聴くを喜ばざりき、恐くは我が説教の解し難かりしならんと。その説教を問へば彼が平素教會に於て述べし所の説教を再演せしとなり。夫れ平和の時と戦争の時とは人の性情その趣を異にせり、その平時安怡の人に説くの法を以て、之を直ちに戦時激奮不安の徒に説く、誰か能く耳を之に貸さんや。日曜學校の教師たる者は能くその生徒の性情状態を甄別して至適の教授を爲すに非らざればその勞して効なきと此軍隊布教師と擇ふ所なかるべし。

し。要するに人の性情状態を甄別する普通の能力を有し、教授するに普通の知識を蓄ふる所の人にして、若し個人的教授を爲さんとの目的の爲に其生徒を個人的に研究する最良の方法を心に得るならば其實際教授上に利益少からざるべし。

其方法として先づ第一に必要なは其生徒の甲乙互に相異りて特色ある性情状態を思察するとなりとす。是れ久しく世の教育家より看過せられたる點にして、多くは少年時代普通の特性を思察し、又は童心の心理的現象を研究するに止まれりき。よし此等のとを研究したりとすも、そは唯一般兒童に關する智識にして、一兒童を特に思察したるに非ず、若し兒童を個々特別に研究し、之に至適の教授を施すに非ざれば、終に一般兒童に教授すると實際上決して爲し得べき所に非ず。故に我が教授事業を成功せしめんために預め研究せざる可らざる兒童は兒童界の大觀的兒童に非ずして、我が受持級に屬する個人的兒童なりとす。

請ふ我が米國都市の支那人町に往きて支那人を視よ。彼等は中肉中脊にして、容色黄に、黒き毛髪を有して長く後に垂れしめ、鬚髯なき顔容は兒童らしく、且つ柔和に見え、白き木綿の上衣に、青き袴を着し、白き襪に穿てる靴は上部黒き布にて、白き縁なる厚き底の奇形なるものなり。是れ支那人の特異なる形容として更に間然する所なし。然れども支那人のうち又おの／＼異なる所なからんや。個々に就きて之を視なば

千差萬別にして更に際りなかるべし。兒童も亦然り、之を壯者老人に視ぶれば則ちすべ
て皆兒童なり、然れども之を個々に檢すれば千狀萬態極りなし。故に我が教授事業を
成功せしめんため研究せざる可らざる所の兒童は兒童界の大觀的兒童に非らずして、
我が受持級に屬する所の個人的兒童なりとす。

試に我が受持級に屬する生徒の一人を擇び研究し見よ。彼は極めて聰明なりや、若
くは極めて遲鈍なりや、はた普通平凡の人物なりや。彼は家庭の教育によりて聖書の
史話の大要を豫め知り居れりや、若くは一切聖書に關しては知れる所なく、我が日曜
學校に於て始めて之を知らんとする者なりや。彼は口給の人にして、其知れる所は悉
く言はんとし、人に聽くよりも多く語らんとする性嚮の者なりや、或は無口にして、
我が能く知悉せる所の事にてさへ自ら進んで之を言ふを欲せざる所の者なりや。溫厚
の性質を有せるか、はた兇險か。寛大にして君子の風ありや、はた私慾多く、人に好
れざる氣質なりや。彼は多血性にして、動もすれば感情に驅られて事を爲す所の者な
りや、或は冷々として平淡遲慢なりや。若くは容易に他に雷同し感化せらるゝ所の者
か、はた獨自一己の見地を有するか。凡て此種の諸問題は生徒を個々に察し、又比較
して視て、以て自ら解決せざるべからず。

又その級に於ても日曜日に於ても視察すると能はずして、而も教師の知り置かざる

可らざる多くのとあり、此等は日曜以外の日に於てし、生徒の家庭に於てし、其職業
の場處に於てし、教師生徒の各其教師生徒としてにはなく、知人として日常の交際
上に於て視察せざるべからず。即ち彼は善良なる家庭に養育せらるゝ者なりや、はた
紊亂せる家庭に在る者なりや。彼は善良なる兩親を有せるか、或は孤兒なるか、はた
邪惡の父母あるか。彼は小中學校に在學せるか、若し然らば其學力の程度は如何。彼
は他家他會社に通勤せる者なりや、若し然らば其職務に忠實なりや、或は怠慢なりや。
彼の家庭、職業、周圍の空氣は日曜學校の感化と協合せりや、はた背馳せりや。或は
其閑暇の時を如何に費すか。如何なる種類の書籍を愛讀するか。如何なる誘惑は彼の
殊に陥り易きものなるか。彼を善良の道に進めんには如何なる事が尤も強き誘導の具
となるべきか。彼の現時の嗜好、希望、弱點は何なるか。以上の中教師が直ちに能く
視察し得べき者あり、其他は彼の兩親、雇主、近隣の人、朋友等に問ひ尋ねて知るを得
べく、又は教師が彼と其家庭或はその執務の處、或は道側に於て自由の對話によりて
知り得べし。

次に知るべきとは生徒個々の現時に於ける知識の程度、行爲の標準、及び其現時の
信仰なりとす。生徒のうちには教師の豫想外に多くの知識を有するものあり。又頗る
知識の乏しきものあり。或は此點に關しては正確なる意見を有しをれるに彼點には甚

だ誤りたる見解を持し居れる者もあり。故に教師は最も巧みに問ひ試みて其知識の程度、意見の正不正を識別せざるべからず。昔し使徒パウロ、エペソの或弟子に向ひて「爾曹信者となりし時聖靈を受けしや」と問ひしに、彼等「我儕は聖靈の有ることだに聞かざりき」と答へぬ。是に於てパウロは彼等個々に教へ、而して彼等は始めて個々に聖靈を受くるに至れりしとあり。此種の問題の如きは實に今日と雖も宗教的教練を受けつゝある人々の爲めには、教理上よりしても道徳上よりしても同じく必要なるものと爲す。若し茲に一人の生徒ありて、此人禁酒禁煙の良習慣あれども動もすれば言語猥褻に渉るの弊あらば、此人は他の言語動作の慎重にして純潔なるも飲酒の癖ある人とはおのづから其教訓を異にせざるべからず。若し又廉潔ならず、信實ならず、安息日を守らず、孝悌ならざる所の者ならんには教師は其教授を爲すに先きだちて、豫め此等の事實を知悉せざるべからず。

夫れ善良なる教授を爲さんが爲め豫め生徒を個人的に研究するとは教師に取りて時間を費し、腦力を勞せしむると決して少小に非らざるなり。然れども此時間と腦力を費して研究する所なくんば各生徒に完全なる教授を爲し得ると萬々之れ無きなり。此種の研究は現今唯最良の日曜學校教師のみ之に従事し居れども、而かも苟も日曜學校教師たる者は凡て悉く之を爲さざる可らざる義務ありとす。而して此研究の必要に

して、且つ實行し得らるべき事たるはフレデリック・ア・フレイム派の一教師の言之を證して餘りあり、曰く「予は廿五人の生徒ある一級を受持ち、而して日々煩忙なる職務に従事せるが優に此等生徒の各自日常の行動と彼等一身上何物か需要なるを知るの時間を獲て以て彼等を個々としても教へ得べく、級全體としても教へ得るなり。其方法に二方面あり、第一はしかく爲す事は最も緊要にして缺くべからざるものたるは恰も我が毎日の職務と同じく一日も怠るべからざるが如く思考するに在り、第二は彼等が其精神上宗教上につきて我に問ひ詢ると同じく、彼等をして其日常處世の心痛困難をも進んで我に相談せしむるに在り」と。

此に由て之を觀れば自己受持の生徒を個人的に研究すべき時間も方法も獲得するに能はざる所の人は完全に生徒に教授すべき時間も方法も有せざる所の人たり。

第二節 教授の爲めに如何に學課を研究すべきかの事

生徒個々の研究畢りたらば次には此等個々の生徒に教ゆべき學課の研究を必要となす。抑も學課の研究とは何ぞや。其字句の諳記なりなや。字句の諳記は人をして能く其字句を背誦せしめ得べし、然れども其字句は我にも生徒にも沒意義のものたるべし。蓋し字句は眞理を載する所の器たり、故に字句は誦讀せざるべからず、會得せざ

るべからず、能く思考せざるべからず、否らすんばその學課中の眞理は決して發明せらるゝとなし。然らば則ち學課の研究上請記以外何物を要するや。

研究上第一に必要なは其方針を立つるに在り。凡そ研究なるものは方式により次第を追ふて進むに非ざれば成功すると少しとす。多くの教師は初めより研究の方針を立てずして、徒らに時間と腦力を費せり、是れ勞多しして功少き者なり。然れども研究上一の方針は凡ての教師に均しく皆適合する者に非ず。要するに其研究の方法方針より得る所の利益は説明の次第を整へ、教導の捷路を取るに在りと爲す。故に一層の知識を得んとし、進益する所あらんと欲する所の教師は或は自己が考案より出でたるものにもせよ、或は他教師が嘗て實驗して益を得たりし所の研究の方式を參酌するにもせよ、之に遵ひて自ら研究せば其利益を得ると必せりと謂ふべし。

教授ウイルキンソンの唱導したる教師研究の方針は「何事なりや。何故なりや。如何なる結果なりや」の三語なり。此は同教授の創意より出でたるにはあらず、故大家の所説に基きし所の者なり。教授曰く「是れ不朽の演説家の解剖なり。第一は事實、第二に事實の證明、第三には其事實の結果なり」と。此解剖は又之を敷衍して「五何」と稱せらる、即ち「何時代、何處、何人、何事、何故」是なり。之を一學課の研究に應用すれば則ち吾人は事件の起りし時代、其生せし場處、其事件に關係せる人々、其

事件の一貫せる事實、及びその教授上の適用等を次第して學び得るなり。

教師の學課研究に於て先づ第一に爲すべき所の事はその學課たる聖書字句の解釋なり、次には其字句の教ふる所、次には其教の適用なりとす。斯く研究するには參照附聖書、聖書地圖、聖句引用辭書、普通字書、聖書辭典等は必ず座右に各一本を備へ置かざるべからず。教師は研究するに當り必ず「此學課に記述せられたるは何事なりや、その人に教訓となるは何事なりや。我が生徒のために利益となり進歩となるは何事なりや」と絶えず自問自答せざるべからず。猶一層簡約して之をいは、「此學課中にて我が生徒に是非とも教へざる可らざるものは何なりや、及び我が自ら進んで教ふべき所のものは何なりや」なり。而して此第二の問題に答へんとするには必ず生徒を個人的に能く知悉しをるに非ざれば能はざるなり。即ち某甲には特に學課中の此部分、某乙には彼部分を、丙丁には夫々適當せる部分を教へんとて仔細に學課を研究し、「眞道」を正しく頒ち教ふるは其事業に「耻る所なき」所の各教師の義務なりとす。抑も一日の學課中には我が自ら進んで教へんと欲し、又教へんと務めざる可らざる所の條項よりも、教ふべき所の者は猶多く之れあるなり。故に生徒に學習せしめんと欲する所よりも一層多く自ら研究し知得て置かざるべからず。ゲーテも「生徒に學習せしむべき所の條項より以上を知らざる教師ほど惡しきは他に之れ無し」といひに

き。要するに問題は「此學課に於て我は何を知れりや」には非ずして「此學課よりして我が生徒に學ばしむべき所の者は何なりや」なりとす。されば吾人は我が生徒の個人的性情状態を知りし上、又その教授上の經驗よりして、正確に此問題に答へ得るまでは吾人は現學課教授の準備として未だ十分満足の研究を爲し了へたる者と謂ふべからざるなり。

教師として學課の準備的研究を完全にせると之を査檢することに最よき方法は我が教授せんとする諸點を簡短なる語句に自ら抄録するにあり。

第三節 學課教授に如何なる方針を立つべきかの事

教師はおのが生徒の姓名容貌を知りたる上に、其個人的知悉性行をも知悉し、又その學課を研究せし上に、生徒の情態需用に應じて適當なる教授の方法を探るべきことを知りしとするも未だ以て日曜學校の教授を開始するには足らざるなり。教師が教授上準備の三大要點は前節にも述べし如く、生徒を識り、學課を知り、善良なる教授法を知るに在り。此生徒學課の二者を十分に検討したる以上は必ず教授法を知り得て以て完全なる教授を施さざるべからず。教師にして我が研究したる學課を今之を學習せんとしつゝある生徒に教ふるに如何なる方法を以てせば完全に教授し得べきかといふと

を知らざる以上はその教師は決して其生徒に其學課の教師たるに適せざるものと謂はざるべからざるなり。故に教授上の方法方針は自己研究の方法方針と等しく教授上最良の準備として欲くべからざる所の者とす。

譬へば茲に渴者あり、水を欲すると急なり、一人之を知りて清水の充てる瓮を持來りて渴者の前に置けり。渴者と瓮と相距ると一間のみ、然れども其瓮の水を渴者の燒くるばかりなる喉に達せしむる方法のあらざる限りは渴者の渴は終に止む期なく、その水瓮は空瓮と異なるなきのみ。累々たる果實が餓者の頭上に垂れをるとも其手之に達すると能はずんば徒に餓者を焦慮せしめ餓死せしむるに止らん。今知識の富贖なる教師と其欲乏せる生徒と相對しみて、而して之を傳達すべき方法を教師の知らざる時は如何。是故に各教師はその學課教授の準備中に如何にして我が知れる所を生徒に知らしむべきかにつきて、心してその方法を設け方針を立てざるべからざるなり。

固より教授の方法は夥多にして、或は講義的教授といひ、或は圖解的教授といひ、或は問答的教授といひ、或は分解的教授、實物的教授といひ、教育上の冊子又は論說等に參見せる教授法の術語的名目を見て初心の教師は其いづれに適從して可なるかを知らず、却て其爲めに躓き妨げらるゝ者少しとせず。然れども又一方より之を視れば此等の教授法は多くの日曜學校に於て其教師等が有意無意の間に採用せる所のものに

して、之に術語的分類を爲せばこそ耳新らしくも聞ゆれ、實際に於ては左のみ眩惑せしめられ得べき所のものには非らざるなり。要するに吾人に取りて緊要なるは何を以て我が學課教授の方針と爲すべきかとの研究に非ずして、吾人が現に確たる一の方針を有し、之に由りて我が教授を開始するに在るなり。

若し吾人にして一學課を取調べて其中なる事實と眞理とを明白に十分に會得せしならば、更に又之を吾人の受持級に教授せんとの心にて反復して研究し、孰れが其主にして中心的眞理なるか、孰れが其附從的眞理なるかを裁斷せざるべからず。此に心に一の疑問生ずべし、此等の眞理の中いづれか果して我が全級生徒に最も切なりや、又彼等の個人的賢愚及び其需要に適するか、其中心的眞理なりや、若くは附從的眞理の一なりやと。若し吾人の爲さんと欲する所は單に聖書の記事及眞理の解釋たるに止まらば吾人は唯その學課に記載せられし所を逐節講義せば足れり、然れども若し吾人は生徒個々の教師たらんと志し、而して彼等は一時に其學課の諸眞理を會得する能はずと認めたる時には吾人は彼等生徒個々にそれぞれ適切なる所の、又彼等個々の知識の程度に合へる所の眞理を選択して教授せざるべからざるなり。是れ實に吾人がその學課を通観し會得したる時取るべき教授方の緊要なる第一歩たり。凡そ聖書學課の教訓にして各種の級に各種の適用を爲し得ざるもの殆んど之れなし。聖書のいづれの

眞理も譬へば多角形を爲せる結晶體の如し、何れの方面を向くるも必ず光線は前に立てる者を射るべし。吾人が準備研究せる學課を教授するに當りて、その結晶體の何れの方面を生徒に向はしむべきか、吾人の尤も注意すべき所の者なりとす。

試に一例としてアナニアと其妻サツピラとの一話を舉げていはん。基督教徒を既に十分知得せる所の人々には、茲に難詰せられたる聖靈に對ひて僞れる所の罪を以て此一話の中心的眞理として極論し得べし。他の人々には此に因りて基督教徒の獻金を爲すに、初め獻せんとせし金額を中ごろ吝みて、其一部分を獻じたるを神は決して受け給はざることを教へ得べく、未だ自ら基督教徒なりと公言せざる所の人は此に由りて神は凡て已等の行爲を知り給ふのみならず、其心の裏までも讀み給ふことを學び得べく、又或る人々は神に負くとの愚と罪惡を爲し遂げんとするとの到底望むべからざることとを悟り得べく、又最も年少なる男女はおのれ等が虚言を語る時に神之を知り給ふと、並に虚言は神の目には大なる罪惡たることを此一話によりて學びて戒むとを得べし。此の如く一條の史話にして數様の教訓と爲り得るものなれば、吾人が此等の教訓のいづれを我が生徒に印記せしめんかと初めより心に思ひ設くるに非らざれば吾人は此話中に含有せる此等教訓のいづれをも能く教授すべく準備せざるものと謂はざるを得ず。

學課教授の方針既に立ちなば其實際着手の次第は如何。問答を以てせんか、將た講説を以てせんか。問答を以てせんとならば先づ何を問ひ初むるや。講説ならば如何なる講説を爲すや。日曜學校には問答書其他の書類なきに非ず。此等は教師又は生徒の學課研究上に資けなきに非ずと雖も實際の教授上には決して之を用ふべからず、教師も生徒も教場に於ては斷じて之を手をすべからず。殊に問答書の諸問題の如き、教師には大に參考に資すべきものなれども機械的に一々之に循ふとは決して爲すべきことには非ず、吾人は其生徒の如何に應じて適切なる質問を爲さざるべからざるなり。吾人は生徒に問ふべき諸問題を預め手帳に留め置くか、否らざれば常に注意して其都度能く準備するを要す。セント、アンドリュウ大學の道義學教授なるチャルマアス博士が嘗て日曜學校の教師たりし時その生徒に問ふべき諸問題を注意して書留め置くを常とせりと。若し教授上週又週斯の如く周到なる方針を設くるを以て必要ならずとする者あらば其人は必ず善良なる教授法に關してチャルマアス博士よりは勝りたる抱負知識のある人ならん、然らざれば何の抱負も知識も無きが故ならん。善良なる教師は常に其自ら選べる諸問題を認め置く者多し、是れ其質問に當りて特に拘泥し束縛せらるゝことなく、極めて自在なるが故にして、つき／＼我が心に巧みに立てたる方針の存するは教授上態度と方法を圓滑自在ならしむるに大なる便益ある者なりとす。

諸注釋書を涉獵するとは我が教へんと欲する所の眞理の上に光明を與ふると甚だ多し、若し之に加ふるに教師自己の實驗發明したる所を以てせば其力一層大なりとす。而して其講解が一層單純に、一層自然ならば眞理を發揮するに一層有力なり。注釋書及び自己の備忘録の如きは聖書講解の準備に缺く可らざる者なれども、聖書を解くに聖書を以てし、此眞理を同じ聖書中の彼眞理に比較し、此事實を彼事實に對照して講解すると聖書研究の捷徑なりとす。惣じて此等の準備研究は必ず生徒の知識の程度需要の如何を眼中に置いて爲さざる可らず、則ち吾人は今や自ら學習せんが爲めに研究するに非らず、他に教授せんが爲めにせるものなることを忘るべからざるなり。而して其適用の手段並に質問の方法は必ず一定の方に由らず、機に臨み變に應じ能く注意し能く思考して爲さざるべからず。譬へば小童を伴ふて道を往くが如し、我はその往くべき目的の地を知り、その由るべき坦々たる道筋を知るも、小童の心を樂ましめんが爲には丘にも登り河岸にも沿ひ往くとあるべし、然れども我が志す目的地に向ひて進行しつゝあるは争ふべからず。之と同じく一旦立てたる教授上の方針も教場に臨みて生徒の希望又は需用の如何によりては其次第を前後もし、取捨もするべし、然れどもこれは自己の立てたる方針と衝突したるには非らざるなり。學課教授のをはりは如何に結ぶべきか、是其着手の初めより教師の心に必ず存せざるべからざる者なりと

す。學課の結尾は其學課全部を生徒に印象せしむるに至大の關係あり。抑も生徒をして其日の學課に深く其趣を有せしむるは多くは其授業着手の際に決し、その教へられたる學課を記憶し又その利益を享くるは授業終結の如何に因ると少しとせざるなり。之を聞くジョン、ブライトは其演説を爲すに當り中間事情又場合により豫期以外の事實論點に及ぶとも其演説の主眼とする所を失ふとなく、初めより如何に其説を結ぶべきかを熟慮し置くを常とせりと。是れ實に好案なり、教師たるもの須らく此點に注意すべきなり。

其立てたる方針に従つて學課教授の終結を完うせしめんが爲めには、先づ其定められたる教授時間内に教授を終結せしめ得るやう注意せざる可らず。蓋し日曜學校教師の常に失敗するは職として其失敗せる所以を知らざるに由る、即ち教授時間内に其教授を修結せしむるに注意せざりしを知らざるに由れるなり。人或は教授の材料豊富にして、定められたる教授時間内に其何分の一をも教授し能はずとて心當に得々たるあり。然れども教授法の大問題は教師が教材の豊富なるに在らずして、巧に生徒に注充するの技能に存す。而して此の巧に生徒に注充せしめんとするには須らく教授の終結を巧妙に爲さるべからず。日曜學校教師が服膺すべき教訓の數あるなかにも殊に其緊要なる者の一は、如何なる單純なる聖書の一章一句なりとも決して言ひ盡し述べ盡

くすと能はざると。如何程多くの時間を要し、如何程多く研究したりともその章句のうちには自己の發明了得したる所の者よりも猶遙かに多くの眞理教訓の含蓄しあると是れなり。尙之に譲らざる他の緊要なる教訓は教師たる者はその教授時間内には必ず當日の學課たる聖書章句を執つて教授を一貫せざるべからず、たとひ其學課たる聖句の多きにもせよ、少きにもせよ、其時間の餘りあるにもせよ、乏しきにもせよ、教授事業をその教授時間内に完うするは教師の義務たることは是れなり。

聖書學課を其一定の時間内に教授するには決して其學課の長短如何に關する者に非るなり。單に一章一節にして人の一生述べて盡くす能はざる所の者ありし。又學課によりては單に十分時間内に聖書一部を教へ得べき者あり。教師は其學課中に自己の發明了得せし悉皆を其級生徒に教授する必要なきは猶盛饌に坐する人の其膳部悉皆を飲食する必要なきが如し。教師は其受持級に臨むに當りて先づ學課教授に幾何時間の有るかを知り置かざるべからず、而して後ち其教授すべき條項を選択裁斷すべし。良教師ならんには其教授時間の盡くるまでに其教授を完結せしむべし。若し教授を其時間内に完結する能はざらんか、其人は教師として失敗したるもの、教授の技能の欠乏したる證左を示めしたるものなり。

以上述ぶる所凡て皆實際的の者なり。凡て皆多くの良教師が日常實施しつゝある所

の者なり。請ふ予をして其多きなかより一例を挙げしめよ。予が識れる一人の聖書研究會教師あり、此人其教授するに當りて生徒をして少しも、倦厭せしむることなく、我が教へ學ばしめんと欲する事項を必ず意の如く學習せしむるに誤らざるなり。彼の教授は多く問答を用ふ。其問題は極めて適切にして當を得たる者の如し。而して其教授時間内に一定の學課を教授し畢るやうに常に務むるなり。其生徒は答辯するに大概快活にして敏慧なり。如何にして此の如くなるを得しや、或は此人「生れながらの教師」にして些の構思努力なく以て此に至りしや。予は彼に問ふに此事を以てし其解答を得て始めて其所以を了解せり。彼は先づその教ふべき所の學課を研究し、又その生徒の如何なる人物なるかを研究す。彼は繁劇なる實務に従事する所の人なれども一週間毎日平均一時間は此教授の準備研究に費せり。これは實に彼をしてその教ふべき學課と生徒とに關して知悉する所あらしむるなり。かくて彼は其學課に關して十分研究したるのちには更に又之を生徒に學習せしむる方法を考案す。其學課の各章句を細心研究して如何なる問題を以て此等を問ひ教ふべきかと審に其問題を心に決定し、決して教授時間中に偶々浮び來りし思想又は感情によりて問題を作成するとは爲さざるなり。彼が此の如き問題の研究は彼をして能く嘗て研究し了解し得たりし所の者を他人には如何にして教ふべきかを知らしむるに足れり。彼は此問題を設け定むるに當りて其受

持てる組の生徒の各自特異の趨向を審にし以て各自に恰當せる問題を豫定す。即ち生徒のうち常に學課中の地理に關して特に嗜好を有する者あり、又傳記歴史を愛好する者あり、或は精神的眞理に傾き、或は實際的適用に着目し、或は唯「然り」若くは「否」といふの外答へ能はざる者もあり、又全然質問し能はざる所の者なきにあらず。是に於て彼は巧みに其問題を各生徒の趨向嗜好に配當して以て人を視て法を説くの手段を用ふ。是れ實に彼をして其生徒を導て活潑々地たる協同事業に入らしむるの道を會得せしめ得る所の者にして、茲に始めて彼は其教授を全く準備し得たるなり。若し此の日曜學校の教師にして此人の如き教授の方法を探る者愈よ多ければ則ち「生れながらの教師」は愈よ多く此世に輩出し、各所の日曜學校は良教師を以て充滿するに至るべきなり。

されば日曜學校の教師にしてその生徒の人物性行を知り得たる時、その學課を十分研究し得たる時、及び如何にしてその學課をその生徒に教ふべきかを知悉したるときこそ始めて其教師は學課教授に着手し得べき資格ありといふべけれ。

實行の方法

第一節 如何にして生徒の注意を獲べきかの事

教師既に授くべき學課を研究し、生徒の人と爲りを知悉し、教授の方針を立て得たらば、換言せば内に在つて教授の準備的方法を討究し得たらんには、次に來るべき問題は教場に在つて生徒と面を對はせて相坐するの際如何にして其準備したる方式を實行すべきかは是れなり。

先づ最初に起るべき問題は如何にして教師は其生徒の注意を獲べきかは是れなり。夫れ教師が教授上其生徒をして我が教ふる所に熱心傾聽せしむるは教授の始めより終りに至る迄教師の最も留心すべき責任にして、教師たる者は必ず此の責任を完うすべき心懸なかるべからざるなり。某教會に一紳士あり、此人教會の正會員なれども安息日の祈禱説教よりも日常の營業を喜ぶ傾向ありし人なるが、或土曜日に良馬二頭を購入し、其翌日曜日なれば夫妻相携へて教會に詣でたりしに、此二頭の馬のみ心頭を離れず、務めて牧師の説教に傾聽せんと欲するもそれは瞬時にして忽ちまた二馬のとを念ひぬ。其妻心に之を知り、歸途其夫に向ひ問ひけるは「良人よ良人は今朝牧師の君の説

教よりも新購の二馬を主と思ひ考うがへる給ひたるが如し」夫「誠に然りき。『妻』を善きと思ひ給へりや。』夫曰く『否、われも亦之を善きとは思はず、されど此の如き過ちは決してわれ一人には止らじ。予牧師の説教を注意傾聞せんとおもへども効なかりき。予は却て思ふ牧師は予の心をか二馬より引き離し得らるべきやう説教せらるべき筈なり」と。此言笑ふべき如くなれど又一理あり。日曜學校の教師たる者は生徒と相對して語る時たとひ窓外に二馬の奔騰長嘶するありども生徒をして斷々乎して我が教授に注意傾聽せしめ決して傍觀放心せしむべからざる責任あるを自認せざるべからざるなり。

一青年あり、吳服太物商の手代たらんと志望せしに、その吳服商問ふて曰く「君は能く太物類を賣捌き得るにや。』曰く「何人なりとも之を買はんと思ふ客人には必ず之を賣捌き得べし。』嗚呼是れ何の言ぞや。買はんと思ふ人に賣るには三尺の兒童も猶能く爲し得べし。予は買はんと思はざる人々に能く之を賣付け得べき所の手代を雇備せんと欲するなり。』是れ實に味ある言と謂ふべし。日曜學校の教授にも此眞理最も必要なり。自ら進んで教を受けんと欲する人々に教へ注意傾聽せんと欲する人々の注意を保持せしむるは容易の業たり。教師の最も難しとする所は感想の輕浮にして、必ずしも教師の言に注意せざるべしと決心したるには非らざるも、兎角に心の動きて他の

事を思ひ考ふる所の生徒の注意傾聴を獲るの一事に在り。是れ教師の此點に深く心を留めざるべからざる所以なり。

生徒の注意を獲るの道は教師の最初の言動の如何によると多しと爲す。説教者が講壇に立つて聴衆の心を引きつくるも亦之に外ならず。多くの説教者は其主題とする聖句又は其説教の最初の言葉によりて聴衆の注意を獲んと欲せり。こゝに人口に膾炙せる一話あり、奇才ある一説教者講壇に立ち、その説教を爲さんとするに當り、半身を案に支へ口を開て曰く「諸君、こゝに一の明白なる問題あり、予は今之を諸君に質さんと欲す、然れども此問題たるや諸君のうち一人も之に答ふると能はざる所の者なり。實を云へば予親らも能く之に答へ得ざるなり。もし天使天よりこゝに降り來るとも必ずや答へ得ざる可し。諸君、此問題は神と雖も猶能く答へ得ざる所の者たり」と。聴衆は皆呆然として説教者より目を離す所の者一人だにあるなし。是に於て彼の説教者は徐ろに聖書を繙き高らかに「もし人全世界を得とも其生命を失はば何の益あらんや」一句を朗讀し、而してこれに關する説教を爲したりき。教會に於ける聴衆も教壇に於ける生徒も之を取するの道は異なる所なし、要は其注意傾聴を獲んがために發端の巧妙熟練は教師にも説教者にも等しく緊要なる者なりとす。

人の事物に注意するは其事物に興味を有したる直接の結果なりとす。然れども其感

興たるや必ず活潑々地のものたらざる可らず。生徒の熱烈なる感興を惹起せしむるは即ち其注意を左右する所以なり、故に「如何にして生徒の熱烈なる感興を惹起すべきか」の問題は即ち「如何にして生徒の注意を左右し得べきか」と同一のものなり。教師は是れ我の權利なり汝の義務なりとて生徒の注意を強ふると能はず、唯何物か生徒の好奇心を引き起す所のもの、又は其感興を勃々たらしむる所の事物によりて能く彼等の注意を引き付くるを得る者なり。

ピンセント博士は黒板を使用するは生徒をして注意せしむるに大に力ありといへり。フリーマン博士は「無形の黒板」とて生徒の注意せる面前にて指を動して空に文字を描くと亦生徒の注意を保持するに効ありといへり。げに黒板に何物の描かるゝかを知らんとするには最も細心なる注意を要す。凡て黒板に限らず何物にても生徒の注意を惹起せしむべく、又之を保持しゆくべき方法手段を採り用ゐざるべからず。要するに生徒の注意を惹起保持せしむべき方法手段は千差萬別なれども、教授の間生徒をして必ず注意傾聴せしむべきとは動すべからざる眞理なりとす。

教授に着手するの前生徒の注意を惹起せしむる所の方法は固より各級によりて異なるを得ず。日頃善く訓練せられたる級に於ては「扱」の一語を以て十分にして、次に生徒の思ひ設けぬ問題殊に生徒が競争心もて對へんと欲するか、若くは其答辯の如何

なる者なるかに自然注意するが如き問題を出して以て課業を開始し得べし。たとへば教師は地圖を高く掛けて『今日の課業を始めんとするに當り誰か先づ今日の學課中に幾何の地名あるか之を知れりや之を知る者は右手を挙げよ』といひ、次に『誰か此等の土地を圖に就て指示し得るか。』『エルサレムは何處に在りや。』『ガザは何處か。』『扱此等の土地は今日の學課と如何なる關係ありや』などと問ひ、若くは『近き數回の學課のうち何れが最も興味ある學課なりしや』と問はん。而して唯一人のみ之に答へ、他は黙して言はざる時は教師は更に『他の諸子は之に同意なりや』と問ふを可とす。猶又或は花卉を示めし或は小麦の數粒、貨幣、又は小壺などすべて當日の學課に關し説明の助となるべき物品を示めし『此は何物なりや』と問ふて勉めて生徒の注意を惹起せしむべし。凡て此等の方式は生徒の特殊なる性情及必要に應じて採用すべきものにして、たとひ同一級にても時に從ひ機に應じて其方式を異にするを要す。主とする所は生徒が感興を惹起したりや、又その感興は我が今日教へんとする學課に對して催し居れるかを知らんとするに在るなり。

之に關して予に一の經驗譚あり。予嘗て安息日に某市の宗教學校を參觀したり、而して校長は予に一の級を教授せんとを請ひぬ。予は之を諾して其級に臨みしに生徒は皆梳白にしていたづら盛りの兒童のみにして、未だ此種の課業には訓練せられざる所

の者なりき。此日の學課は以賽亞書第五十三章にして全章皆救世主に關する預言なり。則ち此等の兒童に對して趣味なきは此預言の研究なりとす。果して此等の梳白なる兒童は此の學課に注意する所の者なく、互に相顧みて嬉笑し、予の面を望み、他の諸級を傍視し、更に予の言葉に耳を傾くる者なし。予は百方彼等の注意を獲んとせしも其効なかりき。是に於て予は一事を案出し、左も興味有り氣の面持にて急に一問を發して曰く『諸子よ、諸子のうち誰か嘗て羊の毛を剪るを見たる人ありや』と。是れ實に都市に成長せる兒童の多くは知らざる所の事柄なり。然るに一童あり、忽ち揚々として起立し答へて曰く『然り、兒は嘗て田舎に在りし時一たび之を見たり』。此兒少しく興趣を催し來れり。予は更に他の諸生徒にも興趣を惹起さしめんとて一座の生徒に向ひ熱心に言つて曰く『諸子よ、このピリー君は嘗てある田舎にて目撃したる羊の毛剪りの話を今諸子の前にて語らんとす。諸子は皆よく注意して之を聽かるべし。』予は全生徒の注意を捕へ得たり、彼等は俄に興味を生じ來りて或は體を曲げ或は頭をめぐらし以て此ピリーの羊の剪毛談を熱心に聽かんとせり。予『扱ピリー、羊の毛は如何にして剪られしか委しく語り給へ』。ピリー『それは斯様なりき、一個の老人堅く羊を捕へその頭を抑へて之に腰打かけて動かさめず、而して他の一人は容易に其毛を悉く剪り去りたり』と左も其時の有様の目に浮べるかの如く面白氣に語りていよ／＼得意の有様

なり。他の兒童等は從來見しとも聞きしともなかりし事の實驗談なれば益す興趣を催して聽き居たり。予「羊は定めて其時悲鳴を揚げ四足を動かし騒ぎしとならん如何。」ピリ「否よ先生、誠に柔順にして一聲だに鳴かざりき。」予は是に於て衆に向ひ「誠に然り、今ピリ君のいへる所と此聖書に記るされたる所とよく符合せるに非ずや。諸子よ、此學課を看よ。何と記るされありや、第七節の終りに「毛をきる者の前にもだす羊の如くしてその口を開かざりき」とあるに非ずや」といへり。全生徒の注意は今や此一條の問答によりて見事に捕へ得られたり。かくて予は宗教學校に於ける未訓練の生徒にはあまり適合せざる此の學課にさへ注意せしめ感興を起さしむるに至りしなり。

抑も生徒が注意を爲さざる時其注意を惹起さしむると、既に注意を惹起したる後之を繼續せしむるとは習慣に屬す。此注意てふ習慣にも勝りて之を養成するに困難なる心意上の習慣は他に之れあらざるべし。或人曰く人の學習上に於ける原力、又人の其智識を使用するの原力は其人の心意的習慣若くは性質に於けるよりも、却て多く其人の見聞する所のもの、若くは其云爲せんと欲する所のものに自己の注意を惹き又繼續する其人の才能に屬すと。此言大に理あり。故に教師たる者にはその教授の際に生徒の注意を怠れる者ありや否やに心を用ゐ、又生徒の其注意を中止したる時之を復

興せしむるに務むること必要なり、又生徒をして彼等自ら注意し居れりと思へる時にも動もすれば輒ち注意を忘れ怠るに至り易き者たることを知らしむると必要なり。善良なる生徒にして自己も教授に注意し居れりと思ひ、教師も彼は當さに然かあるべしと信じ居れるに其生徒は何時しか一時注意を中廢し他に思慮を移し冥想に耽る者尠しとなさず。かゝる時には教師は忽ち話頭を轉じ其生徒に向ひ「今予が述べし所の事は正しきや否や」と問ふべし。其生徒は必ず頭を掻きつゝ正直に答へて「請ふ赦されよ、不圖他事を考へて、宣ふ所を聞漏しぬ」といはむ。是れ普通有勝らの事たり。教員會議の際にてさへ猶教師の不注意に陥り、校長にかゝる問をかけられて忸怩たるものなくんばあらず。故に教師にして生徒の誰彼に此種の警策たる問を發するを常とせば頗る能く生徒の注意を保持し且つ生徒に彼等が動もすれば不注意に陥り易きものたることを認識せしめ得べし。

蓋し生徒に注意を惹起さしむると其注意を保持繼續せしむるとは自から別事なりとす。注意を惹起せしむるは一時咄嗟の間に爲し得べく、之を保持せしむるは其教授時間内に亘る長久の操縦なり。夫れ生徒の注意はその同意同心なくとも猶獲られ得べき者にして、事は全く教師の云爲如何に存す、然れどもその注意を保持繼續せしむるには決して教師一人の力によりて爲し得べき者に非ずして、必ず生徒の心ありての

聽從に待たざるべからず。即ち教師と生徒とは其目的の爲めに同心協力して従事せざるべからざるなり。然れども教師は生徒の此同心協力を爲さしむるに責任を有す、何となれば教師は其教授上生徒をして我と同心協力せしむるやう、換言せば我が教授に熱心聽從せしむるやう仕向くるに非ざれば決して其目的を達するを得ず、而して如何にして教授上生徒の同心協力を獲得べきかは是れおのづから別問題に屬す、たとへ教授上の三原則即ち注意、明白、協力の箇々別れて且つ箇々別るべからざる所の三者は三者に於ける一、及び一に於ける三者たるが如くに又常に一たり三たる者なりとも予は他節に於て此問題を解決せんと欲するなり。

第二節 如何にして明白に教授すべきかの事。

教師既に生徒の注意を喚起したる以上は何故にこの注意を求めたるか其理由を示めすべき義務を有す。すなはち我が教授する所の事物を生徒に十分明白に會得學習せしむべき是なり。

教師が明白に遺憾なく生徒に教授せんとするには其生徒たる者の智識の程度を知悉するを最も緊要となす。生徒の智識の程度を斟酌して其教ふべき事物を講義し説明し適用せざるべからず。故に教師は先づ身を生徒の地位に下し、其理會力も思想も感情

も生徒と照準を保たざるべからず。若し二人以上の生徒あらば其最も知識の程度の劣れる者に照準して教授せば知識優等なる生徒は亦自然に學習し得べし。之に反して優等なる生徒の智識を標準として教授せば劣等なる生徒は決して會得學習する能はざるなり。

講義説明に用ゆる言語は生徒の既に知り得て日常使用する所の者たらざるべからず、若し止むを得ずして生徒の知りをらざる言語を使用する時はその言語を又解釋し會得せしめざるべからず。如何に生徒が注意傾聴し居るとも、其教ふる所の事物言語が悉く切要なる者なりとも、若し生徒の理會し得ざる言語を以て教授せば全く無効に歸すべし。又了解惡しき魯鈍の生徒も少からざるが故に教師は其言説を舒寬にし勉めて忍耐を以て教授せざるべからず。一事物が一生徒に全く了解せらるゝまでは如何に長時間を要するとも厭ふべきとに非ず、又此の如き生徒に眞理を明白に會得せしめんには幾たび説明の辭を更ふるとも反覆講説するとも差支なきとなりとす、要するに我が受持の生徒をして一人も殘らず我が教授する所の事物を明白に了得せしむるを以て教授の能事畢れりと爲さるべからざるなり。

我が教ふる所の事を明白に生徒に會得せしむるには教師は務めて明白平易にして生徒の悉く了解し得べき言語を使用し、而して後其果して會得せりや否やを檢せん爲

めに的切なる問答を以てすべし。その問題たるや學課若くは印刷して生徒に與へ置ける所の形式的のものならずして日常の談話的問題たるべし。即ち我が教へし所を生徒が會得咀嚼して自己の見解より答辯し得せしめんとてなり。此試験的問題によりて生徒の猶全く我が教へし所を會解し得ざりしとを知り得ば教師は猶一層同一事物を丁寧反覆して彼等が十分明白に了解し得る迄教授せざるべからず。此の如き場合に説明の必要生ず。

説明とは多くの場合に於て事物の形象、比較、例證等によりて其の眞意を明白ならしめ理會し得せしむるとなりとす。説明には必ずしも故事奇譚を縷述するを要せず、又教授の事物毎に説明を爲す必要もなく、又言辭を飾り面白可笑しく述べべきものにも非るなり。元來教師が説明の爲めに物語を爲すはたとひ教師にも生徒にも愉快なるにせよ、又一時生徒の注意傾聽を得べきにもせよ、却て其教ふる所のことを明かならしむるよりも之を暗くし、又現に研究しつゝある事物の大主旨より思想を離さしむるの弊害ありとす。蓋し教師が説明を用ふる所以は生徒の既に知り居る所の事物を利用してその未だ知らざる所の事物を了解せしむるに在り。夫れ生徒は既に多少の知識を有しをれり、而して教師は生徒より以上の知識あり。生徒をして更に新知識を得せしめんとするには教師の知識の範圍内に於て、生徒の現有知識以外の事物を明白に會得せし

めんため生徒の知識を利用し開發的比較の説明を巧妙に使用し得べし。教師にして此開發的教授の方を使用せざれば如何なる教授を爲すも成功を得るとなかるべし。

我が教ふる所の事物を説明を以て生徒に明白ならしめんとするには教師たる者宜しく迂遠なる譬喩を用ゐる又は言語を夸大に飾り、形容して述べ語るべからず、是れ何人も陥り易き過失にして實際に於て教授の効力なき者なり。抑も小兒は頗る理會力を有し、又一層強き想像力を有す。然れども彼等の心意は常に一直線に向ひ、一の時に一の思想を追ひゆく所の者なり。故に彼等に提供する思想は必ず單純直截のものにして、彼等が之を理性に於ても想像に於ても、常に追逐し玩味し得べからしめざるべからず。教師若し生徒に我が今語る所の事は事實なり眞理なりといはゞ彼等は亦しかく信じて理會し得べし。又此は想像なり「假托」なりといはゞ彼等亦しかく理會し得て、教師の今語る所は皆想像の範圍内なりとの觀念もて容易に聴取し得ん。然るに若し教師が此「假托」は其表面の意義以上に何事かの意義を有する者たると、換言せば彼等に一事を想像せしむると同時に此假托の眞意として全く別事を思考せしめ會得せしめんと欲せば必ず生徒の心緒を紛亂せしめ二つながら得る所なきに至るべし。ナタナエル、ホーンルンは其著書「ウァンダー、ブック」の序文中に此とを論じて曰く「兒童は想像に於ても感情に於ても深遠高尚なる事物に非常の感覺力を有する者なり。而して

人爲と複雑とは獨り此天性を紛亂せしむ」と。

されば聖書の奇蹟がその譬喩よりも兒童の心に入り易きは全く此理なりとす。兒童は超自然の事實には疑惑を挾むとなければも却て譬喩に困迷す。天を形容して一大都市と爲し其街衢は黄金を以て舗きつめ、十二の門は皆一個の大眞珠より成るといふも兒童は容易に之を信じ得れども、若し此黄金の街眞珠の門は他の眞意義を有する一の比喩たるに過ぎずとして彼等の理性に訴へて其眞意義を思索せしめんこそば彼等の思想は忽ちに亂されて心意の進行を阻礙せしむべし。例へば耶蘇基督は我儕の救主なりと彼等に告げんに彼等は之を了解すると博學敬虔なる神學者と異なる所なし。然るに若し彼等に告ぐるに基督は善良き牧羊者にして彼等は基督の羊群なりといはむ、是れ彼等の容易に會得し難き比喩にして、此比喩をたゞりて基督の救主たることを了知し得るまでには頗る兒童の思想を混亂せしめざるべからず、如かず單純直截に基督は彼等の救主たるよしを告げて此の迂遠にして礙きの石たる比喩を用ゐざらむには。

人必ずいはむ、耶蘇基督の善良き牧羊者たるは現に聖書に記るされあるに非ずや、隨て此譬喩は兒童をして了解せしめざるべからざるに非ずやと。然り若し聖書の課程に適ま此譬喩あらば之を兒童に説明すべきは教師の當然の義務たり。かゝる際には教師たる者かく生徒にいふべし。『是れ譬喩にして耶蘇は眞の牧羊者たるをいへるに

非ず、又卿等も決して羔たりしといふに非ず。唯これは善良き牧羊者は其牧する所の羊又羔の全群に注意し、豺狼の如き猛獸の此羊群を襲ふとあらば我が生命を棄て、までも羊群の無事を圖るが如く、耶蘇基督もその保護の下に在る卿等兒童を眷愛保護し給ふ、既に耶蘇は卿等の爲めに生命を棄て、其愛を示めし給へり」と。夫れ聖書に此種の東洋的譬喩のありたる時之を説明すると、單に事實を説明するに東洋譬喩を用ゐるとは全く別事なり。耶蘇を善良き牧羊者として示めさんため一頭の羔をその胸邊に抱き居給ふ姿の圖あり。是れ今日に在りては世上に流布せる圖なれども幾多の兒童を惑はして耶蘇の人と爲りと事業とを疑はしめたと數ふるに違あらず。

相當の知識を備へたる人にして其少時宗教的眞理を餘り多く譬喩を以て教へられ、心竊に不快不安を感じたると屢ばなりきと予に語れる者少らず。或人は未來の世に於ては或は軟毛を以て蔽はるゝ綿羊たらんか或は硬毛の山羊たらんかの選擇に數年の間少からず心を苦めたりきといへり。此人は此譬喩の眞意を知らざるなり、彼は綿羊たることも望まず又山羊たらんとも固より欲せず、彼は生きて此世に在るも死して未來の國に往くも等しく兒童たり大人たらんことを欲す、即ち人間たることを欲して禽獸たることを欲せざりしなり。是れ實に一笑に付し得べき例話なれどもその罪は之を教ふる者の之が説明を明瞭に爲さざりしに在り。多くの父母なり、日曜學校教師なり、説教者

なり、熱心に敬虔の心もて兒童に譬喻的話説を爲し、却て爲めに兒童を誤ると少小に非ず。故に日曜學校の教師たる者は務めて此譬喻的話説を避くるに非らざれば必ず兒童を誤るに至るべし、慎まざるべけんや。

兒童に宗教眞理を教ふには直截簡明なるを可とす、是れ譬喻を以てするよりも却て心に入り易し。たとひ兒童は能くその譬喻を了會し得とするも爲めに教授上無用の遲滯を生せしむべし。恐くは小兒はその足にて起立するの前に頭にて起立し得るやう訓練せしめ得べし、然れども、よし頭にて立ち得たりとするも歩行を其小兒に教ふるに何の効かあらん。之と同じく直截に説明して眞理を了解し得る兒童に對し殊に迂遠なる譬喻を使用する無益の煩勞を爲す必要なに非ずや。且つ兒兒の單純なる腦髓はたとひ伶俐なる兒童にも譬喻と眞意とを同時に玩味咀嚼するは至難の事なりとす。たとへば二十人の兒童にインツプ物語を話し聞かするに二十人とも能く其物語を喜び且つ了解すれども、其能く物語中に含まれたる道徳上の眞意を悟り得る者は僅に一人に過ぎざるべし。此くの如く譬喻は兒童に取りては了解し難きものなりとす。

今こゝに譬喻の兒童に解し難かりし一例を擧げん。一人の牧師多くの兒童に向ひ、教役者は地の鹽なることを説けり。彼は鹽の能く食物の腐敗を防止する貴重有力あることを説明したるのち教役者の事業は此世を腐敗壞亂せしめざるに在るよしを告げぬ。兒

童等は能く此鹽の効力も教役者の職掌も了解し得たり、然れども兒童は此二者を適當に綜合するに能はざりき。彼の教師は此説話の結末を爲すに當り左の問を以てせり、曰く『さらば何故に教役者は地の鹽なりや』と。兒童は極めて慎重に自然的に答へて『教役者は能く人生に必要な食物を腐敗せしめざる故に』といへりしとぞ。是れ實に譬喻的話説の危険なる好例證に非ずや。

人必ず問はむ、譬喻がかく迄幼稚なる心に會得し難きものならば、何故に聖書には彼の如く多く使用せられたるか。予答へて曰はむ、聖書に於ける譬喻はいつも説明として用ゐられたる者に非ざるなり。譬喻なる語の眞意原義は多くの場合に於て説明の意義とは全く反對せり。説明とは眞理を照約せしむるとなり、之に光明を投ずるとなり、眞理を一層明白に、一層照り輝かしむるとなり。譬喻とは概して眞理を包含するものなり、之を闡明するよりは寧ろ之を一時隱蔽せる形状もて中に包含せるものなり。聖書の譬喻は皆此意義を以て使用せらる。主耶穌が人々の頗る解し難かりし譬喻を多く語り給ひしを見て弟子たち『何故に譬をもて彼等に語り給ふや』と問ひしに主は『爾曹には天國の奧義を知るとを予へたまへど彼等には予へ給はざればなり』と宣ひぬ。然れども弟子等とても此等凡ての譬喻の眞意を了解せざりしを以て主は『その弟子と共に居れる時彼等に悉く之を解聽かせり』と聖書に記るせり。

聖書に記載せる善きサマリア人の如き譬喩は極めて單純なる物語にして其物語中に含まれざる明白なる教訓と共に兒童等に取りて決して解し難き比喩には非ず、是れ其の慈悲博愛てふ眞理を説明すといはんよりは一の事實を假構して以て此眞理を寄せたる比喩なればなり。故に若し教師にして必ず譬喩を用ゐる一時生徒に眞理を隠蔽せんとならば此種の比喩を用ゐるを可とす。然れども我が知れる眞理を生徒にも知らしめんとならば必ず無用なる比喩を避け簡明直截なる言語と有用なる説明とを以てするを最も簡捷なる方法となす。

ドウリング博士嘗てパウロが信仰によりて救はるといひ、又恩恵によりて拯はるといひし一見矛盾せるが如き眞理を明白に解釋せしめんとて一の簡明なる説明を爲したりき。其説明とは駛行せる汽船の甲板より誤つて海中に墜落したる人に喩へたるものにして、此時船長は直ちに蒸氣機關の運轉を中止せしめ、短艇を下し、綱を溺れつゝある人に向つて投げ與へしめぬ。溺れつゝありし人は此綱に縋がりて危く一命を助かりぬ、即ち此人は船長の信切に因りて助かりしと同時に此人自ら投げられたる綱を堅く執りて離さざりしによりて助かりしなり。

又地圖繪畫等にて生徒の目を利用して教授を明白にするとは教師の尤も注意すべきものなりとす。黒板、石盤、筆、紙等も亦最も必要なり、殊に當日の課程中に物語

のありたる時には其物語に關する人名、地名を黒板に記して之を示めし、又生徒に之を筆記せしむるに甚だ便なり。又當日學課の参照となるべき眞理或は事物のあるとき、其聖書の章節を提掲して之を示すによろしとなす。又讀書力ある生徒には教師の講解と相關聯して生徒の注意を聖書の章句に向はしむると教授上甚だ必要なものにして、實に聖書の章句を明白に解するに他の章句を以てすると、所謂經を以て經を解してふとは特に務むべき所の者なりとす。蓋し聖書中の事實又は教理は互に相参照し發明し得られざる所のものとは一も之れ無きが故に生徒をして自ら之を参照し發明せしむるは彼等に取りて二倍の利益なり。生徒若し其参照すべき章句の在る所を知らざる時は教師はその何の書、何の章、何の節に在りと教ふるのみにて、生徒をして自ら之を検出せしむべし。かく種々なる方法によりて教師が巧妙なる指導の下に始めて眞理は明瞭になり得べし。

第三節 如何にして生徒の同心協力を獲べきかの事

生徒の注意を獲得し、明白に教授すべき方法を發見したる以上には學課の授受に教師と生徒との同心協力を忽せにすべからざるなり。而して此同心協力を獲る所以のもの亦實に教師の責任なりとす。

生徒の同心協力を獲る道の最も捷徑なるは教師先づ己を屈して生徒の知識と同程度の地位に下るに在り。夫れ教師の知識は固より生徒の上に在らざるべからざる者なれども、若し彼等を指導し教授するに彼等と同心協力せんとするには教師は生徒と同程度の知識に自己を置かざるべからず。蓋し生徒は急に其知識を高めて教師の地位に達せしむると能はざれども、教師は能く己を下して彼等と同じ地位に立ち得べく、且つ自己本來の立場を失ふことなくして能く之を爲し得べければなり。

抑も教師の知識高ければ高きほど教授に愈よ困難を感ずるものたるとは人の常に言ふ所にして本書前章にも亦既に之を論じたりき。實に青壯の人は老年の人よりも教師として大抵成功し得るは今日各所の日曜學校に其例甚だ多し。蓋し青年にして知識の未だ該博ならざる者が却て年壯んに若くは老いて知識の高く邁みたる人よりも教師として成功する所以の根本的理由は實に青年教師は容易に生徒の知識程度に自己を下だし同情を以て教授し得るに反して、老壯博識の教師は自己と生徒との知識の懸隔を念頭に置かずして唯喩々講説するに止るに在り、換言せば教師生徒同心協力の第一階梯たる自己を下して生徒の知識の程度に立たざるに存するなり。故に博學宏識の人にして能く自己を下して思想感情共に生徒と同一程度の地に置かば必ずや知識淺薄なる者よりも優ぐれて善く教授し得べけんも、若し自己屈下のとなきか其人は知識の高けれ

ば高きほど教授は愈よ拙なるべしと更に疑を容れざるなり。

而して生徒の知識の程度を採知するとは教師に取りて常に容易なるものにはあらざるなり。故に教師は之につきて怠らず位意研究を要す。此一事の採知せられざる限りは決して授業上安全正確なる進捗は得られざるものとす。かくて生徒の知識程度を探知し、自ら下りて其地位に立ち得たる時には教師はその生徒が自己に其だ馴れ親みて心易立てになりたるか否やを考ふべし。新入生に對しては殊に其知識の程度も測り知り難く、常に痴羞を含み居て、教師と親しくなり、信任を教師に置くに至るまでは容易に口を開かざる者なり。一旦教師に信頼し之に親しくなりたらんには新入小兒は必ず應答質問に憚るところなし。蓋し兒童は談話を好む所の者にして、何事にも己が知れる所を語らんとし、又質し問はんことを欲する者なり。故に一たび教師と心易立てになりたらんには己が父母又は遊仲間と談話する如く教師と談話すべし。若し教師にして其日曜學校の生徒より一言の質問も應答も得ると能はずとせば其失は其生徒一人の上のみに在らざるべく、必ずや教師と生徒との關係に在らん。即ち其間に何等かの障礙ありて其生徒をして教師に親密ならしめざるならん。此障礙を發見し除却して始めて教師は生徒と同心協力的教授を爲し得るに至らん。

曾て某日曜學校の一女教師の受持級の中に痴羞甚しき一小女兒ありて一度も教師の

問に答へ、又は教師に問ひ、語るをあらざりき。ある日曜日教師は他の生徒等と常の如くいと親しげに學課上の説話を爲しをりしに此小女突然口を開きて「私ね昨日劇場に往つてよ」といひ出した。他生徒にして授業中かゝる挿話を爲したらんには吐責も加ふべきなれども、爾來無言含羞の小女がいと珍らしくも口を開きしとなれば此機を利用して彼を導かばやとて教師はいと優しく「左様でしたか、それは結構でしたねえ。して如何な事を御覽でした」と問ひぬ。小女は之に力を得て昨日劇場にて打見たる所を物語りぬ。教師は此小女の此一話によりて心機の一轉したるを見て取り巧みに之を利導し、當日學課の主旨に寄せて此一番話を結びしが、これより小女は教師に甚だ馴れ親しむやうなりて、復た以前の如く羞を含んで無言なるが如きとなく、教授の目的を達するを得たりしといふ。

抑も人には各々賦性の異るところあるが故に同じく教師の中にも生徒と親しくなり易き人と親しくなり難き人とあり、又生徒中にも容易に教師に馴れなじむ者と否らざる者とあり。然れども畢竟するに教師と生徒との親密にして隔心なきは教授上の最要件たるを思ひて教師たる者は先づ此一事に注意し務むる所なかるべからざるなり。

教師既に身を屈して生徒知識の水準に下り、又生徒と親密に心易立てとなりたらんには、次に執るべき一事は生徒をして教授上の協力者たらしめんために何事にては彼

等の力の堪へ得る所の事を彼等に負はしむるに在り。彼等は「學課研究」を爲すものなりと豫め之に告げたりとて決して同心協力せしむるに十分なるにあらず。此「學課研究」の一語は教師の思ふ所、生徒の解する所の如何に隨ひて多少の意義を異にすべし。おもふに教師といへども此「學課研究」てふ語を用ゐるものから其眞義を知らざる者なきを保せず。日曜學校生徒は其學課を勉強せずとの愁訴は屢ば教師の口より聞く所なるが、其主なる原因は生徒が未だ學課研究によりて何の得る所あるかを知らざるに、教師自らも亦生徒と同じく此に關して未だ確たる觀念を有せざるに在るなり。抑も學課研究の目的は本章句の諳記に在りや。或は當日學課の題目、金言の記誦に在りや。又は學課中問題に對する答案なりや。今日の學課と聖書の他の部分との關係連絡を視るに存するか。抑も又本章句中に含有せる主義を檢索し及び之を日常の生活行爲の如何に應用すべきかを思考するに在りや。教師の心に思ふ所、生徒にかく爲さしめんとする所或は是等の一二に存せん、若くは此他多くの事に在らん。然れどもかゝる曖昧模糊たるうちに學課研究の大主意を埋没せしむるは惜しむべきことならずや。然れども若し教師が兒童に研究上兒童の能く爲し得べき所の一事を與へ且つ告げて之を爲せといはば兒童は能く自己に要求せられたる所以を知り、必ず喜んで其命に隨ひ之を爲し果さんとすべし。凡そ兒童は好んで他の補助たらんとを欲し、且つその恰

懶なりとの稱賛を得んとを望む。此の他の補助たらんとし、稱賛を得んこの稚心を日曜學校の教師は巧みに利用せざるべからず。四歳の小女曾て父に向ひていはく「私は忙しいのが好きです、忙しくありませんと何も爲るとが無くて困ります」と。是れ一般兒童の心の情態なり。彼等は實に多忙なるを好めり。多忙ならざる時は何事も爲さざるなり。故に教授時間中生徒に爲すべきとを與へて多忙ならしむるは教師の義務責任なりとす。

一例を擧げていはんに、列王紀略下第五節第廿節乃至第廿七節即ち癩病者ゲハジに關する學課ありとせん。從來學課の研究に熱心ならざる生徒の同心協力を獲んがために教師は先づ此學課の首節即ち第廿節「神の人エリシヤの僕ゲハジいひけるは吾が主人は此スリヤ人ナアマンをいたはりて彼が手に携へ來れるものを受けざりしがエホバは活くわれ彼のあとを追ひかけて彼より少しく物を取らんと」に生徒一同の注意を惹き起さしむるを得べし。乃ち問ふて曰はん「此一節中に三個の人名記載せられあり。第一は誰、第二、第三は誰ぞや。」又曰く「諸子注意せよ、此節中に一事の既に成りしものと、一事の未だ果さざりしものと、又二ツの事の將に行はれんとする所のものとあり。敢て問ふ、その既に成されたる一の事とは何ぞ。その未だ果さざりし一の事とは何ぞ。又將に行はれんとする所の二の事とは何ぞや」と。是れ實に單純容易の

問題なり、然れども問題の容易なればこそ之に答ふるも亦容易なれ而して此等の問題は生徒の注意を喚起せしめ、興趣を催さしむるを得べし。此種の問題は此學課の毎節より序を逐ふて容易に摘出し生徒を教師に同心協力せしめつゝ遂に此學課の主なる教訓と其應用とを教師の問と生徒の答とより産み出さしむるに至るべし。

而して其教訓と應用との一段に至らば特に心を用ゐて題を選び、ゲハジの罪惡なる者は我が心の慾と罪とに導かれしと、罪惡を爲し遂げんとする決心を爲したると、此決心を實行せんとてナアマンを追ひ往きしと、その詐言のと、その主人たるエリシヤを他に誤解せしめしと、金錢と衣服とを詐取したると、その委託物を私用せしと、詐欺に詐欺を重ねたると、及び一の此罪惡によりて或は自己の靈魂を危殆ならしめ、或はナアマンのエリシヤに對する信仰を僻からしめんとし、或は主人エリシヤの信任に負き、或は神の道を汚したると等を逐條質問して、生徒をして思考し答辯せしめ得べし。かく此一學課質問の第一着は容易單純なるにも拘はらず、十分にして遺憾なき學課研究の目的を達せしめ得べし。而して教師より質問すべき條項の幾部分は一週前豫め生徒に交付し置き、他の幾部分は授業當日教場に於て生徒に向ひ試み得べし。夫れ質問は生徒をして教師と同心協力ならしむるに極めて必要なものにして、且つ教授上いづれの場合に於ても緊要なるものなりとす。蓋し質問は生徒の注意を惹き

起し且つ此惹起せしめたる注意を保持するに甚だ力あり。又教授せんとする眞理を明白ならしむるに大に力あり。然れども其いづれよりも教授を完全せしめん爲めに生徒をして教師と同心協力ならしむるに最も力ある者なり。

聖書研究に問答を用ゐるの法は第十九世紀の初年蘇格蘭のジエームス、ゴールといへる人の始めて試みし所の者にして、當時蘇國に於ける教授法は極めて不完全拙劣にて、學校の兒童は概ね其書中の語句を誦讀するに止りて、その意義を知るをなく、又知らんとも欲せざりきといふ。我が合衆國にても亦初期の日曜學校にては此の如き教授の方法にて、唯聖語聖句の誦讀若くは問答書の答案の背誦が謂ゆる日曜學校の授業なるものなりき。ゴールは始めて一日の學課を制限一定して、聖書の數節となし、之を問答の主題たらしめ、生徒をして此等の數節中に述べられたる所の者は何事なるかを知り、その知了したる所を自己の言語(成語の誦讀に對してかくいふ)もて言ひあらはさしめんとしたりき。今日の日曜學校教授の組織は實に此方法に胚胎したる者にして吾人の所謂教授法の大原則も全く之に基するが故に教授上の各方面に於て教師たる者は決して此原則を看過すべからざるなり。

ゴールは此方法によりて生徒をして其讀みたる語句よりおのれに問はれたる事項に對する答辯を案出し、又答辯を爲すの前に先づ思索するの習慣を養成せしめんとしたり。例へば「種まく者種を播かんとて出でぬ」の一句とせば、最初の問題は「出でたる者は誰なりや」なり。生徒は「種まく者」と答ふべし。次に「此種まく者は何の爲めに出でしや」と問はば必ず「種を播かんとす」といはず。又「此種まく者は何事を爲せしや」といはば必ず「種まく者は家を出でたり」とか、或は「種を播かんとす」といはず。是れ一見甚だ簡短なる問答法なるが如しと雖も、聖書章句若くは問答書を單に誦讀するとは全く其撰を異にし、如何なる生徒たりとも此等の問題に彼の鸚鵡返しの答辯を以てしては其一言一句も答ふると能はずして、必ず先づ如何なる答辯を爲さんかとて一時思考せざるべからざるなり。則ち彼等は其推理的能力を活用せしめて其適當なる答辯を發見せざるべからず。是れ實に兒童の心智の開發及訓練に至大の影響を與ふる者なり。

而して此等の問答は單に問答法、換言せば教授法上——生徒に取りては學習法上の第一著歩にして、此より進んで其意義眞意の説明解釋に關する問答 及び其實際的教訓、應用に屬する問答を以てせざるべからず。是れゴールの方針にして、トーマス、ケー、ピーチャアの祖述せし所の者なり。ピーチャア曰く「吾人は教員會に於て三種の質問を試む。或時は其一を質問し、或時は三つながら之を質問す。予は之を稱して第一を學課章句上の質問、第二をその解釋上の質問、第三を精神的眞理の説明及び之

れが應用上の質問といふ』と。

此問答上一事の注意すべき者あり。説明若くは解釋は教師先づ必要なる問を發したるのちに爲すべきとなり。第一には問題、第二には解釋にして、先づ解釋を爲して次に問を發するにはあらず。是れ實にソクラテースの方式にして、現今良教師の凡て遵奉する所のものたり。例へば都市に成長せる如何なる兒童と雖も『種まく者』なる語の意義を知らざる者なし。故に先づ『種まく者とは何ぞや』或は『種を播くとは何ぞや』等の問を設くべし。若し生徒にして此意義を知らずして答ふる能はざれば則ち始めて其説明を爲すべきなり。ゴール曰く『人或は説明解釋は問答より前に先づ爲すべきものなりといはむ。然れども多年の經驗は其然らざるを證せり。すべて兒童は其の嘗て少しく見聞して知り居れる所の事實は進んで人の前に説明せんと欲する所の者なり』と。ピーチャアも亦曰く『食欲なきに羞められたる食物は徒らに嘔氣を催すべく、時ならざるに述ぶる所の告知は贅辯よりも害ありて、聽く者をして徒らに鈍ならしめ執拗ならしむるのみ』と。實に告知は最も時機を視て爲さるべからず。問答漸く進んで彼等生徒が悉く、若しおのれ知り居らば答へましものをもと希ひ、而して皆熱中して教師の面を凝視する時に到達せば是れ誠に告知し教授すべき最良時機にして、即ち彼等が飢る渴く如く知らんと欲する其心裏に深く注入して忘れざらしむるを得る

者にして、教師と生徒との同心協力此に到つて盡けりと謂ふべし。

論者或はいはむ、此のゴールの方法と稍同じくして、質問の眞方式とも謂つべきものは既に今日使用する所の問答書及び日課の書中にこれ有るに非ずや、故に最良の方法は臨時的問答法を用ふるよりも、此等の問答書、日課書等に遵ひて逐次質問するに在りと。予は之に答ふるに左の二條を以てすべし、第一、論者の謂ゆる問答書及び日課書は其問題の順序方法ともに、ゴールの方法又は其他の方法に全く准據せるものに非ず、第二、假令此等の書はゴールの方法に准據したるものなりとするも教師は之に盲従すべきに非ず、且つ此等の書は研究上の補助たるべきも教授の際に補助となるべきものに非るが故に、教師も生徒も教場に在つては之を使用すべからざるなり。若し教師にして此等の問題を常におのが眼前に置くに非らざれば一の問をも發すると能はざるほどの淺學の輩ならんには如何にして其教師は生徒に其答案を彼等の眼前に置かずして能く此等の諸問題に答へ得るやう日課を學習し得ることを望み得べきか。若し問答書にして日曜學校の教場に於ける實際教授に逐問逐答し得べきものならば教師は實に日曜學校の教場には無用の長物なりと謂ふべし。何が故に生徒の一人をして其問答書より逐次問を發し他の生徒をして之に答へしめ、以て迭に相問答せしめざるや、聖書は教授の際には教師も生徒も參照のため必ず手にせざるべからざれどもその直

接問答の際に當りては之を参照することを許さず。その語句及びその意義に關して問ふ所あらんとせば其章句に預じめ生徒の心裡に諳記しあらざるべからず。然れども教授上の眞諦としては教師と生徒との同心協力を主として單純、自然にして形式的ならざる問答法によりて其課程の研究、會得、應用の方面に向はしめ以て其實効を收めざるべからざるなり。

而して其問答を爲すに際して生徒より云々の答辯を得んと欲しなば必ず之に適當せる問題を提發すべきことに注意せざるべからず。徒に漠たる問題を提發して我が意に合ふ答辯を得んとするは甚だ謂れなきにして、却て生徒をして如何なる答辯を爲して可なるか必ず迷ひ惑ふて遂には口を緘して答へざるに至らむ。或は又一問を發して生徒の答は我が問の意に合はざるも而かも謂ゆる中らずと雖も違からざる所の者たらんには更に其問言葉を改め變へて再問し以て其期する所の答辯を得るやう務むべし。故に教師は其心に期する所の答辯を生徒より引出さんため克く注意して適切なる問題を提發し、決して漠たる問言葉を用ゆべからず。

予が嘗て某日曜學校を參觀せる時實驗したることを以て前條の意を明かならしめん。其學校に十三歳乃至十五歳の伶俐なる兒童の一級ありて、當日の學課は「方伯の前に立てる耶蘇基督」なりき。其級の教師先づ一問を提發して曰く「ピラトは何者なりや」と。

「や」と。授業の發端先づ此問を爲す、甚だ當を得たりと謂ふべく、又この問題も自然にして單純なるものなり。生徒にして此問に答へ能はざるものあらんや、生徒の一人即ち答へて曰く「羅馬人なり」と。此答甚だ可なり、然るに教師は其心に期せし所と異なるを以て之を否認し、且つ問言葉を換へてその期する答を導出さんともせずして「否々、」といひ、更に又「ピラトは何者なりや」といへり。かの童兒は正當なる答を爲して而かも否認せられたるが故に復た答へず。他の生徒答へて曰く「ピラトは異邦人なり」と。此答も亦可なり、然れども彼の教師は又「否々、ピラトは何者なりや」といへり。生徒の一人は暫し思考したるのち此はピラトが人名なるか地名なるか將た何物なるかを教師の問へるなりと思ひ、答へて「人なり」といへり。是亦誤れる答には非らざりしかども教師は彼等の答の益すその豫期する所に違へるに苛立ちて聲を勵まして曰く「否々々、ピラトとは何者なりや」と。生徒等は以上の如き單純なる答にては惡しけりとおもひ、種々に頭を苦めし有様なりしが中に一人ピラトの人となりて以て答へなば可ならんと考へしと見えて「ピラトは臆病者なり」といひぬ。是に於て教師は失望せり、やがて自ら答へて曰く「ピラト——は——方伯——なり」と。その語調は明かに教師は其生徒に關して忸怩たるものありき、又生徒も聊か自ら耻づる所ありき。抑も此問答に於て過失は果していつれに存せしや。何人も生徒に過失ありとは思は

ざるべし。彼等は實に其正當なる答辯を爲せり、決して否認すべきものにあらざるなり。彼等は其答辯を爲すに當りて其教師よりも多く思慮を費したるなり。予も亦彼の教師が「ピラトは何者なりや」との繰返し／＼の問は其果して如何なる答を得て満足せんとするかに疑を挾まざるを得ざりき。實に此問たるや餘りに漠として要を得ざるなり。則ち過失は當然教師に存せるに自ら咎むるとは爲さず、却て生徒の答へ能はざるを咎む。彼れその「ピラトは何者なりや」と問ふて「羅馬人なり」との答を得たりし時何すれぞ「然り」といひ、且つ一步を進めて「彼は當時如何なる職を奉せしや」と問はざりしぞ。斯く問ひ試みなば必ず其心に期せし答を得たりしならむ。惣じて問題はその豫期せる答辯を引出すに適切なるものを選ぶべく、又豫期せし答辯ならざるも全然誤謬に非るかぎりには更に問言葉を変へて再試するを要す。又概して生徒の答辯は教師の問題よりも一層善く思慮したるもの、稱揚すべきものあり。故に教師たる者は其教場に臨むに當りて須らく其事を念頭に置き、我れ問を發して而して一人の答ふる者なきか、又は誤れる答を爲す者あらばその過失は生徒に在らずして教師の提發したる問題に存するを思ひ覺るべし。而して更に問題の言葉を變へて問ひ試みなば教師は必ず其生徒の我が想像せしよりは遙かに伶俐なるを悟らむ。

教師の提發する問題が生徒より其同心協力を獲るに與りて大に力ある如く、生徒よ

り教師への質問は更に大に其同心協力の實を擧ぐるとを得べし。抑も生徒の質問は其思想觀念を發露し且つ其需用を表現すると却て教師の提發したる問題に答ふるよりも幾倍蕪せるや測るべからず。良教師は須らく其生徒をして基督の幼時即ち十二歳の時エルサレムの殿堂なる聖書學校にて諸教師の中に座し「且つ聽き且つ問ひぬ」たまひしに倣ふやう訓練せざるべからず。此の「且つ聽き且つ問ふ」ことは當時猶太諸學校に於ける習慣なりしが實に今日吾人の各種基督教主義學校に於てもその習慣と爲すべき所のものなり。蓋し兒童は質問するを好む所の者なり。其授業中に彼等をして自ら進んで自由にその教師に質問せしむるやう仕向け勵すは生徒のためにも教師の爲めにも甚だ利益にして、双方の同心協力は之に如くものなく、教授の實効は此の如くにして始めて得らるべきなり。

又生徒に其眼を使用せしむるとは同心協力を獲るの道として必ず見逃がすべからざる所の者なり。聖書は第一之が爲めには必要なる物なり。當日の學課以外の聖書の章句は之に由りて索搜し得らるべし。種々の章節文句は學課の一節と比較のため列舉し得らるべし。此の比較を爲さんがためには甲生徒は其携へたる聖書を繰きて某書の某章を探るべく、他の乙丙丁の生徒は某傳某記の某章某節を索め得べし。或は生徒一同を同時に同一章節に注目せしめ而して後ち地圖若くは繪畫を指示して彼等の了解を

助け以て其眼を遊ばし解るの暇なからしむるを得べし。

石盤の使用も亦甚だ必要なり。巧みに之を使用せしむれば生徒の學習上に興味と利益とを興ふると尠しとせず。小形の疊折自在なる不純硫酸製の石盤ならば輕便にして甚だ佳なり。教師も生徒も各一個を携へをり、而して之を使用するには決して形式的にせず又使用を強ふるとなく、唯必要の時にのみ之を用ひしむるのみ。たとへば幕屋若くは殿堂に關する學課なりし時には一々教師の命の下に、又は教師の教へに従ひ其各携へたる石盤に聖所と至聖所との略圖を描き、次に櫃、燈臺、燔祭壇其他諸器具の位置を符記する等によりて、生徒等は大に幕屋又殿堂の如何なる構造又は状態なりしかを會得するなるべし。或は又此石盤に略地圖を描寫し學課中の地名の位置及び其各地の距離等を記し得べし。

又右の如き幕屋地圖等の如き形象的事物の無き場合にも此石盤の使用は廢すべからざるなり。即ち當日學課中にて教師が特に心を用ひて教へたる所の主眼たるべき眞理を備忘のために記載するの利あり。又當日の學課より各自特に感得したる教訓を認め置くの利もあり。其他の効用枚舉するに遑あらず。

以上列舉せし種々なる方法によりて教授上教師と生徒との同心協力は之を獲るに庶幾らん。

吾人は章を分ちて既に教授上三様の方式即ち生徒に在りては教師の教ふる所の事に注意すると、教師に在りてはその教へんと欲する所の事を明白にすると、及び教師と生徒とに在りては同心協力すべきことを個々に論じたりと雖も、こは個々獨立の教授上の方式には非ずして必ず三者相待つて始めて其効を奏すべき者たるなり。即ち教師は其教授時間中絶えず生徒の注意を保留し、その教へんと欲する所を明白ならしめ、而して教師と生徒とは其間必ず同心協力の情態に在るべきなり。實に此同心協力は授業に着手する際より缺くべからざる所の者にして、一方に在りては生徒その注意を怠らず、他方に在りては教師明白に教授して遺憾なからしむ。此の如く教授と學習と相待つてこゝに始めて教授の能事畢れりと謂つべきなり。

吾人は上來教授法上の骨髓とも謂ふべき要素を詳論したり、實に此等の要素なくては教授法は決して完成し得られざるなり。今や吾人は完全なる教授の一要素として溫習的試験の一方を論せんと欲す。たとへ試験を用ふると無くとも教授は爲し得べしとするも、試験の方を假らずしては教授法の完成を明瞭にし難く、又教授法の極致は巧妙なる試験法を併用するに非ざれば不可能の者たるを斷言するに憚らざるなり。是故に試験の方式は斷じて教授法上より除き得べき者に非ざるなり。蓋し試験も亦上述せし教授法と同じく三様の方面を有し、一は生徒、一は教師、一

は教師と生徒と兩つながらの上在りとす。詳言すれば則ち試験たるものは生徒が學び得たる知識を検すると、教師が一たび教へたる事實又眞理を一層牢く生徒の頭腦に銘記せしむると、及び一學課、數學課又は一學期間若くは一年間の全學課を通じて教師と生徒とが其學課に示められたる事實又眞理以外に新見地を發明することなりとす。故に試験方の成功は即ち全教授法の成功なりと謂ふべし。

試験的方法

第一節 生徒の知識を試験する事

凡そ温習的試験なるものはいづれの學校にても授業上極めて緊要なる事として之を行へども唯獨り日曜學校にては初めより之を施行せしとなし。諸學校の生徒はたとひ其學課の眞意を會得せざるも兎に角諸記背誦を善くせしといふを以て日又日其課を進めゆき、而して一週か一月の末若くは一年の終りに試験てふ制度によりて其學び得たる各學科の造詣を査察せらるゝなるが、唯獨り聖書研究の一學科のみは未だ嘗て此種の試験によりて其造詣を査察せられしとなし。抑も聖書研究は他の學科の研究と等しく心智を費して而して獲らるべき者にして、その獲たる知識は他の學科の研究より獲

たる知識を査察せらるゝと等しく此も亦試験制度に由りて査察せらるべきものなり。故に或試験的方法によりて生徒を試験するとは彼等が聖書研究上の知識の程度を査察し確認するにつきて最も緊要なる者たらずんばあらざるなり。

此の試験は教師をして其受持生徒の學力の進歩と自己の教授事業の成功とを知らしむるに頗る緊要なるものなれども從來教師自ら進んで之を試むるとなかりき。教師は須らく自ら心に問ふべし、過る一學期間の授業によりて我が生徒は果して幾何の知識を得たりしや、我は十又二の課程を授けたり、而して生徒は之に由りて得たる所の我れ人の目に明白なる者ありや、生徒は此の十二課程中の主要なる事實を記憶し居れりや、又此等課程中の精神的敎訓及び實際的應用を忘却し居らざるかと。假令此等の試験は教師の喜ぶ所にもせよ喜ばざる所にもせよ、試験は生徒の智識と教師の成功とを知るに於て殊に必要なりと謂はざるべからず。

而して此試験なる者は必しも定期のもの形式的のものたるを要せず。日常の教授の際之を試むるを得べく、或は當日課程の畢る時に於ても、次の日曜日課程の開始せらるゝ時に於ても、或は學課半ばにても、一ヶ月又一期の終にても、要するに教授の際に於て成るべく屢次に且形式的ならずして之を行ふを可となす。

生徒の知識如何を試験するの方は之に教授するの方と同じく極めて單純なり。何人

にても能く教授し得べき所の者にはその教へたる所の結果を試験するに毫も困難なかるべし。而して其試験に困難を感じ良成績を得ざる者ある所以は一に眞の教授なる者の嘗て生徒に施しあらざるが故なり。夫れ單に生徒に眞理を説話したるを以て教授せりと思惟する所の教師は實に何事も生徒に教授したるには非らざるなり。故に眞の教授なるもの、施しあらざるに其成績を試験せんとするは至難のとならずや。且つ試験には必ず巧みなる問答法に由らざるべからざるに平生單に説話を以て教授の方法と誤解せし教師にはおのづから眞の試験の方式に熟せざるは當然のとなりとす。又諸記書誦をのみ教授の眞諦と心得て、未だ嘗て生徒に眞の知識を與ふるとなかりし教師は亦如何にして此試験を施行するを得んや。たとひ教師印刷したる問答書によりて常に生徒に問ひつゝありしにもせよ、そは其諸誦したる章節の主旨たる眞理に關し生徒が眞に會得したる所を試験せんがために更に別問題を提發するに何等の補助にも經驗にもならざるべし。

試験を施行せんとするに當り教師の第一に思考すべき所のとはおのが嘗て生徒に教へし所のものと生徒の能く記憶しをらんとを欲せし所のものとの對する問題なりとす。若し教師にして此點に差支さへなくば生徒を試験するとは極めて單純に極めて容易なるものなり。一例を舉げんに、エリヤとアハブとに關する一課程ありとせん、教

師は嚮にアハブとは何人なるか、エリヤとは何人なるかを（唯説話的に之を教へしに非らず前に記述せし問答法によりて）恐ろに教へ置きたれば今これを試験せんには左の如く問ふべし、『此課に記載せられたる人は幾名なりや』『其一人は誰なりや』『他の一人は誰か』『其一人は如何なる職（若くは爵位、位置等）に在りし者なりや』『他の一人は如何なる職分（若くは天職）を有したりしや』『いづれが國王なりしや』『いづれが預言者なりしや』『王とは如何なる者なりや』『預言者とは如何なる者なりや』『卿がアハブにつきて知れる所の事實を述べよ』『卿がエリヤに付きて知れる所の事實を述べよ』と。此の如き問題は生徒の學力知識を試験するに毫も遺憾なく、而して此の如き試験は教授事業を完成し其修業の證とするに最も緊要なるものなり。

三四の問題は各課程の終りに生徒に問ひ得べく、又次の日曜日其課程の初めに於て繰返して前問題を提發し得べし。此等の問題を案出するには教師たるものは課程中如何なる事實又眞理が最も生徒の知り且つ記憶するに必要な者なりや否やと能く甄別して我が心に留め置かざるべからず。若し教師の心に此の用意なくば試験の際に於ける問題を案出するに甚だ困難を感すべきなり。

又一ヶ月或は一期間若くは一年間を通じて教へたる課程の試験問題も亦一課程の問題の案出方に準據すべきなり。即ち此一月、一期、一年間主として生徒に教へ學ばせ

し事項につきて問題を選ぶべきものとす。若し各課程の標題、話題、金言等を教授の主要事項と爲せしならば須らく此範圍内に於て問ひ試むべし。若し又各課程中の主なる事實を個々に生徒をして記憶せしめんと務め來りしならば問題は必ず其主なる事實より選ばざるべからず。若くは又各課程の教訓及應用を主として教へ置きしならば則ち問題も亦之に準ずべく以て我が教授事業の幾何の成功ありしやを試験すべし。すべて教師が生徒を養育せんとて此日來與へ來りし食物は骨なりしか將た肉なりしか又は滋養液汁なりしか、此に由りて生徒が教師の思望する所を窺ひ知るべく、教師の問題もこれに一致せざるべからざるなり。

要するに試験問題は生徒には其學力如何を検定する所の者たると共に教師には其教授の成功如何を検定する所のものたり。故に試験は教師にも生徒にも均しく必要にして尊重すべき所の者なり。

第二節 一たび教へたることを忘れざらしむる事。

吾人は唯一回打聽きたるのみにて、又一回の勞力にて一眞理若くは一事物を學び知るとは幾んど希れなり。嬰兒は一の言葉を幾回となく唱へ教へられて而して後ち始めて能く自ら語り得べく、漸く長じて物學びする頃とならば其課程を幾回となく復習せ

ざれば終に覺え得ると能はず。又一の直線を引くにもイロハを習ふにも最初は必ず手を持ち添へて教ふるに非らざれば其書法を覺り得ざるなり。音に兒童のみならず青年壯年の人も亦然り。如何に熱心なる音樂の嗜好家にてても其特に注意を引き、耳を悦ばしめし新樂譜を唯一回打聽きたるのみにては決して自ら彈奏し得ざるべく、又氣力旺盛の青壯の人も其尊重する所の書籍を反覆沈潜して玩味するに非らざれば其書の彼等に教ふる所の事を悉く學び知ると能はざらん。かく兒童時代より壯年時代に至る迄一たび學びたる所のことを反覆査閲するは實に之を我心に堅く植ゑて永く忘れざらしむる所の道なり。

三百年前に於けるジュスイツト派の學校は教育の點に於て當時の世界に冠たりき。其教授法上試験は生徒が一たび學びたる所のことを忘れしめざる手段として甚だ重んぜられたりき。而して此方法の格言の一として『反覆沈潜は研究の母也』の語あり。されば各課程には必ず二様の反覆ありて、一は授業の始めに前課程の反覆にして、一は授業の終りに其日授けたる課程の反覆なり。且つ一週の中一日は全く其反覆温習の爲めに備へられたりき。而して此反覆温習の基礎を堅く置かんが爲めに最下の三學級にては一年の後半六ヶ月は前半六ヶ月間教授したる所の温習を以て之に充つるに至れりき。此方法に由りて極めて聰明なる兒童は能く十八ヶ月を以て他の三年間學習せる者

と同一の學力知識を養ひ得たりといへり。

現時の日曜學校に於て同一の學力ある教師が相分れて各一級を受持ち或期間同じく教授して而して其級と級との生徒の學力に優劣生じなば此は其教師等が試験を爲せしとの度數と其試験方の周到とに比例せるものならざるべからずといふは恐くは眞實ならん。又教授に教師が用ゐたる時間の四分の一若くは二分の一を以て如何なる級にても試験方に由りて優に同一の効果を收め得べしといふも亦恐くは眞實ならん。かく言はゞ一年に四回試験日曜日の廻り來りし時其措置に當惑する如き所の教師には甚だ奇異の感を惹起さしむべしと雖も、教師が平常多く又巧みに教へ居れば居るほど教師は其事業を檢定するの機會を悦び、又此の機會を巧みに利用するなるべし。故に試験を重んずる所の教師には一年四十八回の授業のため四回の試験日曜日を失はんよりは寧ろ一年唯四回の授業を爲し、その試験の爲めに四十八回の日曜日を費さんことを欲するなるべし。蓋し如何なる課程をも満足に心に會得するとなきよりも單に四課程にても十分理會し記憶するは生徒に取りても教師に取りても頗る好ましきとなりとす。而してかく生徒に課程を遺憾なく理會せしめ記憶せしむるには必ず此試験に由らざるを得ざるなり。

抑も吾人は一たび學んで能く心に諳んじたる所の者にては屢は反覆温習するとなき

ては到底永く之を記憶すること能はざるなり。たとひ一たび心に銘記したる所の事は決して忘るゝと能はずとは世人の能く言ふ所のとなれども、而かも又吾人が曾て知り得たる所のとは永久に吾人の記憶に存し得べきものに非らざるは是亦何人も承認せざるを得ざる所のものなり。吾人が嘗て一たび知得したりし所のとも今は全然忘却して初めより知りしとなきが如きもの多々これあり。誰か能く嘗て容易に背誦し得たりし詩句を今一字一句も誤るとなく吟じ得るか。誰か能く嘗て見聞したる奇事異聞を悉皆明白に記憶しをれりや。誰か能く嘗て一たびは諳熟したりし繁雜なる製造法を誤謬なく説明し得るか。誰か研究上注意して讀みたる十部の書籍のうち一部丈にても其初頁より末頁まで悉く其内容を諳んじて何時たりとて之を忘れ誤るとなきを得るか。吾人にして若し以上の事のうち何れにても常に諳んじゐて毫も忘れ誤るとなしとせばそは絶えず温習し反覆しをれるが故にあらざるなきを得んや。

嘗に吾人が一時學びたりし所の事物のみならずその生れたりし時より知り來れる所の事物にても若し温習を缺かば全然忘失するに至るべし。吾人の國語と雖も亦然り。こゝに一人の童兒あり、既に其生國の語を以て談話し書を読み文を綴り得るに至れるも一たび之を海を越えて言語全く異なる他邦に數年住居せしめなば其嘗て自由なりし郷國の言語は悉く忘却するに至るべし。予が知れる一人の支那學生あり、久しく合衆

國に遊學してエール大學の業を卒へ將に歸國して其同胞の爲めに其學びし所を以て盡さんとせしに彼は新に其支那語を學ばざるを得ざりき。是れ彼が久しく郷國を離れりて其國語を以て談話する機會の絶無なりしと換言すれば其國語を温習するを欠しが故なりき。然れども是れ豈に支那の一學生のみに止まらんや。

去れば吾人が一たび學び得、知り得たりし事も反復温習せざれば復た忘却するは何人にも免れざる所なるが故に教授上温習的試験の必要なるは明白なりとす。故に教師たる者は此試験を重んじて機會だにあらば之を利用して生徒が忘却するを防がざるべからず。又多くの場合には始めて之を教ふるの際に於て特に之を丁寧反覆して彼等の心に印記せしめざるべからざるとありとす。是れ主基督が其弟子を教へ給ひし時屢ば用ゐし所にして、例へば富める者の天國に入り難きを諭し、ペテロに我を愛するか、我羔を牧へと警告し給ひしが如し。

聖パウロは其ピリピの改宗者に主に事ふるを喜ぶべきことを勧め求むるに當り「欣ぶ」又「喜ぶ」等の文字を幾んど十二回も使用したるのち猶進んで主に在りて喜ぶべき訓誡を反覆し且つ此訓誡を諄々重言する所以を辯じて曰く「終りに我これを言はん我兄弟よ爾曹主に在りて喜べ我このことを爾曹に書きおくるは我に煩勞なく爾曹に益あり」と。更に又念を推して「なんぢら常に主に在りて喜べ我また言ふなんぢら喜ぶべし」と。

といひぬ。夫れ教師が生徒に深く心に銘せしめんと欲する重要な真理を丁寧反覆して教習せしむるは當に其教師には煩勞なく而して生徒には益なからざらんや。

前回に於ける日曜學課の二三の問題は各日曜日教授の始めに再び問ひ試み、又當日學課の要點に注意せしむるやう授業の終りに二三の問を試むるを可となす。又新課程と關係ある前回課程中の事實若くは真理は新舊相接続して絶えず温習的質問を爲すも亦可なり。或は又時としては單に同一問答を同時に反覆し。念を推して深く生徒に銘記せしむるも亦可なり。たとへばダニエルが獅子の洞窟に投げ入れらるゝも祈禱を斷たざりしと、ネブカデネザル王の建てたる金像を拜するを拒みて、炎々たる爐火中に投入せらるゝも顧みざりし三名のヘブル人のと、又はペテロ、ヨハネが縲綯の苦みを顧みず神の道を宣傳せしと等の課程あらん時教師は生徒に向ひ「此事實は卿等に如何なる教訓を與ふるや」と問はば生徒は必ず「吾人は如何なる事情ありとも必ず正義を守らざるべからざることを學べり」といはむ。教師又問ふて「此事實は卿等に如何なる教訓を與ふるや」と問へば生徒再び「吾人は如何なる事情ありとも正義を守らざるべからざることを學べり」といふべし。教師は更に三たび「此事實は果して卿等に如何なる教訓を與へしか」といひ、生徒は又同じく「吾人は如何なる事情ありとも正義を踏まざるべからざることを知れり」と答へむ。此再三の問答によりて生徒は必ず自己の答

辯に力を入れ且つ此教訓を一層堅く心に保つに至るべきや疑を容るべからざるなり。
 教師は其一旦教へたる所のを深く生徒の心裡に銘記せしめんためには如何なる時
 にも其溫習檢定的問題を準備し居らざるべからず、屢ば之を反覆して記憶を新にせ
 しむるに非らざれば生徒は全く之を忘失するに至るべし。教師は其教授する所の真理
 につきて其いづれか最も生徒に記憶せしむべき最要のものたるかを知るべき等なり。
 而して其最要と認めし所のものを以て溫習的檢定的問題の主要と爲さるべからざる
 なり。

第三節 全課程の新見地を發明せしむる事

さきに述べたりし所の生徒が既に得たる知識の程度を試験する方法及び一旦教授せ
 し所を一層深く心に記して忘れしめざらんための方とて教授の際溫習的試験を爲
 すより生ずる所の利益の外に猶一の利益は此溫習的試験によりて其學びたる所の事
 につきて新見地を發明する是れなり。而して此新見地は時々の、又不時の溫習的試験に
 由るに非ず、一定の期に於て連絡せる數課程を通じて之に溫習的試験を爲すに由りて
 獲らるべき利益なりとす。

今こゝに家屋の建築に備はれし者ありとせん、此人時又時、日又日煉瓦石を運び來

て一個々々命の儘にその基礎より屋壁の冠石に至るまで積み重ねゆくも其眼は其手の
 働く一部分に止りて其家屋の全形につきては未だ知る所あらざるなり。而して其工事
 全く成り退いて外方より我が從事したりし所の工を視なば我が唯命のまゝに積み築き
 し煉瓦は或は毎室の區劃となり、支柱となり、屋壁となり互に連絡關係して一大家
 屋の建設せられしを知らん。又數哩の遠きに跋渉する者ありとせん、彼は唯縁滴る
 牧野を横ざりしを知るのみ、密林を縫ひ往きたるを知るのみ、潺々たる小流を涉り、
 斷崖絶壁の下縁に一徑の通せる所を過ぎしを知るのみ、唯その目の觸る、所、足
 の向ふ所に應接するのみにして其全景の如何を知らざるなり。然れども其行程を盡し
 たるのち只有る山の巔に登りて我が越し方を願れば丘陵の起伏せる、小流の蜿蜒たる、
 密林の鬱葱たる、牧野の渺茫たる一幅自然の畫圖を作成せるありて、眼界の一新せる
 を覺らん。知識の造詣も亦之に異らざるなり。一週又一週一課程を學習し、積んで十課
 程となり廿課程となりたるのち一貫して之を檢索すれば個々の如くに思ひたる事物は
 互に相關係連絡して新知識を得るに至らん。是れ一定の期に於て綜合したる溫習的試
 験の必要なる所以なり。

凡て相關係し連絡せる事物は必ず全景を有す、此全景を觀察するによりて他方法
 にては得られざる所の利益を得可べきなり。凡て聖書に記載せる事實及真理は互に相

關係連絡せり。故に聖書を教ふるに當りて其全景を觀察せしめざる時は其事實真理の本意を觀通さしむるなり。毎學課にも必ず相關係する數件の事實及真理あり、こは學課の初めに於ては觀察すると能はざるものなるが故に授業の終りに於て全景的觀察を爲すべきものなり。而して此全景的觀察を爲さんが爲めに學課を反覆するは生徒の知識を試験せんため、又教へし所を生徒に牢く記憶せしめんために溫習的試験を爲すもこのとは全く其撰を異にせるものなり。此區別は溫習的試験を爲すに當り教師の常に心に留め置くべきとなりとす。たとへ其學課は單純なる一の物語にして唯教理的教訓を含めるものにもせよ、又は一見關係なき實際上の訓言なりとも亦必ず其全景を有するが故に全景的觀察を爲さざるを得ざるなり。

こゝに列王紀略上第十二章第二十五節乃至第三十三節に記せるヤラベアムの罪惡に關せる一學課ありとして上述全景的觀察を説明せん。此一條の物語は極めて單純なる者なり。ヤラベアムはソロモンの死後其領國を分つて其大部分に王たり。ヤラベアム謂らく我民禮拜のために常に我敵たるソロモンの子レハベアムの領國に往かんには終には彼等の心レハベアムに歸するに至らんと。是れ敵國競争上免るべからざる配慮なりとす。當時禮拜の場處としては二王國に唯一箇所あるのみにて、二王國の人民の禮拜すべきためエホバの承認し給ひし者なり。是に於てヤラベアムは更に擅に一の禮拜の

式を定め、黄金にて二個の積の像を造り、之を其國境に立て、人民をして此罪深き偶像禮拜を爲さしめたりしなり。教師は生徒が此物語の顛末を能く知り得たるを視ば則ち巧みに問を發してヤラベアムが此大罪惡は其動機に於て甚だ惡しからざりしことを知らしめ得べし。先づ第一にはヤラベアムは禮拜てふ義しきことを爲すに困難を感せしと第二には此義しき禮拜を爲すに伴ふて起るべしと思ひし危險を避けんと企てしと、第三には此企ての爲めに其全力を用ひて偶像禮拜てふ最も惡しきことを實行せしとを逐次に問ひ試むべし。かくて此學課の全景的觀察は罪惡を實行する成行き、即ち第一、惡しきことを思ひ慮ると、第二、惡しきことを計畫すると、第三、惡しきことを實行するとは是なり。故に若し何人にもヤラベアムが大罪惡に陥りし如きことの無からんとを欲せば則ちヤラベアムが最初の惡念を壓伏するに在ると、換言せば罪惡への誘惑と戰ふて之に克つに在るとを生徒に教訓し得べきなり。

又哥羅西書第三章第十六節乃至第廿五節の如き實際的訓言に關する學課ありとせん。節を逐ふて研究せば此學課は夫婦、父子、奴僕の遵守すべき各種の義務と敬神、審判、希望等とに關する所のものたり。之に全景的觀察を施せば基督教徒たる者は其境遇の如何に拘はらず其心情に於ても行爲に於ても將た期望に於ても悉く神に對する義務を有するを知り得べし。

以上二例の如く聖書は其如何なる課程にても此全景的觀察を施す能はざる所のものなし。而して此觀察は各學課につきて新しき發明を爲し得る所の者にして、若し教師が巧みに之れが指導を爲すとき時はかゝる重要にして大なる實際的利益を生徒に與へずして止むに至るべし。

一ヶ月又は一期若くは一ケ年間の課程を温習試験するに當りては其全景的觀察は唯一課程の場合に於けるよりも新に發明する見地を得ると更に多しとす。一ヶ月の聖書課程は之に全景的觀察を施せば恰も同課程の外に更に一新課程を添加したる者の如くならん。一期の課程の場合も之と同じく、その一期末温習試験の日曜日には十二の課程を其順序に従ひて再試験を爲すに非ずして、更に第十三の新課程は此全景的觀察により従前十二課程より新見地の發明に充てらるべし。

凡そ聖書の課程は其個々別様なると同時に又其一致を有するものなり。今聖書より十二の課程にして相互に關係なく、真理の獨立なるものを選択せんとするは殆んど不可能の事に屬す。此一致を認めて之を生徒に會得せしむるは一期末の温習試験と關聯して教師の注意すべき義務なりとす。是れ實に温習せる諸課程より新見地を發明せしむるものにして、即ち既に學び來りし十二の課程中の材料に因りて更に第十三課程を編制せしめたるなり。然るに此事即ち全一期間の最も重要なる此事に従來日曜學校教

師の等閑に付しをれるは慨嘆すべきことなりとす。

今十二課程中より新に一課程を發見編制すべき二三の實例を示めさんために萬國日曜學課に就きて予の選ぶ所左の如し。先づ使徒行傳第廿一章乃至廿八章を十二課程としたる者よりは「説教者としてのパウロ」、「牧師としてのパウロ」、「囚人としてのパウロ」、此三様の使徒パウロが史的描寫を示めし、又其實際的教訓としては「職分を盡すに際しての危険」、「職分を盡すに際しての獎勵」、「職分を盡すに際しての報償」是れなり。次に羅馬書より提多書までの書簡を探りたる十二課程よりは「基督信徒」を示すべし。第一「信徒の品性、即ち信徒とは如何なる者なるかの」と、第二「信徒の所有、即ち信徒は何物を有するかの」と、第三「信徒の行爲、即ち信徒は如何なる事を爲すものなるかの」と是れなり。又希伯來書より約翰黙示録までの中より選びたる十二課程よりは「吾人の救主」を示めさん。第一「救主の事業、即ち救主は吾人々類の爲めに何事を爲し給ひしかの」と、第二「救主の準備、即ち救主は吾人の爲めに何物を準備し給へりやの」と、第三「救主の要求、即ち救主の吾人より求め給ふ所のもの」と是れなり。以上は皆一期間教習したりし所の課程に全景的觀察を施して得たる所の發明にして、凡て如何なる課程にても此種の發明を爲し得ざるものなく、此に由りて一新課程を期末に編し得られざるものなし。

たとひ此の多くの課程を温習試験して其中より一の新課程を発見するの方式は此等の課程をして新光明を發揮せしむる所の者なれども、其新課程を編制する所の材料は生徒の未だ嘗て知らざりし所の者にはあらざるなり。其新課程は一の新見地の發明なりと同時に又猶一の温習試験なり。其編制は實に生徒親ら之を爲すべき者にして、教師は唯その巧妙なる指導に任ずるのみ。教師は生徒に其學び來りし所の諸課程を一たび反顧して、教師の指し問ふ所の條項につきて其見る所の意見を教師に告ぐるとを求むるなり。生徒はかくして教師の指導の下に再試験再温習を爲すに際しておのづから其答案を作成する所の新課程を発見し、且つ之に興趣を有し、隨て其意義を心より理會するに至るべし。之を喩ふるに相聚りて一全景を成すべき繪畫の數片に剪裁せられしものを取りて之を生徒に示めさんに、生徒は其各片に描かれたるもの、何物たるかは能く知りをれりと雖も其一片と一片との連絡關係を知らざるなり。是に於て教師は其甲片と乙片との關係を問ひ、丙丁片と戊巳片との連絡を問ひ、かくて次第に其序に従ひて此等の細片を接續しゆき、生徒をして始めて此等の細片は相聚りて一の完き景物を作成するべしと知らしむるを得べし。此は生徒の未だ嘗て見しとなき一景物を新に描寫し示すに非ずして、唯その固より知れる所の材料を活用して一景物を組成せしに過ぎず。吾人の謂ゆる新見地の發明とは亦之に異らざるなり。

數課程を一貫して二三の概括的問題を提發することは新見地發明のために温習的試験の際第一着手として爲すと此課程を個々に憶起せしむる方法を取るよりも優れりとす。例せば出埃及記第卅五章第廿五節乃至申命記第卅二章第五十二節の一期間課程の時ならば左の如く問ふべし。此期間吾儕の課程は聖書中如何なる部分なりや。此等の課程は凡そ幾年間に亘れる事跡に關せりや。此等の課程は如何なる人民に關せるとなりや。此人民は特に如何なる名稱を有せりや。此期の第一課程には此の主の民は何處に在りしや。又最終課程に際しては此の主の民は何處に在りしや。此等の問題は十二の課程を唯一課程として生徒に觀察せしめ得べし。而して次に此十二課程中の一貫せる教訓を觀察せしむべし。其問題と答案とは左の如し。問、如何なる目的にて主の民は此の年間曠野を徘徊せざるを得ざりしや。答、其訓練のために。問、如何なる目的のために主は禮物、建物、節筵等種々の命令を己の民に下し給ひしや。答、主は其民をして王に奉仕する道を盡さしめんとて之を指示し給はん爲めに。次には吾人の爲め應用すべき教訓の問答は左の如くなるべし。問、此等の課程は吾儕に何事を教へ何物を證明するか。答、神に奉仕する適當の道を教へ明かせす。問、此期間の課程より實際的教訓として卿等は何事を發明せりや。答、神に奉仕する適當の道。かくて此「神に奉仕する適當なる道」一句を此期間の教訓として前節に述べし石盤に記載すと假

定せよ、而して此一大主旨につき猶課程中より若干の教訓を拾集せしめよ。問、此期の第一學課に記るされたる者は何か。答、イスラエルの民悉く其獻納物を幕屋に持ち來りし事。問、此時此等の獻納物を持ち來れるに特に吾儕の注意すべき所とは何なるか。答、彼等が心より願ふて獻納げたりし事なり。問、「心より願ふて、」甚だ可なり。然らば心に願ひ悦んで神に獻納物を爲すと換言せば如何なる奉仕を神は嘉納し給ふや。答、其精神。問、その何？再言せよ。答、其精神なり。曰く可也、吾儕が神に事ふるに其精神を貴ぶとせば之を温習試験的課程に於ける一要点として石盤に記入せよ。

第二學課に於ける幕屋建設に關し二三の問題を發して生徒の注意を喚起し、以て神に奉仕する方法を發明せしめ又之を石盤に記入せしめ、かくて順序に順ひ一課程ごとに生徒の注意を喚起し、其進んで贖罪の日の條に至らば亦二三の問題を提發して「凡て主の前に犯せる罪より深められんために」と説明せられし此奉仕の目的を摘出すべし。かくて此温習試験は生徒をして其見解を以て此一期間の課程より新見地の一課程即ち神に奉仕する適當なる道、(一)其精神、(二)其方法、(三)其目的を作成せしむることを得べし。

此一期間課程の温習試験に於て新見地課程を教へんが爲めに教師は順らく其課程編

制の計畫及び其問題の提發方を準備すると肝要なり。生徒をして此の如き新見地の發明あらざらしめば聖書課程の研究は十分なりとは謂ふべからず、又日曜學校の教師は其職責を盡し得たるものとは謂ふべからざるなり。

結 論

吾人は上來既に教授のことに關してその發端より温習試験に至るまで個々詳細に論述したれば、今や之を分ちては個々の關係、合せては一大主張として此等の各章節を論せんために一篇の反顧を爲すを宜しとす。

吾人は實に教授とは如何なるものなるか、又教授は如何に之を爲すべきものなるかの二點を明かにせんとしたりしなり。而して教授とは如何なるものなるかを明かにせんために先づその似而非教授なるものを論じたりき。即ち説話は教授に非ること、諺誦を聴取するは教授に非ると等今日一般に教授と見做されざるもの、多くは吾人の謂ゆる教授に非ることを斷言せりき。而して吾人の謂ゆる教授なる者は巧妙にして能く計畫したる方法に由りて生徒に事物を知らしむると、教授とは學習の必然伴ふべき事業なると、唯何物か學習せられて始めて之が教へられしと、彼に學習なきは我に教授なかりしこと、教授とは教師と生徒とより成る二様の事業なると、而して教授の進行中

には一面は教師、一面は生徒、一面は教師と生徒との協同より成立する三様の事業あることを極論せりき。吾人は教授上の要素——此なくては如何なる教師も一事を教へ能はざる所の——は教師が其教授せんと欲する所の生徒の性情態を知ると、其教授せんと欲する所の學課の明瞭なる知識を備ふると、其學習せしめんと欲する所の生徒に其教授せんと欲する所の事物を如何に教授すべきかを知るとに在るを論じ、猶進んで教授の眞諦は三の秘訣即ち生徒に在つては注意を爲すと、教師に在つては其教授せんとする事物を明瞭に爲すと、教師と生徒とに在つては教師の心に蓄ふる知識を生徒の心に移植せんための同心協力、之を一層適切に言はば教師の指導の下に生徒が自ら臨みて知識を得るやう教師が生徒を助くることを述べたりき。

吾人は教授の方法を研究するに當りてこれ等の方法——教授の學理とは區別して教授の技術を含有する所の——は教師が必ず其教授の準備の際にも、其實施の時にも、將た其溫習試験の當りても注意せざるべからざることを論せり。吾人は又教師は教授の際其教授進行の本來の性質として生徒に其分を爲さしむるに與りて責任あると、之れがために教師は常に其學課と生徒の人となりとを知り、又如何に之を教ふべきかを知れるのみを以て足れりとせずして、必ず之に加ふるに如何にして生徒の注意を喚起保持すべきか、如何に其同心協力を獲得すべかに絶えず心を用ゐざるべからざることを論じたりき。

じなりき。

吾人は又教授が一通り畢りたりとするも溫習試験の一事を欲かば其教授は完全ならざることを論せり。而して此溫習試験にも三様の事業あり、即ち生徒の學力を試験すると、一旦教へたる事物を牢記せしむると、及び教師と生徒との協同の力にて是迄教習し來りし事物を一括して新見地を發明せしむると是れなり。

今や此書の讀者にして日曜學校の教師たる諸君は教授の性質及び方法に關して知得し給ひし所蓋し多からん。希くは吾人の説きし所諸君の爲めに用ゐられて日曜學校教育の一大發達を見んとを。

外篇

日曜學校教師の教授以外の事業

生徒の陶冶及び嚮導

緒言

吾人は既に日曜學校教師が教場に於ける教授事業につきて詳細に論述せり。然れども教授なるものは日曜學校教師に取りて決して其唯一の事業といふべからざるなり。茲に生徒の品性を陶冶し之を嚮導する所の一大事業あり。是れ信に教師たる者の知らざるべからず、怠るべからざる所の者にして、其教育上緊要にして大切なることは教授の業にすこしも遜らざる所の業なりとす。

夫れ教授は固より人智の開発上緊要にして全力を盡くして従事せざるべからざる所の者なるが故に、吾人は上來章を重ね節を積みて其方法を論じたりき。然れども單に教授のみを以て教育の能事畢れりとは爲すべからず。生徒の品性を陶冶し、其運命を指導するとは殊に教師たる者の三たび意を致さるべからざる所の業なりとす。故に日曜學校教師は生徒を教授すると同時にその品性の陶冶、運命の嚮導に力を盡さる

べからず。而してその生徒を陶冶し嚮導するにも其種類方法頗る多し、今吾人は其二三を選んでこゝに之を論せんと欲するなり。

第一節 感化力の事

感化力とは他を薰化陶冶せんとて其人に及ぼす所の力にして、其性質に發動的勢力又進行的傾向ありて訓誡若くは教授の主點と稱すべき者に非ず、何となれば知識なる者は之を受くる所の人の心意上に發動的勢力たり得、又發動的勢力たり得ざる所の者なればなり。されど又感化力なる者は機械的勢力には非ずして『靜に活動して他を左右する所の勢力』、『次第に、知らざるうちに、長閑に進みくつて身體上に又道德上に効果を結ばしむる』所の勢力なりとす。

此感化力——勿論善良なる感化力——を有し又使用せんには教師たる者須らく神に因りて立たざるべからず、その行住坐臥といひ言行といひ悉く神を代表する所の者たらざるべからず、その物に接し人に交るに當りては其情致云爲すべて皆神より溢れ出でたる所の者ならざるべからざるなり。此の感化力を有し又使用するは教師たる者の義務にして、教場に在りて如何に巧妙に熟練に教授したりとも、若し此感化力なくんば眞の教師と稱すると能はず、又眞の教授事業を爲したりといふを得ざるなり。

感化力に二種あり、有意的と無意的と是なり。有意的感化力は巧妙に企圖したる勞力の結果にして、教授上の一要件として組織的に計畫し得る所の者なり。無意的感化力は教師其人の品性より流れいづる所の者にして、故意有心もて企圖し計畫したるにはあらず、その人物の、無形無聲の徳なりとす。此二種の感化力は兩つながら必要にして教師たる者は其義務責任として二者の一をも缺くべからず。而して教師が生徒の感化上先づ注意すべきは故意有心の感化力なりとす。

使徒パウロは稀有の論理學者なり、又絶世の大教師たりき。其眞理を論じ教ふるに非常に熱中したりき。然れどもパウロは主基督の世人に要求し給ふ所のを兄弟たちに論破し證明するよりも、寧ろ大に彼等を基督に歸嚮せしめんとを願ひ望みなりき。曰く「兄弟よ我心に願ふ所と神に祈る所はイスラエルの教はれんと也」又曰く「若しわが兄弟わが骨肉の爲にならんには或は基督より絶れ沈論に至らんも亦我が願なり」と。此等の語氣を視るに實に高眼慈心單に眞理の闡明を以て自ら足れりとせざる者あるにあらず。蓋し精神意氣の流溢し磅礴する所にこそ感化も存し教誡も存するなれ。又一人年少の女教師あり、その遽かに病んで遂に起つ能はざるを知るやその受持てる日曜學校生徒に關して熱心もて其友に語りて曰く「若し妾の死が單り妾の生徒を主基督に導き得べくば妾は樂んで死し得べし」と。此の如き教師は必ずやその生徒の教は

れんとに關して彼等を薰陶する機會を失はざりしならん。其教授は必ずや彼等生徒に感化の素因たりしならん。而して其常の心懸は單に學課の眞理又は史話を講明するのみを以て足れりとせず、必ずやその教訓を以て生徒の救拯と品性の陶冶とに効あらしめんとて務め勵むしなるべし。苟も日曜學校の教師たる者は教場の内外を問はず其生徒の教訓と感化とに責任を有するを怠るべからざるなり。

世にジョン爺と稱せられしジョン、グアツサルといへる在俗の傳道者あり。此人世人を基督に誘ひ導くに非常なる感化力を有せりき。其非常なる力の素因は實にその値遇する所の人は如何なる種類の人なるにもせよ之をして救主を知り且つ愛せしめんと燃ゆるが如き熱心を有せしに在りき。此人をして基督教の福音士として非常なる成功を致さしめし所以は救拯の道を教ふるに口舌を以てするに在らずして、人を誘ひ導くの絶大なる感化力に在りき。彼はその値遇する所の人の聖賢なると罪人なるを問はずその人を誘ひ導きて救主に歸向するに至らしめずしては一時間も否一分時間も空しく相對坐するに堪へざるなり。或時かれ新英洲の傳道を助けんとてその某都に到れり。出迎ひたる其地の教師と相携へて停車場を出でその教師の居宅をさして來る途次某鍛工の店前に近づきし時の教師はグアツサルに此鍛工は平生基督教を嘲笑し居ればグアツサルが此地滞在の中一たび訪ふて教へ導かれたしとさゝやきしに、グアツサ

川は快く『滞在在中といはずこれより直ちに彼を訪ひ申すべし』と答へて教師が今店さきには花客の數人もをり主人自らは馬に蹄鐵を釘ちをる際なれば重ねて時を視て來らむと言へるも聽かず、ツカ／＼とかの鍛工の店内に入りぬ。教師は驚き見てあれば彼が一言二言鍛工に打諝らふや鍛工は今蹄鐵をうちぬし馬より離れて熱心に新客の言葉を聽きわしが五七分時の後にはヴァツサルの命のま々に爐前を立ちヴァツサルもろともに跪きて神に祈りたりといふ。かく一朝にして鍛工が平日の思想言動を更むるに至りしはヴァツサルが訓誡の如何に非ずして、その感化力の旺盛なるに固らずんばあらざるなり。予が最後に此ジョン爺に邂逅せしは紐育市の郵便局に近き乗合馬車の停車場なりき。予が既に馬車の一隅に坐を占めたり時しジョン爺亦入り來り、一揖勿々彼が心裡に燃ゆるが如き救拯の道に話頭を進めたりき。時に又一人の乗客ありて我儕の向側に坐せり。ジョン爺之を見るや予に『君よ彼仁は耶蘇を愛するものなりや否や』とさ／＼やくと同時に直ちに坐を起ちて彼の人の側に坐し、おのが手を彼の膝上に按き熱心に彼を耶蘇に導かんとて話し始めたりき。その眞摯なる語調態度と、その愛の深く籠れる言葉とを聞き見ては誰か一人厚き敬畏を表はし、深くその人に感動せざんや。若し日曜學校の教師が此在俗傳道者ジョン爺の精神を有し以て生徒を導かば如何なる生彼か能く感動薰陶せられて基督に歸向し、幼き日より神を識るに至らざらん。蓋し

精神の存する所に必ず感化力は存するなり。

予も亦此の經驗を有す。予は予が尙ほ日曜學校の生徒たりし時教へられし所の數多の知識よりも受けたる感化の更に多大なりしとを斷言し得るなり。予が幼時の頃日曜學校に於ける聖書の教授は今日に比しては稍不完全にして且つ組織的ならざりしも、其感化力の旺盛なるとは頗る著るしかりなり。予は多くの教師中より今特に二人の教師を憶ひ出し得、その一人は教授に全力に注ぎ、聖書の講解頗る精細明白なりしも個人的に生徒を感動せしむるには餘り心を用ゐざりき。他の一人は知識は較々劣れるも靈魂救拯に對しては非常の熱心を有せし人なりき。此人の教授は主として問答書を用ゐ、而も較々等閑なりき。然れども當日課業畢れば必ず席を離れて生徒の面前に進み來り、その誰彼の膝の上に靜におのが手を打のせ、慈愛の涙の溢るゝばかり溝へたるその双の眼もて生徒の目を凝視して、やさしき、しかもその全精神のこもりて打ふるへる言葉にて『愛する兒よ、予は卿が耶蘇基督を愛して卿の全身全靈を捧げ奉らんとを心より願ふなり』といふなり。予は此日曜學校に於て嘗て學びたる問答書の教訓も、他の良教師の該博明晰なりし講義も今は早悉く忘れはて、一物も留め持たざれども、此の主を愛し魂を尊む熱心堅固の教師の感化力は今猶我が腦裏に淋漓たるものあり、且つその我が膝上に置きたりし彼の教師の慈愛こもれる掌の重みと涙に充ち

て耀ける眼の光とは四十年後の今日猶昨日の如き感想あるなり。

抑も生徒が救拯の道に入るは其信仰と實行とに存し、すべて教師の監督と盡力とに由れる者なり。教師は正義を命令し説明する所の眞理を教ふると同時に、生徒をして其正義を實行せしむるやう勸勉せざるべからず。若し教師にして其生徒の常に忠信正義にして男らしからんとを望まば各學課の聖書物語又其教訓を嚴正明白に正義に就き罪過を避くる方面に説き導かざるべからず。たとひアブラハム又はラハブが方便上虚言を語りしとて毫も虚言を容赦すべからず、又ヤコブの卑屈陋態の如き必ず之を擯斥すべし。要するは聖書を講ずるには凡て其物語又教訓を忠信篤實公明正大の方面に説き成し、聖書史上の大人物の品性言行と雖も讓むべきは讓め、擯くべきは擯けて少しも假借する所なく、又日常の飲食遊戯の末に至るも戒むべきは戒めて生徒の正義公明なる意志操行を養成せざるべからざるなり。

今日最も卓越せる良校長といはるゝ人は皆その校長として云爲する所の一事一物が大なる感化力を有する所の人なりとす。而して彼等の目的は部下の諸教師をして自己の心志を體して公明正義の方面に各生徒を薰染陶冶せしめんとするに在り。數年前予はシカゴ市のタバナクル日曜學校を參觀したりき。當時校長は市長のデー、ダブリュウ、ホキットル氏（現時は職を辭し福音士として最も有名なり）にして、氏の一言一

行ともに數百の童男童女をして其心意に於ても舉動に於ても和樂恭敬ならんとを求むるに在ると尤も明かなりき。始業前、オルガンは奏せられ先着の兒等は歌うたひつゝあるうちに多くの生徒等は徐々に集り來れり。やがて校長も登校し、昇降口にて教師生徒等に優しくなる言葉と顔色ともて挨拶し、始業の鐘と共に靜に校長席に進み、別に生徒等の注意を喚起すべき呼鈴も用ゐず、兩の手を擴げ擧げて生徒席に對ひ、徐ろに靜に引き下げぬ、是れ彼等に靜肅を命ずる所のしるしなりき。オルガンの餘音も消て失せぬ、校長は低き、而も明晰なる聲音もて語り曰ひけるは「此の麗はしき秋の安息日の静けさよ。若しこの會堂の周圍に樹木のあらば落つる一葉の音も聞えつべし。予は木の葉の落つる音を聞かんために此建物の周圍に凡て木を栽ゑ付けんかと思ひしともありき」と。生徒等は一同水をうちたる如く主の前に靜肅になれりき。蓋し校長の言葉にも様子にも一の教誡とてはあらざるなり、然れどもその言葉のうちに又容態のなかに校長の兼て念ひし感化力の存したればこそ斯る靜肅恭敬は得たるなれ。

セン、ルイ市のピッドル、マーケット、ミツシヨンの日曜學校は數年間「トム」モリソンと俗に稱せらるゝ熱情なる傳道者その校長たりき。此人教誡的方面には餘り心を用ゐざりしが、その思想と感情とに於て常に生徒と教師とを感動せしめんとて深く注意したりき。予は此日曜學校を參觀し、彼が聖書朗讀に於ける細心に思慮したる感

動力の大なるに歎服せりき。彼れ一千に近き生徒に靜肅恭敬を命じ、さて熱心に予は今愛する主耶蘇が如何ばかり我儕を愛し給ひしか自ら宣ひし所の數節を朗讀すべければ皆々能く靜に謹聽せられよ』といひて聖書を手にせるまゝしばし待ちける程に生徒等は忽ち一層の恭敬をあらはし、校長席の前なる小噴泉より落つる水の音の外には一人の咳きするものさへあるなし。この心樂しき水の音だに彼が全衆に聽かせんどの聖書朗讀に耳障りとや思ひけん、その席より少し身を屈め一時噴水の水路を閉ざし、而して後讀み始めぬ。『予は良牧羊者なり』此一語の彼が口より漏れ出づるや彼の双眼は涙に滿ちぬ。讀みゆくまゝにその聲は心中の感動をもて打震ひぬ、その靈魂は擧げてその讀む一語一句と共に迸り出づるかと思へたりき。此何人も熟知せる聖句を彼が朗讀するに一語も教訓的言辭を挿入せず、又此聖句を今始めて聽く所の人も此全衆中にはあらざりしなるべし。然れども此朗讀に一種の新たなる感化力ありき、即ち此聖句の精神骨髓を發揮し得べく、彼が兼て計りし所の感化力ありしなり。予は今日何人が此聖句を朗讀するも往時「トム」、モリソンがビッドル、マーケット、ミッシヨンの日曜學校にて朗讀したりし風丰態度を憶出で、新たなる感動を惹起さるゝと幾んど希なり。蓋し感化は固より教訓に非ず、感化は感化なり、教訓と伴ふとも伴はざるとも之を實行する價值ある所のものなり。

説教者が一般會衆の前に立ちて説教者としての主なる勢力は亦この會衆を感動せしむる力なりとす。然るに説教者にしてその聽衆を感動せしめんとはせで、説教は眞理の發揮を以て足れりとなし。單にその講解のみ事として説教と教授とを混同する誤謬に陥るものなきにあらず。たとひ講解的説教にもせよ、題目的説教にもせよ説教者の目的とすべき主なるものは實に聽衆をして眞理に感動せしむるに在るなり。

世間誰かムーデー氏の説教の力は其辯論の與ふる教訓に存すと思ふ者あらんや。誰か彼の説教の力は其辯論の感動力に存するを疑ふ者あらんや。若しムーデー氏の説教の力は他の成功せる説教者の力と同じく、聖靈の力なりといふ人あらんか、これ固より當然のとなり、然れども疑問は更に生せん、即ち聖靈は如何にしてこの説教者に由りて活動するか、彼を教訓的説教者たらしめてなるか、若くは感動的説教者たらしめてなるか、其聽衆に告知する能力を與ふるによりてなるか、抑も又彼等を感動せしむる能力を與ふるによりてなるか。

抑もかく眞理感動を奨勵鼓吹すればとてこれが説教者なり教師なりの提供せる眞理の清新と勢力との價值と切要とを傷くると更にこれなしとす。凡そ人は多く知る所あればある程説教をも教授をも一層善く爲し得べく、且つその人の選擇し提供する所の眞理に於て發揮し得べき有ゆる清新なる意義も健全なる勢力も聽衆感化力の副方法た

るべきなり。夫れ船舶は積載せる貨物の無きよりも却て之れ有るが故に能く航走するを得るなり。説教者も教師も一層の知識あらば一層の感動を聴衆に與ふるを得べし。ある無學の勸士嘗て老博士サウスに向ひ「主は博士の學究的書齋裡の學問を要し給はず」と嘲りしに機警なる博士は直ちに答へて「然り、卿の無學をも主は亦決して大に用ひ給はず」と曰へり。是れ人口に膾炙せる問答なり。蓋し感動的説教者及教師は又同時に教誡的説教者教師たらざるべからず。然れども説教者は其説教を有効ならしむる方法として専ら感動的なるに頼るべく、而して教師は其教授を正義の方面に感動的たらしめしや否やを精査するを要す。

博士トーマス、アーノルドは説教者にして教師を兼ねたる人なり。其説教にも教授にも教訓的なると共に非常に感動的なりき。博士の生徒たりし者は皆いはく、嘗てラックビー學校にて博士の感化を受けたる童兒は其教訓と實行とにて自己の名譽を尊重するの感念甚だ熾んなるが故に一人も其体面を汚す如き行爲をなさんとの心をだに起す所の者なしと。トム、ブラウン亦博士の事を告げて「身体魁梧にして炯々たる眼光人を射、その音聲は忽ちにして軍隊喇叭の急調短節なるが如く、又忽ちにして坐上吹笛の迂餘不盡なるが如くにして、毎日曜日ラックビーの講壇に立ちて正義、慈愛、光榮の主基督の證を爲し、おのれは其精神に充たされ、聴衆にはその感動を與へつゝ、

あり」といひたりき。

ブラウン又曰く「畢竟するに博士が約三百人の兒童をその自ら好んで進み、進まざるにも關せず毎日曜日の午後二十分間づゝ我が前に坐せしめ、靜聽せしむるを得るは抑も何に由りて然るか。……吾人は吾人の聽ける所を悉く了解し得ず、又吾人自己の心情は如何なるものなるかを、生徒相互の關係の如何なるものなるかを知らず、又自己の操守、交際の道に必要な信仰、希望、愛なるものにつきても深く知る所なし。然れども吾人はすべて靜肅恭敬なる態度を以て此一人の、その心情を盡し精神を盡して、凡そ吾人兒童の小世界に於ける醜陋なると、男らしからざると、不正不義なること、抗爭し戦闘しつゝあるかの如く見え且つ感ぜらるゝ、狀貌魁偉音吐爽朗なる教師の言論を謹聽するなり。その言論は高き講壇よりして下なる所の或は罪惡と闘ひつゝ、あり或は罪惡を犯しつゝある吾人兒童に助言警告を與ふる所の冷かに明晰なる聲にはあらずして、却て吾人の側に立ちて吾人の爲めに罪惡と闘ひ、且つ彼を助け吾人自己を助け、吾人相互を助けんために吾人を呼び醒しつゝある温か、活ける聲なりとす。かくて次第に少年の心に生活の眞意を悟得せしめ、此世は決して痴漢懶惰家の樂園には非ずして、往古よりの戦場にて幼稚の男女と雖も各その死ぬるか生きんか大事のいくさに自ら禦ぎつ戦ひつ勝敗を決せざるべからざるとを堅く認識せしむるなり」

アーノルト博士が其生徒を動して勇氣ある基督教的丈夫たらしむる此感化力は決して偶然意に經せざる所の者に非ずして、全く博士が預め其企圖を立て其全力を之に集注したりし結果なりとす。之と同じく普通諸學校及日曜學校の良教師は各自其所持の生徒を感化せしめんとて絶えず其活動の主義又は行爲の特色を有し、而して其成功は職として其企圖せる感化の有効なりしに由れるなり。

父母の賢明なる者は其兒子を善良ならしむるには口舌を以て百方教誡するよりも父母自身が躬行實踐する正義によりて兒子を感化せしむるの力の大ききことを知れり。是れ決して口舌の教訓を懈怠するにあらず、口舌を以てすると同時に父母が其兒子に正義なれ善良なれかしと自己の實踐躬行によりて感化せしめんと務むるをいふなり。齢老いたる一母あり其子息等の喫煙の習慣に陥りしとに關していへらく『妾は常に兒童に煙草を喫するなからんとを望み、且つ屢ばかく告げたりき。然れども妾は妾の猶壯齡の時に於て、喫煙の害毒を稔知すると今日の如くありたらばと思ふなり。若し果して妾が若き母の時代に於てかくも深く其害悪を知り居りしならんには妾が兒等は決して煙草を喫するに至らざりしならんと思へり、何となれば妾は兒等を感化して喫煙を嫌忌するに至らしめざる程ならば寧ろ爲めに死するを希ひをればなり』と。教授カル

ツァン、イー、ストウその老年に及びて、聖書を鄭重に取扱ふとにつきてその小兒たりし時その父より受けたる感化を語れり。いはく『我父は聖書の教訓事實を語るに常に恭敬の言辭を以てし、此書を繙閱するにも等しく恭敬を盡せり。一日予は聖書を檢索するの必要ありて父にその聖書を假し與へられんとを乞ひしに、父は恰も神聖なる物に觸るゝかの如く其聖書を取り、之を予が手に授け、さておごそかにいへるやう、我兒よ此聖書はいとゞ貴きものなれば之を取扱ふに決して疎忽なるべからずと。されば予は此小兒たりし時より聖書の持はこび繙閱等を疎漏にせしとなし』と。教授の父の如きはその子に眞理を教へたるのみならず、猶且その感化を授けんとして能く成功したる者なり。されば又兩親なり教師なり説教者なり他に惡しき物まれ善き物まれ深く之を教へ感動せしめんとするには先づ自己の心裡にその善惡に關する深く篤き感念を有しをらざるべからざるなり。蓋し教授なるものは正しき感化の異名といはんよりも其附屬物として視るべきものなり。眞理を教へだにせば足れりとせんか、則ち如何に巧妙に教授すればとて數ふるに足らざるなり。要するに教師たる者は感化の一方法として眞理を使用し教授すべきにて、この生徒を感化すてふとを我が義務なりと覺れる所の教師こそ教授に親切熱心なる人なれ。

以上述べ來りたる所の感化力は教師の當に務むべき所の者として有意的企圖的のも

のなるが予は之より更にその無意識的偶然の感化力につきて論述せんと欲す。此感化力たるや教師其人の品性より流出し、初めより其心なくして自然に其行爲、態度、言語等に其喜怒哀樂の顔色面貌にその高貴なる品性の流露して深く人心に入る所の者なり。固より偶然のもの無意識的のものなりと雖も教師として其事業の上に決して輕々看過すべき者にあらざるなり。

無意識的感化力の必要なること實際的價值とを論じたるもの少からずと雖も殊に之を極論したるは實にブツシナル博士となす。此「無意識的感化力」なる語は博士が四十年前『是に於て先に墓に來れる他の弟子も入りこれを信ぜり』(約廿章八節)を題として此感化力を論じたる有名なる説教中に用ゐられこれより一の成語となりたるなり。此説教にて博士は最も明白にペテロは主耶穌の墓所にて無意識的にヨハチを感化し、ヨハチは又無意識的にペテロに感化せられしとを論せり、いはく「ペテロはヨハチに先立ち、ヨハチはペテロの後に尾しぬ、此時二人とも如何なる感化力の行はれ又受けつゝあるかを知らざりき。斯の如く吾人の生活及言行は社交的感染の法則によりて吾人の生活する範圍内及時間中に擴大せられ張開せられつゝあるものなり」と。而して博士は一面に於て凡そ人は常にその接する所の人々に語るに二様の言語即ち口舌の發する言語と口舌以外に表現する他の言語——「眼、顔、風采、進退坐作等の表様」

とを以てするをいひ、他の一面に於て「吾人は二個の門戸を以て他の言語を感觸印記するを知れり、即ち一は耳にして他の言語を聽きての上の理解なり、一は交感同情の力にして他の面貌、語調、態度、其他一般の行爲により表現せられたる感情の火に感應する所の情操なり」而して吾人は常に此交感同情の力によりて得たる感觸は吾人に感化を與ふると單に理解によりて得たる所のものよりも大に有効なるを知れり。「明鏡を以て寫すが如く我が隣人の感情を見るによりて吾人は感性及友情の同化力を以て隣人と同一模形に鑄成せらるゝなり」といへり。

説教者の宣揚する眞理教訓を人に感動せしむるに説教者其人の品性の力與りて大に力あるとは一般に承認せらるゝ所にして、實に説教を効果あらしむる所以はその説教の背後にかくるゝ所の人物に在りとす。デョージ、ハアバートは基督の品性と生活との代表者たり。説教者は恰も神の子の姿像を描寫せる教會の繪窓硝子の如く宣教者の顔色風采に基督の精神姿態の描かれ現はれざるべからざるなり。

抑も眞理を宣揚する所の人の個人的品性の感化の此の如く盛んなるを視て以て基督化身の理を推知するを得べけん。神の道が個人的生活に表現せらるゝ時には大に力ある者なるが故に神は自らおのれを下して「人にもちある索すなほち惡の索をもて人

をひき」たまへり。使徒ヨハ子曰く「それ道肉体となりて我儕のうちに寄れり我儕をの榮を見るに實に父の生みたまへる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充てり」と。この道の肉体とならざりしなき神の眞理は既に屢ば宣揚せられたり、而して今や實現せられたり。即ち教訓に於ては既に缺くる所なかりしも感化力は未だ之れ無かりしなり。何人にも述べ示めす事物の感化以外に其人の人格に存する感化力の實例は枚擧するに遑あらざるなり。嘗て北米合衆國の西部の人煙稀少なる新開惡地に日曜學校を設けんとてある宣教師は生徒を集めんために附近の村落を徘徊せり。やがて一人の曾て見しりたるとなき童兒に出逢ひたりければ笑顔して逆ひ近づき、傍なる樹の伐り倒しある其上に諸共に腰打かけ、小さき繪カードを懷より取り出して之をその童兒に與へ、さておのれが此たび日曜學校を設けんと思立ちたるを、茲に今夕その設立につきての集會を爲すべきとなご語りて「我儕はいと良き日曜學校を組織せんと考へ居れば此村の兒童誰彼は皆わが學校に來らんとを願ふなり。御身も亦今夕來りて我らと共にその席に連り給はんや、如何に」と誘ひしにこの兒童首を振りて「否」と答へり。宣教師は再び懷を探りて一葉の繪紙を取出し、いとやさしげにわが腕をまはして童兒を軽く擁し、この繪紙をさし示してその繪解きを爲し、かくの如き繪紙はわが新設の日曜學校の生徒には一人も漏れなく與へらるべく、又おもしろき數々の書籍は望む人々には貸

與すべきをいひ聞かせ、「如何にや、御身も來りて此等の繪紙を得、又書籍を借り給はずや。いと面白かるべき事なるに」と説き試みしに童兒は再びかぶり振り復た説き試むべき餘地無きまでに「否」といひぬ。かの宣教師は失望の体なりしが、此人元來唱歌の巧手なりしかば音樂唱歌をもて此童兒を感誘せんとおもひ、ふし面白き讚美歌を幾節か謳ひ唱へて、此たびこそはと心竊に遊説の効あらんとを信じて、さて童兒に向ひ「われらは日曜學校にて此様なる面白き歌を幾番となく謳ひ習ふなり。御身も來りて聽きたまはずや、又おんみ自らも此歌うたふとを學び玉はずや」といふにかの童兒頑として三たび「否」といひぬ。流石の宣教師も我を折り失望しぬ。今は復た説くも無益なりと思ひ、やをら身を起し、立ち分れんと足ふみ出し、時何思ひけんかの童兒「暫、先生！」と呼び止めて「先生は今よりその日曜學校とやらんへ行き給へるか」と問ひぬ。宣教師「然り予は今夕かしこに在るべし」と答ふれば童兒は「しからは僕も亦参り申すべし」と答へて、其夕果して日曜學校に來り生徒の一人となりしといへり。

嗚呼是れ無意識なる個人的感化の力に非ずや。日曜學校の設立せらるゝと設立せられざるとはかの童兒に何等の痛痒を感せしめざる也。如何に懇ろなる言葉を以てするも、熱心なる誘引を爲すも、カード、繪紙を示すも、面白き書籍貸與の約束を以てするも、將又音樂唱歌を以てするも凡て此等直接有心の盡力遊説は無効なりき。童兒は此

等のものには興趣を有せず、又注意も爲さざるなり。然れども彼亦一片の心情を有せり、この情緒は我を誘ふて樞木の上に腰打かけさせ、やさしく我を擁き、カード、繪紙を示し、我が爲めに歌うたひて百方われを誘はむと務めしその人に觸れて感動せり。彼は此の如き人と側近くあらんと欲せり。若し此人にして學校に在るべくんば彼も亦學校に在らんとす。若し謂ゆる日曜學校なる者は飲酒店にして、此人今この店に往かんとしてあるとせば彼も亦この人に跟して飲酒店に往きしも知るべからざるなり。此の如く無意識の感化力は實に強大なる者にして、新開惡地に於けるも舊開惡地に於けるも其老幼男女を驅つて我しらす以て日曜學校に往かしむべく、以て飲酒店に往かしむるを得べし。

此無意識的感化の必要にして且つ此強き力あるとは青年に宗教的教授を爲すに於て明白なりとす。ハンチングトン監督はその猶ハーバード大學教授たりし時に「無意識的教訓」に關して卓拔なる論文を草し、大に此無意識的感化を主張せり。こは實にブツシナル博士の唱道せしこの感化論を敷衍して教師の事業に適用したる者なりとす。曰く「兒童が其父兄又は教師の面貌を凝視する主一無我にして熱心眞面目なるには頗る注意すべき者あり。兒童は其直覺性を以て父兄又は教師の面貌上に兒童が知らんと欲する所の者の正確にして差誤なき表兆を發見し得べきことを知り居れり。恰も造物主

は筋肉、纖維、色、相、眼、口等の明鏡を懸けて其人の心中秘密の計謀を照灼し、各人相互間の信用又は猜疑の基礎として交際の程度を秤定せしむるが如きなり。實に人の面貌は喜怒哀樂愛惡慾凡て人類情緒の公開せる集會所なりと謂ふべし。教師にして自己の面貌の如何に頓着せざる者はその位地の權力を了知せざる所の者なり。面貌には永遠不斷の繪畫あり、教師が無意識にてその意志情緒を表彰する時生徒も亦無意識にて之を研究して以て教師の意志情緒を探りつゝあるなり」と。又ハンチングトンが殊に意を注いで説明せし如く教師は實に其聲音のうちに、舉動のうちに、凡ての顔色態度のうちにその心中の秘密を公々然として表彰せるなり。而して「道を四肢五体の外貌に假りてその品性より流れ出る所の印象なるものあり、是れ吾人は如何なる語を以てするも之を包括せしむると能はず。又如何なる分解を爲すも之に把持すると能はざる所の者にして」全く言語形容以外の者なりとす。

日曜學校の教師が多量の感化を生徒に與ふるは一週一日教場に於て教ふる言葉に非ずして一週七日間の教場以外の言行に在り。教師はその品性を以て生徒を感化する者にしてその品性は實にその教授する所の眞理の力を左右する所の者なり。教師にして此理を知りたらんには必ずや教師の位置勢力を高め、その責任の重大なる感念を深くし得べけん。されど最も良き教授を爲さんと欲せば先づ自己の達し得らるべき限界に

於て最も良き人物たらざるべからず。彼は其神の眞の人たる程度の如何に比例して、神の眞理を教ふるに當りてそれ相當の權能を有するを得べし。故に感化力を有し又使用せんとするに當りて教師としての第一にして最高なる準備は自己が基督の信仰上、模倣上の準備なりとす。ハンチングトン曰く『眞の感化力の尺度は善良なる人物の尺度なり』。ブツシテル曰く『基督教徒は世の光なりと稱せらるれども一時の閃光に非ず。他を動かさんと欲せばおのれ先づ聖靈によりて歩み、以て善てふもの、影像たらざるべからず、神に相似、神の性質を以ておのれを充たし人の之を望むに恰も赫灼たる光明を身邊に放てるが如き觀あらしめざるべからざるなり。抑も吾人が未だ光輝ある物体たらざるに、強て光明を放たしめんと務むるは愚の極ならずや。夫れ太陽に赫々たる光明あり、故に九天の星辰皆その餘惠によりて照り耀くなり』と。

されば教師にして赫々たる光明あらば生徒は皆その光明に浴して之を喜ばん。ハンチングトン又曰く『青年がその師と頼む所の人を信じ仰ぐに信實なる熱心のうちにはおのづから切實なる希望の感觸すべきものありて存す。凡そ男子にも婦人にも特に兒童には何物にまれ優等なる者の有する凡て理想的なる卓越超邁の性質を擬人して崇拜し、又は英雄豪傑には熱心なる隨從を爲さんとおのづからなる直覺性と熱情とこれ有るものなり。故に教師にして若し之を好まば崇拜せられ敬愛せらるゝ所の正統なる

王位に即きて此等の信隨者に君臨するは其特權なりとす。若し生徒が教師を愛し敬ふならば教師は生徒が理想たる英雄豪傑の地位に立てる者にして、彼等生徒の小説的幻想は教師に冠するに實質以上の美性盛徳を以てし、その教授し訓誡せる事物の何たるかはいつか既に忘却せらるゝともその人物は決して生徒の腦裏より脱し去るとあらざるべし』と。然るに若し教師にして此の品性の一點に於て生徒を誤らばその損失たるや生徒にも教師にも蓋し言ふに勝へざるものあるべく、且つ理想的人物として實質以上に見られ尊ばれたる者の失敗に至りては殊に甚しきものあるべし。

夫れ使徒パウロが『若し食物わが兄弟を礙かせば我は兄弟を礙かせざるためにいつまでも肉を食はじ』といひし如く、たとひ我が良心に慚る所なき行爲にもせよ、若しよわき者の道に進む障礙となるものならば已に克ちて之を障礙するは是れ日曜學校教師として最高の徳なりとす。蓋し日曜學校教師にして公々然惡事を行ひて生徒を礙かすを顧みざる所の者はこれ無かるべし、然れどもおのれは少しも心に疚しき所なく、又基督教の道徳に背反する所のとに非ずして而して生徒等の心には惡事と思はれ、礙の石となるものを行ふて自ら慚ぢず顧みざる所の教師は世に多く之れあり。嘗て一人の童兒の平生其日曜學校の受持教師を敬愛したりしが、圖らずも其教師は甚だ演劇を好みて屢ば劇場に入るとを傳へ聞きて頓に其人を疎んじ、日曜學校にさへ登るを屑し

とせざるに至れり。其母大に惑ひて予の居を敲き問ふて曰く「此教師の言へる所の一言一語も今は、や豚兒に感化を與へずなりぬ。妾は之を如何にすべき。豚兒を退校せしむべきや。此上かの組に留め置きその教訓を受けしむるも何の効なき如くなれば」と。吁此教師の此場合に於ける疑問は此教師は従前通り劇場行を繼續するに道德上權利を有するや否やに在らずして、生徒に我が感化を損はしむる所の我が嗜好は之を繼續すると果して當を得るや否やに在りとす。

此の如き類例は世に多くこれありとす。教師の飲酒、喫煙、骨牌戲、舞踏等の嗜好は此の劇場行と同じく日曜學校に於ける其感化力を弱からしめ、壞たしむると枚擧するに遑あらず。若し此等飲酒喫煙其他の行爲が教師より見て更に無害にして之を嗜好するも宥恕すべきものなるが故に、此等のものを有毒有害なりと信せる所の生徒等には如何なる結果を及ぼすとも敢て其嗜好を廢せずして可なりといはゞ吾人復た何をかいはむ。然れどもパウロが「爾曹慎みて其自由を（此放縱の自由）柔弱者の蹟となす勿れ」吾恐る「キリストの代りて死にたまひし弱き兄弟爾の知識（他人の惡事と思へるものを惡事に非すと信する爾の知識）に因りて淪ほろび」さらんやかくの如く爾曹兄弟に罪を犯し其弱き心を傷めしむるはキリストに罪を犯すなり」との訓誡を如何にすべき。

教師の感化力は其有害なるにせよ、無意識的なるにせよ、生徒の品性又行爲の上

に必ずしも直ちに効力を及ぼすものにはあらざるなり。當に其初めに於けるのみならず、數年、數十年の久しき感化の些の痕跡だに留めざるが如き觀あるものなきにあらず。然れども一たび其柔かき心情に印記せしめたる感化の活力は一時の睡眠の情態に在る者にして、必ずや時に及んで活潑々地の活動を爲さずんばあらざるなり。故に教師たる者は深く之を思ふて自ら勵み奮はざるべからざるなり。

ジョン、ニウトンの母はジョンが年わづかに七歳の時既に没せり。母はジョンを正しき人に生ひたせんとて、殊に其言語品性を慎み、只管その感化を及ぼさんとして務めたりしも、子は却て無信仰にして邪僻なる無賴漢とは成長しぬ。初めは奴隸商人に仕へて汚れたる無信仰の水夫たり、後は鐵鎖に繋がれ笞柱に縛せられて笞たれたる國家の重罪人たり。されば其幼時敬虔なる慈母が播きし種子は其壯年時代に於ける第一期の收穫は實に意外なるものなりき。然れども其幼時母と共に神の前に跪き祈りし時わが頭上に母が按したる慈愛こもれる手の感覺は壯年時代に至りても猶其心の表土の下に潜み埋みて決して腐敗せざりしなり。ジョンはその罪惡の最暗黒の日に在つても屢ば此事の憶ひ出されて愴然たらざるを得ざるとありき、而して神の恵みにより彼をして其本に反り信仰に充てる祈禱を爲さざるを得ざるに至らしめき。其むかしの感化の根より彼が心と情との畑の全區域内に新生命の萌芽は油然として生じたり、而して

彼が母の感化力は後年全世界を掩ひたる彼が隆々たる聲望を以て其再收養を得たりけり。されば此の如く家庭に於けるも學校に於けるも其感化力は如何なる頑鈍なる兒童にも多少の及ぼす所なからずやは。

コチクチカット州のハートフールドなる宗教學校に嘗て一人の頑鈍なる生徒ありき。其受持教師は殊に懇切なる人にして此生徒を教へ導くに有らゆる信實と忍耐とを以てせり。彼は或は此生徒があやしげなる茅屋を訪ひ、或は之を彼が樂しき家に招きて之に飲食せしめ、之に衣服せしめ、或は之が爲めに奉公口の周旋を爲せしと一再に止まらず、而して常に懇切に之と語り、協議し警告して更に倦む所あらず、しかも一として見るべき効果あらざりき。此生徒はかゝる良教師の薰陶と恩顧とを蒙るにも拘らず猶粗暴、野鄙、無信仰にして思慮なく感恩の情もなかりき。果ては其家を出奔して紐育よりリバープール通ひの商船に乗込みぬ。かくて此頑童の宗教學校の生活は終りぬ。而して彼が生徒なりし此年月かの教師より受けたりし感化は終に何の効もなかりしや。三歳は過ぎぬ。一日此生徒よりの書狀印度の内地より此教師の許に來れり、書中に彼はサア、コーリン、キャンベルの引卒せる英軍の一卒となりてセポイ人と戦ひ、九百哩の内地に攻入り、言ふべからざる艱難辛苦を嘗め盡くし、遠く郷國を去り、基督教の温き空氣に離れ、四方山もて圍める蠻地に身は疾病に犯かされ、心は無量の

憂愁に閉さるゝに當つて始めてこゝにハートフールドの學校にて受けし諸の教訓を喚起して罪を悔い神を信じ、教師の薰陶の感謝に辭なきよしを詳記せりと。

何人も其感化の及ぶその速かならんを希望す、是れ人情の常なりと雖も吾人は又第二若くは最後の効果の寧ろ第一の効果よりも優りて大にして且つ善なるものさへあるを見て大に心を強ふするなり。故に感化の人に及ぶは其時直ちに之れ無くば必ず機ありて來るべし。吾人の今日云爲する所は嘗に今日のみならず遠き將來に至るまで他人に効果を有する者なり。支那の古聖いはく「教師は萬世の儀表なり」と。若し日曜學校教師にして其言行品性吾人が唯一の儀表たる教主に私淑造詣するを得て、使徒パウロが「われキリストに倣ふ如く爾曹も亦われに倣ふべし」以て「主すなはち靈によりて榮に榮いやまさりてその同じ像に化るべし」と自ら信じ自ら任じて敢て生徒に向ひて能く言ひ得る人あらば其人の幸福は大なりと謂ふべし。

第二節 生徒を愛する事及び生徒に愛せらるゝ事。

生徒を愛する事、生徒に感化を及ぼす事は相離れざる者なれども決して同一の者には非ざるなり。生徒を愛し而して又生徒より愛せらるゝ所の教師は必ずや其生徒に感化を及ぼすべし、然れども教師は生徒を愛せず又生徒より愛せられずとも能く生

徒に感化を及ぼす所の者少しとせず。或は其日常生活の純潔なる故を以て、或は其品性の高尚なるの故を以て、或は其信念の確乎たるの故を以て、或は其性情の惡篤なるの故を以て或は其言語動作の勸説に力あるの故を以て感化を及ぼすと多し、然れども此人必ずしも教師として生徒を愛したるにもあらず、又生徒より愛せられたるにもあらずる也。然りと雖も生徒を愛するとは之に感化を及ぼすこと同じく日曜學校教師には決して否拒すべからざる所の義務なりとす。生徒を愛するとは生徒の愛を得ること、は基督の名を以て、基督が爲めに死し給ひし所の人々に臨む基督の弟子たる者の負ふべき、免るべからざる義務法鎖なりとす。

吾人は教師の義務として生徒を愛すべきをいへり、即ち其生徒の容貌又人と爲りの愛すべきより我が感情の勃然として動き、之を愛せざるを得ざるが故に之を愛する所の愛とはおのづから異れりとす。義務として生徒を愛するはその吾人とおなじく神によりて造られ、吾人の靈魂と同じく朽ち滅びざる靈魂を有し、神の愛し給ふ所の者、我主耶穌基督の親みいつくしみ給ふ所の者たることを認むるに因る。又此の基督の愛し給ふ兒童を吾人が特に導くべき必要あり、且基督が吾人に之を眷顧するやう希ひ給ふことを認むるに因りてなり。かく認むるとの深ければ深きだけ吾人の兒童に對する感情はおのづから温かならざるを得ずして、基督が爲めに死せ給ひしこの不滅の靈魂の

所有者には何まれ善事を爲し遣らんとの念願油然而して生じ來り、彼等と教場に相對して語る所行ふ所の上に、又平生彼等と個人的交際を爲す上に此の念願の流露するや必せり。

要するに此愛は日曜學校に於ける主なる引力なり。生徒のうち或は日曜學校の壯麗なる器具、廣濶なる部室、其設備と裝飾等によりて誘はれ來りし者もあらん。或は其巧妙なる唱歌や圖書室や繪畫等に引かれ寄りし者もあらん。或は唯同輩との交際を喜び、若くは大祭、野遊の饗筵あらんとを豫測して來れるもあらん。或は殊勝にも此處にて受くる教訓の善良なるを思ひ、聖書研究によりて其心情に益する所あらんとして來り會する者もあるべし。故に生徒の所好千差萬別にして同じからずと雖も、誰か他より愛せらるゝことを好まざる者あらんや、慈愛と同情との聲はしき一堂中に對面晤する愉快を拒む者あらんや。然ば則ち生徒を愛するを以て特色とする日曜學校は必ずや世の兒童に對して常に大なる引力あるべきなり。

予が始めて日曜學校の授業に従事せし時に當りて一の經驗したる所の事にして、數十年後の今日に至るも猶決して忘ると能はざる所の者あり。當時予は基督を愛するの情燃ゆるが如くなりしを以て、如何なる方法にても我力もて此愛を人に現はし示めさんものと思ひたり。適ま予は某所の日曜學校教師たらんとを依囑せられたり。予は直

ちに之を諾し、其日曜學校に往き見れば、こは此あたりなる貧民窟の子女を聚めて教ふる所の學校にして、既に數名の教師と檻樓を纏へる男女の兒童二十名許つごひゐたり。今日の學校とは異りて設備完からざる當時の日曜學校中に在りてもこれは又殊に不完全なる者にして、居心よき清潔の校舎にても無ければ、目に見、耳に聞きて樂しき音樂繪畫様の備へも無く、唯一つ教師が生徒を愛する眞心てふ者なかりせば決して此等の童男童女を引致するとは能はざる所の者なりき。

手は入りて自己の席に就き、好奇の目を放つて四邊を諦視せしに、室隅に唯一人醜陋なる童兒の悄然として坐する者ありき。檻樓甚しき衣を着し、而かも塵垢に塗れて不潔言はん方なく、其顔色は齒痛に病まされてかいたく憔悴せり。予が始めて此童に視線を注ぎし時は彼れその顔、項、頭上をまごへる粗にして且つ汚れ黒みたる細帯様のもの、今や弛みてはづれんごせるを怪しき手つきして結び直さんと試みつゝあるなりき。此の憐れにいちらしき有様を一見して予は直ちに座を離れて彼のもとに往き、一言二言馴れしく言葉をかけ、扱彼の手よりその氣味あしき細帯を取りて、その項より頬へかけ頭上に廻はして予が爲し得る限り手際よく結びやりぬ。予が再び二三の慰言を爲して手を彼が頭上より離せしとき彼は仰いで予の顔を見守りしが其顔容は予が終生決して忘るゝ能はざる所のものなりき。其かほはたとへば幼な心に不思議と思

ふ驚きと有り難きと感ずる喜びと相混同したるかの如きものにして、且つ其從來嘗て經驗したるとなき暖き待遇を受けたると、他人が我が頭に手を置くは叱咤鞭打の外ならずしては一回も之れ無かりしと、恐懼し、戦慄し、嗚咽し、號泣するに馴し身は他人に愛せられ庇はるゝてふとは如何なるものなりや未だ嘗て知らざりしと等をその目元口元に語れるが如くなりし。予は之を見て始めて氷の如く冷え凝りし心の戸も愛てふ春の日影に逢ふては渙然として釋け開くべきとを學び得たり。是れ實に予に教ふるに我れ愛を表現するによりて始めて他の愛を得べく、基督の精神意氣を立證するによりて始めて基督の爲めに働き得べきとを以てせり。此童兒の予に向けし一瞥は予をして終生日曜學校の爲めに盡さんとの決心を爲さしめたり。

此小兒は諸國遍歴の剪鉄磨師の子にして、謂ゆる家庭の如何なる者なりやを知らざる憐むべき者なりき。予が彼を始めて識りしもの數週のうち其兩親相尋で物故せり。彼が此日曜學校に來りしが不思議の助けとなり、その縁を以て或る孤兒院に收容せられ、人と爲りてのちは忠良なる兵士となりて自國の防衛に盡し、その後は基督教の役者となりて絶えず救靈の聖なる事業に執掌せりき。彼が始めて基督教的慈愛の光に溫暖られしは其時限りのことに非ずして、彼は畢生の間おのれが受けし愛の力と、おのれの有し且つおのれに由りて働く所の愛の力を例證するに務めなき。されば彼は實に日

曜學校の事業よりして益を得んと欲し又益を與へんと欲する所の人々には恰當なる實例なりと謂つべし。

抑も愛の力を感ずる所の人、愛の爲めに動かさるゝ人、將たおのれ人に愛せらるゝ、と知りては喜悅し感恩の情を催す所人は決して獨り蹙蹙孤獨の憫むべき無告の窮民のみには非なるなり。愛は兒童の生命なり、之れ無んば兒童は圓滿なる發育を爲し得ざるなり。家庭に於て其父母兄弟より愛せられざる所の兒童は日曜學校にて教師の愛に感じ、その感化力に動かさるゝに於て決して人後に落つる者に非ず。愛は動かし得ざるの人なし。老練なる一説教者嘗て某神學校の卒業生の爲めに演説して曰く「卿等説教する時は須らく人の心情を射よ。頭腦を有せざる所人は有りて雖も心情を有せざる所人は此世に一人もあらざるなり。若し卿等にして聽衆を頭腦を的として之を射んと欲せば必ず之を失はん。之に反して心情を的標として之に對せば必ず効あらむ。卿等須らく他の心情を射よ」と。是れ實に説教者に於けると同じく日曜學校の教師に於けるも實に是き教訓なり。日曜學校の教師にして裏に愛を懷き、外に愛を施すことなれば其事業は斷じて効なかるべし。たとひ其人諸の人の言および天使の言を語るとも、又預言するの能あり、すべての奧義と諸の學術に達し、そのすべての所有を施し、又山を移すほごなる諸の信仰ありと雖も若し愛し寛忍をなし、人の益を圖り、おほよそ

事包容み、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事忍ぶ所の愛なくば其人は日曜學校教師として決して適任の器に非るなり。

蓋し日曜學校教師が其生徒に於ける個人的權力の輕重大小は教師が生徒を愛し、生徒が又其教師を愛する輕重大小によりて知るとを得べし。何となれば愛は愛を産む者にして、真心もて人を愛する者は又必ず真心もて人に愛せらるゝ者なればなり。予嘗て一日曜學校の其感化力の盛大なると其傍近諸日曜學校の企及すべからざる者あるを見て、私にその成功の因て來る所に迷ひしとありき。其校長は決して此種の事業に卓拔なる知識素養ある人に非ず、且つ其個人的引力に於ても其殊に必要なものを欲き、又教育家としても事務の材幹と熟練とを有せざる人なり、然るに此人の日曜學校に聚る者老となく幼となく男となく女となく一年其數を増して盛大なると他に比を見ず。實に稀有の成功せる學校にして、而して其大成功の遂げられし或る顯著なる理由を見るを得ず。予は因て試に此學校の屬せる教會の牧師に、此校長は如何なる權力ありて能く此の如き成功を得しやと問ひしに、牧師答へて曰く「予は他を知らず、唯一事、此市内に於て此人の爲めに死せんとを願ふ者五十人あるとを知るのみ。是れ此人の徳、以て多くの生徒を引き得るならん」と。嗚呼是れ實に此校長が權力の源泉なり。此校長はダニエルの如く『大に愛せらるゝ者』たり。彼れ敬慕せられ得る所の人

なるが故に敬慕せられたり。彼れ諸の人を愛するが故に又諸の人の愛を一身に引き集め得しなり、是れその管理せる日曜學校が隆盛他を壓する所以の理由たりき。

夫れ教師は能く其生徒を愛するを得べく、而して生徒を愛するによりて能く生徒より愛慕せらるゝを得べきが故に神がおのれに托し給ひし所の生徒を愛するは教師の義務にして、又此等の生徒より愛慕せらるべきも其義務なりと謂ふべし。世に生徒より愛慕せらるゝ教師尠からず、而して教師たる者は何人も皆かく愛慕せられざるべからざるなり。前章に述べしとある彼のハートフェールドの學校の一生徒語りて曰く「予が教師は未曾有の良師なり」と。又此學校の一教師が病死せし時その受持ちたりし組の一生突如として叫んで曰く「予は君に告げん、先生は實によくわれら兒童を愛し給へりき」と。又同學校の一女生病革りし時其母に告げて「願くは我が兒が死するとも決して某先生に告げ給ふ勿れ、恐くは先生爲めに斷腸し給はむ」といへりしとぞ。此等の教師は如何に平生深く生徒を愛せしやをこれによりて知るを得べし。

數年前予はマサチューセツト州ローウェル府なる一日曜學校々長と約ありて、其人と共に一安息日を過さんため其土曜日の夕つかた之を訪へり。予は未だこの人の住宅を知らざりしかば其處此處たづねありきて、只ある家の定めて此處なるべしとおもひし門前に至りし時一小女の彼方より來るに逢ひしかば之を呼び止めて「おん身は此家

はチェース長老の住み給ふところなりや知り給ふか」と問ひしに、かの小女應へて「兒はチェース長老なりや否やを知らず、されど此家の主人はチェース君とて白髮の老人にて小さき兒童をよく愛し給ふ所の人なり」といへり。嗚呼衆人よりして小さき兒童を愛し給ふ所の人と稱せられ得る所の人こそ平素小さき兒童より愛慕せられざる所のものなれ。

予は又フエラデルフェア府の一日曜學校を觀たり、此學校には唱歌なく音樂なく、感動し得べき程の祈禱もなく、又飾りたる牆壁もなく、室内の裝飾もなし、而して唯有る所のものは教師生徒間の愛にして、此愛は此學校の生命なりき。此學校はフレンド教會の學校にして、其校長も各教師も皆其生徒は視て以て愛慕すべき朋友なりとせり。嘗て此學校の一生徒の母病死せしかば其年少なる生徒は悲慟して斷腸の思に堪へざりしが、此學校の愛と同情とをおもひ起して涙のひまより其父に語りて曰く「兒は今慈愛深き母君を喪ひまゐらせしも猶レリー君の日曜學校あれば左のみは悲しまざるべし」と。予は又コンチカット州の一日曜學校を知れり、こゝには唱歌といひ書籍繪畫といひ、何一つ心を引かざるものもなければ教師生徒相互の愛慕の情は又實に主なる引誘力なりき。その全生徒より愛慕せられし校長が死去せし時には全校擧つて悲慟し、恰も一身に一大損害を蒙りしが如き有様なりき。その三四週間後生徒の一人た

る獨逸人の少女病んで復た起つ能はざるに及び、その兩親より回復の見込なきよしを言ひきけられし時、少女はかの物故せし日曜學校長を憶出して、顔色忽ちさえかゝりきて、兩親其他に向ひ「さらば兒は天國にてブレストン先生に拜謁する我學校生徒の最初のものたるべし」と喜び告げたりといふ。嗚呼その平生愛慕する校長の在ればこそ思へばこの少女は父母兄妹に別れ離れて獨り天國に旅立つに心に勇みあるなり。嗚呼愛は強くして死の如く……大水も消すと能はず洪水も溺らすこと能はず、眞なるかな。

夫れ愛の方かくの如く強大なりとせば是れ實に日曜學校教師に取りて大なる獎勵たらすんばあらず。抑も日曜學校の教師にも各自能不能ありて萬般の技倆を併有する能はざるべし、然るも生徒を愛し、又生徒に愛せらるゝ一事に至りては何人も能く之を爲し得べし。或は學課に關して完全なる知識を有し、各生徒の性行、家庭の情態を知り、適當なる教授法を案出し得ざる所の人もあらん。或は又わが教授する所に生徒の熱心なる注意を向けしめ、わが教授せんと欲する事項を明亮になし、教授の際生徒をして同心協力せしむると能はざる所の人もあらん。或は問答、説明、試験等に熟練機警を缺く所の人もあるべし。凡て此等の缺點は其教師の常に不敏を歎する所ならんも、若し其教師にして基督を愛し、基督の爲めに諸の人々の靈魂を愛する一點の眞

情だに之れあらば凡て此等の缺點を掩ふて餘りあらん。日曜學校教授の目的は生徒をして基督を信じ基督を愛せしむるに在り、而して此目的を達せしむるの方法前述の如く數多ありと雖も、其中最も大なる者は愛なり。茲に一話あり、英國の某日曜學校に於ける一女教師あり、此人その受持生徒を基督に導くと甚だ熟練にして、凡そ此女教師の受持級に入りし兒童にして基督に歸せざるもの殆んど一人も之れ無かりき。校長深く駭歎し一日女教師に問ふに如何なる奇術のありて能く此くの能く成功せるやを以てせしに、渠答へて曰く「更に奇術としてはいふべきものなし。妾は唯平生我が生徒を見るごとに『こゝに神の子が、爲めに血を流し給ひし所の可憐の生徒あり』との思ひの起らざるとなし。是に由て妾の心は耶蘇が愛し給ふ此生徒が亦耶蘇を愛するに至るを見る迄は決して安んじ得ると能はざるなり。故に妾の若し成功と謂ふべきものあらば唯此一思想ある結果のみ」と。夫れ屍の在る所には鴛集り、愛のある所には必ず結果あり。

實に基督の如き愛心を有せる教師の此愛を實踐し躬行するを見且つ感じて、始めて基督の愛の如何なる者なるかを會得認識する所の生徒は世に珍らしからずとす。エール大學にては其學生が卒業後に或る一定の期を定めて同窓會を催し學校生活の紀念を爲すを例とす。或時卒業後三十年を経て此會を催したる者あり。會する者すべて廿五

人、やがて晚餐の席に就きし時、剝啄の音きこえて一老人入り來れり、其頭には既に霜を戴き、軀軀はやゝ前に屈み、顔には皺深く刻めり、唯兩眼は炯々として壯者の如くなれば此人は年齢の爲め老いたるに非ずして、艱難辛苦によりて其外貌を憔悴せしめしならん。此人座中を左視右顧していと親しげに人々の姓名を呼びかけ、皆おのが同窓なりといへり。然るに一座二十五人一人として此人が狀貌の變化の甚しかりしとめにその何人たりしやを識る者なかりき。此人は其健康保養の爲めにこの三十年間郷國と故郷とに別れて諸國を遍歴し、しかも此永き年間に一人の同窓にも出逢ひしとばかりしなり。『かれ己の國に來りしに其民これを接けざりき』といひけん如く、ふるき親しき友のおのれを見識らざりければ、悲みに堪へずやありけん、兩眼に溢るゝばかりの涙を湛へて、凝然として立ちたりしが、やがておのが姓名は友の問ふも名乗らず默然たるまゝに其席を出で、隣室に待たせ置きしことし十八歳なる眉目秀麗の其息男を伴ひ、再び席に入り來りたり。二十五人一目此少年を見るや否や一同に聲を揚げて其姓名を呼びぬ、こは此子の容貌父が少時の生寫しなりければ人々忽ちその記憶を呼び起せしなりき。夫れ基督の愛を聖書にかく記載しありたりとして喋々に舌を以て説き試むるも生徒は容易に之を承認して基督を愛するに至らざるも、一旦わが敬愛する教師の品性言行に基督の慈愛の宛がら活き映りて躍々たるを見る時は必ず引て基督

を愛し之に歸するに至るや恰も二十五人の同窓者が其舊知の友を忘れたりしも其子息の狀貌によりて一齊にふるき記憶を呼び廻へせしが如きなり。

基督嘗て基督を信する人の心情に宿れる聖靈の力をもて基督を代表する所の人々に告げて曰く『その日に爾曹われ吾父に在りなんぢら我に在りわれ爾曹に在ることを知るべし』と。實に其日に至らば教師たる吾人を愛し吾人に愛せらるゝ所の人々は基督が吾人教師に在ることを知るべく、而して吾人教師は吾人が愛を以て證明し活現せしめし所の基督の愛に彼等生徒を導き之に信歸せしむる力を有すべし。此力や實に基督を信する所の各日曜學校教師の義務として又特權として有する所の者たり。

第三節 生徒缺席の時これが取扱の事

週又週絶えず日曜學校に出席し、自己の定められし席に坐し居る所の生徒は、常に教師の記憶に存し置かるゝとはいふ迄もなけれども、出席缺席一定せざる生徒に至りては、たとひ教師より忘却せらるゝ迄には至らずとも、其注意を疎かにせらるゝは勢の免るべからざる所にして、『目より離るゝは心より離るゝなり』(去る者は日に疎し)てふ諺は日曜學校の生徒にも亦然るなり。

凡そ日曜學校は其都鄙を問はず、其生徒が始めて缺席せし時、教師が之を訪ひ尋ね

て再び出席を勸奨せざりしと、教師が長き休暇にて日曜學校に出席せざる時書狀を以て其受持生徒と信音を通せざりしとによりて、失ふ所の生徒の數は其全數の過半を占むとは事實なるべし。又此缺席したる生徒を訪ひ尋ね、若くは缺席せる教師が其受持生徒と音信を通ずる如きは、實に學校教場に在りて爲す凡ての良き待遇よりも優りて効果ある者なり。

蓋し生徒が事故ありて日曜學校に缺席せし時、教師が冷淡にして其缺席の理由も問はず打棄て置かば、生徒は自然に自己と教師との間柄の甚だ厚からざるを感ずるに至るべし。之と同じく教師自らも缺席せる生徒に對し、又その缺席せし時特に自ら訪ひ尋るか、若くは書狀をもつて之を問ふとなごせざる生徒には、自然情愛の濃かなるゝ能はざるに至るべし。若し教師にして試に五年間自己受持の組に入り來りし生徒の數に關する綿密なる帳簿を製し置き、而して五年の終りに之を調査したらんには、必ずや受業半途にして退校したる生徒の多數なるに驚くならん。是れ此等兒童の來らざるやうなりしは一時のみに非ずして、此週一人缺け彼週又一人缺くるも教師が之を再び復校するやう務めざりしにより五年の間には著るき多數の退校者を出すに至れるなり。之に反し此の如き帳簿を備へ置ける教師が缺席せる生徒を自ら訪ひ若くは書狀を以て問安すると等を怠らざる時はこれが爲めにその生徒が日曜學校に新たなる興味を

感じ、又教師に對して一種温かなる愛慕の情を惹起して五年の終りには此の如くして繋ぎ止めたる生徒の如何に多きやに驚くなるべし。

抑も生徒が日曜學校に缺席するには必ず理由なるものは存せずとも、必ずや或種の原因なくんばならず。是れ多くは外部よりの誘惑なり。是の時に際し教師は早く此生徒を自ら訪問するか、或は懇切なる書簡を送りて缺席の故を問ひ、次の聖日には必ず出席すべきやう勸奨するに於ては、生徒は元來學校と教師とに多くの興味と愛慕とを有せずして終に他の誘惑に陥りし者なれば、今かゝる思ひ設けぬ訪問又は書簡に逢ひてはおのれは斯迄學校又教師より思はれ居る者なるかと感激せざるを得ずして、次週よりは喜び勇んで出席するに至るや必せり。又其缺席は自己の疾病か或は父兄の疾病又家内の事情に因るとあるべし、此時教師の來り訪ひて其事情状態を聴き同情の慰安を與ふるに逢ひては生徒は必ず感激して一層教師を信じ愛敬するに至るべきなり。たとひ生徒の缺席は如何なる原因にもあれ、缺席なるものは生徒が生徒としての履歴に於て一危険たらずんばならず、從て教師が自己の爲めにもその生徒の爲めにも決して等閑に附し去るべき所の者に非るなり。

むかし使徒ヨハナがエペソに在りし時青年の一弟子ありき。ヨハナは殊に之を愛し教へて、教會の一員として耻かしからぬまでに及べり。然るにヨハナは教用を以てし

ばし此地を去りて他に往きし間に此弟子は他の誘惑に逢ひて教會を離れ終に程近き山に住める群盜の頭領とはなりぬ。後ちヨハ子再びエペソに還り來りて此事を聞くや如何にもして此青年を再び正道に立ち歸らせばやと、何人の諫止するも聽かばこそ、急ぎかの山に分け入り、自ら好んで捕虜となり、賊棄さして連れ行かれぬ。賊の頭領たる彼の青年は一目この老教師を見るや往日の慈悲教訓一時に憶ひ出されて、復たヨハ子を仰ぎ見ると能はず、其面を避けて走り遁げんとせしをヨハ子は追ひすがりて且つ説き且つ勸めて、再び我家に連れ來り篤く教訓して善良なる信徒たらしめしといふ。

此一話實に日曜學校教師が缺席生徒を待つゝの龜鑑となすべきなり。予が知れる某日曜學校にては教師は出缺定りなき生徒の偶然出席せし時始めて之に注意して獎勵するよりも、其缺席するや否や彼等を搜索訪問して出席を繼續せしむるやう務めたり。此學校にては初めより兒童は日曜學校を深く喜ばざる所の者たるを又彼等が偶然一たび學校に來りしが故に其後再び來り得べきものは望み得ざることを知りて日曜日の午後には教師等は各手別けて學校附近を遊弋して其生徒等の或は其遊場所に、或は其住家の門前に、或は小河の流れに沿ひて彼等に面會し、溫言を以て復た學校に來るやう誘引勸導するなり。かく彼等生徒が唯日曜學校の面白からで缺席し退校したる心組にてありし所に意はず教師の訪ひ來りて優しくも出席を勸奨せらる

に逢へば生徒等は學校に對し又その教師に對し一種の溫情油然として生じ、他の方法手段を以てするよりも勝りて學校に出席を繼續するに至るなり。

又他の予が知れる日曜學校の一教師は毎年クリスマス朝其受持組の生徒をして來訪せしめ、一人毎に些少なる贈物を與ふるを常とせしが、之が爲めにその組に出席せざるやうなりし生徒を二人引戻すとを得たり。こは其教師が其缺席生徒に特に使者を送り間近く來るべきクリスマスには他の兒童等と連れ立ちて我家に來訪すべき由言ひ遣りしにかの生徒はおのれ怠惰にて學校に出席を堅く拒み居るにも拘はらず教師は猶もおのれを記憶して樂しき日の集會に招待し呉るゝと考へ來りては其心に感激する所なからざるを得ず。故に兩度のクリスマスに此種の二人の生徒は同じ様に其招待に應じて來りしのみならず、それより引續き毎聖日學校に出席するに至れり、これ實に生徒に在つては人情の自然なるべきなり。

然れども此の如き懶惰、疾病等の原由にて缺席するにはあらで、教師若くは生徒が數週間の休暇の爲めに日曜學校に於て相見の時を失ふとあり。是れ亦大に注意すべき所の事なりとす。例へば茲に日曜學校に出席を怠らず、又其學課の研究に熱心なる所の生徒が夏期休業其他にて遠く家郷を去つて外に出づるとせん、此によりて生ずる缺席は學校に於ける教師と生徒との結合を裂き若くは弱むる恐れなきか、或は教師が

此機會を利用して生徒をして教師に一層の所に堅き結合を爲さしめ強き感化を與へ得ざるか、此二者は唯教師の用意如何にあるのみ。而して其生徒の缺席のみに於けると同じく教師が缺席の際にも亦然りとす。かくの如く已むを得ざる教師生徒の分離の場合には生徒の心中には、よし一時のともせよ教師がおのれに對する從來の愛情の冷却はせざるかとの偏執的疑惑の生ずるとあるものなり。此時に當りて教師よりして生徒に懇勸にして剴切なる問安獎勵の信書の送らるゝとあらば生徒は感激して一層敬慕の情を殷んにし從來の關係を益す堅くするに至るや必せり。

故にその生徒に一回も書簡を發送せざる所の日曜學校教師は自ら好んで少年男女の心情に印象し訓誡する所の最も有力なる方便を放棄する者と謂ふべし。男子にまれ女子にまれ青少年にして友情の掬すべき信書を受るを喜ばざる者あらんや。實に郵便によりて書簡を落手するとは幼稚なる兒童の經驗上特筆すべき事件なりとす。何の思慮もなき童男童女が常は其教師の語る言辭を注意もせず聞き流すも、一旦其教師より特に自己に宛てたる信書を得たる時に及んでは必ず之を熱心誦讀して再三に及ぶは珍しからぬとなり。均しく是れ衷情より出る言語なるも之を信書上に讀み知る時は一種新たなる力の其心に及ぶ者にして、一生徒が其教師への返翰に「小生は實を告白致候へは今回の御書面を拜見仕候迄は先生が日頃かく迄深く小生の上を思ひ居給へりとは夢

にも存じ申さず候ひき」といひしが如き蓋し此生徒には限らざるべし。されば教師にして其生徒の剛愎不遜の者に如何に辭を費して或は誠め或は獎むるも毫も其効なきに一たび懇篤なる書狀を送りて教訓獎勵するに於ては忽ち柔順和怡の生徒となりて能く我が言に従ふに至るを見て驚く所のものは世間少數にあらざるべし。此の如く書狀を以てするは耳提面命するよりも却て其効の顯著なる者なるが故に或は出缺定りなき生徒にその缺席せざるやう勸奨し、或は教場に在りては靜肅にして教師の言に留心すべきことを命じ、或は自宅にて日課の下讀みを務むべきことを求むる等凡て其生徒個々に書狀を以て言送くる時は必ず其効果あるべきなり。又特に生徒を視て之に特種の真理若くは聖句を心に印象せしめんには亦必ず此書狀を以てするを効ありとなす。蓋し書狀に明瞭に記述せられたる真理は之を特に自己に宛てられたるものとして讀む所の者には更に事新らしく、力ありて翫味せらるべく、又之を記憶せよとて書狀にて送られし聖句金言は往々一生涯を通じて忘失し得ざるとありとす。予が識れる一老婦人あり、「エホバの目は何處にもありて悪人と善人とを鑑みる」一句を片時忘れず服膺せり、是れ此婦人の極めて幼りし時其の今は此世に亡き父が故ありて永く他行せし旅先きより之を牢く記憶せよとて書狀にていひ送り來りし者にし、此婦人は此時より今日に至るまで之を「阿爺の聖句」と稱へて牢くも記しおぼわて、常におのれはエホバ

の注視し居給ふおん目の下に云爲起居する者なりとて恐懼戒慎するなりとぞ。然れども是れ特に此婦人にのみ限れる者にはあらずして、何人にも斯の如くにして得たる教訓獎勵は一生を通じて決して忘却し得べきものにあらざるなり。

紐育市なる某日曜學校の一女教師は自己が夏期休業にて他行せる間毎週必ず受持級の生徒一同に宛てたる一通の書狀を認めて之を自己の家族に送り置き、而して生徒等は毎土曜日の午後この女教師の家を訪ひてこれを受くるを例とする多々年湮はるとなかりき。是れ生徒に在りては其教師よりの毎週定期の書狀を見んとて日曜學校に登るを樂みとなすべく、其女教師に在りては長き夏期休業の不在にも拘はらずおのれと生徒等との交情を、却て温めこそすれ決して冷却せしむる憂いなく、誠に一舉兩得と謂つべし。又フヒラテルフヒヤなる一女教師は常に其受持女生徒の喧擾にして、其統率監督にはとく困うじ居りしが、圖らずも止むを得ざる事情出で來て一時教場に相見ると能はざる所より彼等との間に書信の往復を開始するに及びて此女教師は始めて彼等喧擾なりし女生徒は日頃此女教師に非常の温情を有し、其教授には深く注意し居りしと相知れて甚だ驚きぬ。是れより此教師は女生徒等の事情を知るとを得て以前に倍したる熱心と趣味とを以て教授するを得たりといふ。かくの如く教師生徒は一時相分るゝによりて一層の親密を得る者なれば教師たる者は宜しく此の機會を利用して書

信の往復を開始し彼等が心を收攬すべきなり。此によりて憶起すは昔し羅馬帝國隆盛の頃の風習として青年男女の新に結婚したる者は程なく一時相分離せしめ、其間唯書信の往復のみを許し、以て相互の所思愛情を交換知悉し一層の敬重を得るに至らしむるを常とせしとなり。たとひ教師生徒は此の如く故に相分離して以て一層接近を來たさしむるを期すべからざるも、故ありて相分離する時あらば必ず此機會を利用して、懇懃なる書信の往復を爲して其生徒の心情を知り彼等をして我に信頼し敬慕する情を起さしむるやう務めざるべからざるなり。

又教師若くは生徒が其學校を退きて永久に教場にては相見ると能はざるに當りて、教師が元教へし生徒に斷えず書信を發送し、爲めに美はしき効果を生せしと其例頗る多しとす。トーマス、アーノルドはそのむかしの生徒をば決して忘るゝとなく、學校を去りしより此かた永き年月の間多忙の時を偷んで多くの舊生徒に書信を通ずるを常とし、又日曜學校の生徒にして退校して年所經たる舊生徒と斷えず書信を往復せしめ居るもの多く之れあり。且つ多くの信仰堅固なる基督教徒は曩時日曜學校にて其教師の教授若くは感化よりしては今日一の目に立つ程の恩徳を感せざるも其教師より屢ば寄せ來る書信によりて其精神修養上に裨益を受くると大なることを證言せり。予が親しく知れる一二の例を擧げていはし新英洲の某日曜學校に於ける小女の一組は長年月の

間その前の一教師より毎週寄せ來れる書信を愛讀し、且つ之を永久に保存せん爲めに各生徒順次を定めて其書狀の一を自己の所有として我手に存せるものは幾度か反覆愛誦するを常とせり。又予が知人なる一女教師——他にも必ず此種の人多くありしならんが——は南北戦争の打續ける其間おのが日曜學校の生徒たりし青年の從軍して各地に散在せる者に、或は一人に宛て或は數人連名を以て宛て、懇勸勸勉の書狀を發するを怠らざりしが、其青年等より送り來りし感謝の辭を以て満たせる返翰は戦争終局前既に一通に達せり。而して彼等の言ふ所によれば其精神上に關しては故郷なる父母兄妹又は陣中將校よりの感化は決して此日曜學校の女教師の書信の感化には及ばざりしと。

多くの日曜學校教師は未だ其効果を實驗せざれども實に此書信の發送は生徒教育の爲めには多大の力あるものなり。されば若し教師たるものおのれ一時其生徒に相離れ、又は事業上己むを得ず彼等と袂を分つの時あらんか宜しく彼等と書信を通すべし。若し生徒の一時學校より離るゝ者あらんか、又は永久に退校する者あらんか宜しく彼等と書信を通すべし。若し教師生徒を愛しなば宜しく書を送りて、しか告げよ。若し彼等が救主を愛するに至らんとを望むならば宜しく書を送りて我が此希望を告げよ。若し彼等が同じく基督の弟子たらば宜しく書を送りて彼等を勸勉し訓誡して基督

教徒的生活に一步を進ましめよ。

若し夫れ生徒と面と面と相對し居るならば此時こそ教師たる者は生徒の爲めに善事を爲すに最も適切なる機會なれと思へ。若し又神の攝理によりて教師生徒と相分るゝか、生徒教師と相離るゝ時あらば教師たる者宜しく生徒と面と面と相對して居れる時よりも此時こそ彼等の爲めに善を計るに最も適切なる機會なれと思へ。生徒が我が前に在る時にせよ、離れて在らざる時にせよ斯時即ち彼等の爲めに圖るに最も適當なる時として之を用ふべきなり。若し教師にして其機會を利用するに懈怠ならば實に耻づべきの至なり。

第四節 生徒を勸勉して基督を信する決心を爲さしむる事

日曜學校教師が其受持級の生徒に對して或は之が教訓感化、或は其級内に於ける時又級外に於ける時、或は生徒の出席せる時、又は缺席せし時宜しく妥當適切の待遇誘導を講ずべきとは前節逐次之を論述したり、然れども是れ何の爲めに斯く爲さるべからざるか、即ち教師の事業として一大目的の他に存する者あるが故にして、此目的を達せんが爲に此等の手段を採る者なれば、今その生徒の待遇教授の方法悉く其當を得たりとするも、若し此の教師が主一の目的とする所の事に最大の注意を爲さざる時

は日曜學校事業の精神を失へる者と云はざるを得ず。然らば則ちその謂ゆる日曜學校事業の主一の目的とは何ぞや。

日曜學校の教師の教場に臨むは基督の代表者としてなり。代表者の目的とする所は必ず其代表する所の基督の目的と同じからざるべからず。パウロ曰く「それキリストの死て復生ししは即ち生者と死者の主とならんためなり」と。されば教師が基督の御旨を奉戴して生徒に臨む目的は生者と死者との主たらんと欲し給ふ其人に生徒が心より服従し、且つ彼等が信仰によりて基督の形像に肖似するに至らしめんとするに在るなり。ヨハチは其主耶蘇の言行を詳記し、さて其代表者として其目的を告白して「此書を録せるは爾曹をしてイエスの神の子キリストなるを信せしめ之を信じ其名に因りて生命を得させんが爲なり」といへり。然らばヨハチの如く主基督の言行教訓を人に語る所の者はヨハチの目的を以て其目的と爲さるべからず。之を要するに日曜學校教師の主一の目的は其生徒をして主耶蘇を信じ、主耶蘇の如くならしめんとするに在るなり。

蓋し親密なる交友間にも他の宗教上精神上の状態を観察揣摩するは頗る誤り易きとなりとす。日曜學校の教師は宜しく其生徒が未だ教會員ならざるの故を以て、又は改宗を告白せざるの故を以て是れ基督信徒に非すと斷言すべからざるなり。彼等の中

には呱呱の聲を揚げし其時より兩親が信仰より出でたる祈禱を以て之を基督に聖別信託せられたる者もあらん、又は其幼時より心を盡して基督を愛し信するやう教へ込れし者もあらん。但かれ等は其更生せし時適切に之を他に語り能はざるなり、又如何にして其改宗せしとを告白すべきかを知らざるなり。彼等或はおのれ猶年少なるが故に其信仰を告白し教會に列るの必要と謂へる者もあらん、又恐くは信仰を告白せよ教會に列れと勧められしとも無かりしならん。然れども之を以て彼等は眞の基督信徒に非ず、更生したる神の兒に非ずといふべからざるなり。又かく信徒たる父母を有せざるも其日曜學校にて始めて神の道を教へられ、基督に信じ従へと勧められし時既に心竊に基督に信頼し、爾後信仰と祈禱とを繼續し來るも、而かも教會にも列らず、信仰をも告白せざる所の者も必ず之れあらん。此等は實に基督信徒と稱すべき者にして、初代教會の信徒とは概ね此の如き者なりしなり。然るに唯その信仰を告白せず、教會に列らずとの故を以て直ちに之を基督を信せざる者と斷言するは是れ之を礙かす所以にして「我を信する此小子の一人を礙かす者は磨石をその頸に懸られて海の深みに沈められん方なは益なるべし」と宣ひし救主の不興を受くる所の人ならざるべからず。

されば教師は其生徒の精神的情態を批判するには最も慎重ならざるべからず。其宗

教的情態と其地位境遇的情態とを兩つながら能く検索して、その未だ信仰の告白を爲さざる所の生徒を勸勉し誘掖して其決心を促さざるべからざるなり。各教師は其生徒が眞實に基督の弟子たるや否や、又剛愎にして悔改せざる罪人として目せらるべき者たるや否やに關して其詳細を知るとを要す。之を知悉するには教師に取り最も細心を要するに於て、其家族境遇の如何、其品性言行の如何を検索探討し、之に繼ぐに祈禱を以てし神の冥助を仰がざるべからず。生徒果して自己の罪人たるを覺り得て救主を得んと欲しつゝあるか、耶穌基督を救主として信賴しつゝあるか、將に彼れ果して其信念を日日の言行に實現しつゝあるか。此の如く検討して得たる事實は單に生徒が「經驗談」として物語れる説話によりて得る所のものよりも極めて優れる證據といはざるを得ず。實に生徒が自ら述ぶる改心の説話によりて之を知るよりも彼が果して實際に神の兒たるや否やを其平常の云爲によりて認定するは教師に取り最も緊要のとなりとす。たとひ記録其他に生徒が改心新生の時日が明記しあらざるも彼れ若し基督に在りて活ける者たる實證にあらば彼れ必ず基督によりて新に生れし者たるを疑ふべからざるに非ずや。靈魂活動の證は靈魂誕生日の證よりも更に確なり。

若し教師が我が級の生徒が未だ基督の弟子たり得ざることを知り得ば必ず自ら心に問ふべし。——如何にせば我れ彼を勸め掖けて信仰の決心を爲さしめ得べきか、又は如何にせばわれ彼をして耶穌をその救主として信せしむることを得べきか、又其信仰を堅固にして活潑々地の者として證明せしめ得べきかと。生徒をして深き決心を爲さしめんとするには教師は個人的に之と交渉せざるべからず、決して他の多くの生徒の前に於て單に悔改めよ決心せよといひて效ある者にあらざるなり。或は授業の終りに特に短時間の質問會を開きて生徒の稍心ある者と個人的に打解け親しげに勸奨して其效あるともあらん、又生徒をおのが家に招き寄せて相語り相祈りて信仰の決心を促すも亦大に效あるべし。予の識れる一女教師は廿五名の生徒なる一級を受持ちしが其中二人は既に信徒なりき。此教師は他の廿三人の生徒を常に其自宅に訪問して信仰の道を勸勉誘掖して一年の終りには遂に悉く決心を爲し信仰を告白するに至らしめたりき。

然れども單に感情に訴ふることは慎むべきにして、嘗て勸勉し誘掖して直ちに信仰決心の爲し得るやう務めずして、教場に於て、又は校長席より、若くは日曜學校祈禱會に於て熱烈なる勸告を爲し以て未だ悔改めざる生徒の感情を興奮せしむるは策の得たる者にあらざるなり。若し生徒が未だ信徒となりて守るべき義務責任の存することを知らずして一時其精神的情態及び其需要に關して感情の湧沸感興して抑へんと欲するも抑ふる能はざる時に際しては教師は須らく之を勸奨誘掖するよりも寧ろ其湧沸したる感情中に包含せる事情傾向等を審かに問ひたゞして正に歸せしむる様爲さるべし。

何にせばわれ彼をして耶穌をその救主として信せしむることを得べきか、又其信仰を堅固にして活潑々地の者として證明せしめ得べきかと。生徒をして深き決心を爲さしめんとするには教師は個人的に之と交渉せざるべからず、決して他の多くの生徒の前に於て單に悔改めよ決心せよといひて效ある者にあらざるなり。或は授業の終りに特に短時間の質問會を開きて生徒の稍心ある者と個人的に打解け親しげに勸奨して其效あるともあらん、又生徒をおのが家に招き寄せて相語り相祈りて信仰の決心を促すも亦大に效あるべし。予の識れる一女教師は廿五名の生徒なる一級を受持ちしが其中二人は既に信徒なりき。此教師は他の廿三人の生徒を常に其自宅に訪問して信仰の道を勸勉誘掖して一年の終りには遂に悉く決心を爲し信仰を告白するに至らしめたりき。

然れども單に感情に訴ふることは慎むべきにして、嘗て勸勉し誘掖して直ちに信仰決心の爲し得るやう務めずして、教場に於て、又は校長席より、若くは日曜學校祈禱會に於て熱烈なる勸告を爲し以て未だ悔改めざる生徒の感情を興奮せしむるは策の得たる者にあらざるなり。若し生徒が未だ信徒となりて守るべき義務責任の存することを知らずして一時其精神的情態及び其需要に關して感情の湧沸感興して抑へんと欲するも抑ふる能はざる時に際しては教師は須らく之を勸奨誘掖するよりも寧ろ其湧沸したる感情中に包含せる事情傾向等を審かに問ひたゞして正に歸せしむる様爲さるべし。

からず。彼等に其信仰せざるべからざる感念を有しをり、いつにても主耶穌に奉事せんとし居ることを發表する機會を與へ置かすして、「直ちに悔い改めよ主耶穌に來れど全會衆に向つて求むるは最も不可なることなりとす。

要するに教師たる者は其生徒が基督教徒たるや否やを知らざるべからず。其未だ信徒たらざる所の者には神の恩恵によりて其決心の生ずるやう常に神に祈り其恩恵を待ち望まざるべからず。而して又其決心は其各種の情態に關する者なるが故に各生徒の精神的又境遇的情態を検討して、之に適當せる勸勉誘掖を爲さるべからざるなり。

第五節 如何なる時にも生徒の相談相手となり、又之を

誘掖する事

日曜學校教師が其生徒を精神的に教育し、感化し、誘掖する種々のはたらき以外に其教師たり生徒たる情誼關係上より生ずる所の大切なる若干の義務あり。是れ教師たる者の忽且に付すべからざる者にして、果して能く此等の義務を認識し履行せば其教育上の全功を永く收め且つ完うするを得べきや必せり。此等の義務の性質及び範圍を十分に知らんには教師たる者先づ自己と我手に委ねられたる生徒との間に生じたる攝理的關係の權能を確信せざるべからざるなり。

若し教師にして教師生徒の關係は單に一時偶然に生じたる者にて、決して人類の道徳上精神上的の訓練を神より授けられ、委ねられたるに非らずと思惟せば、是れ大なる謬見にして、親子の關係、牧師信徒の關係に比して此師弟の關係を甚だ蔑視したる者と謂ふべし。夫れ師弟の關係は家族及び講壇と密着なる連鎖を有し、親の其子弟に於ける、牧師の其會衆に於けると同じく、合法にして動かすべからざる所の責任と義務との存する所のものなり。苟も教師たる者この理を曉り得ば必ずや我が教育事業に新光明を認め、其大にして且つ高きものたるを覺り、從てこの師弟の關係より必然生ずべき所の諸の義務を認了するに至らん。故に神の聖旨より出で、基督教會傳道の關係よりして日曜學校教師の其生徒に對する情誼關係の本旨を明かに知了するとは教師に取りて最も緊要なるものなりとす。

抑も日曜學校てふ名稱及び組織のおこりは近く百年以來の事に屬すと雖も、其使命の沿源は遠く四千年前の上古に在りて、人類の訓練靈魂の救拯の道に於ては家族の使命に次ぎて、講壇のそれに先きだつと實に二千年の前よりして存せり。この家族や講壇や日曜學校の三者は等しく神の聖旨より出で、人類の救拯の上に神の經濟を見るを得べき所の者たり。

太初に神は人類の宗教的訓練を家族に委任し給ひて、最初の千五百年間は此高尚な

る使命の擔任と特權とを家族以外には分ち給はざりき。若し家族にして能く此負荷に任へ、父や母や其子女の訓練に忠實なりしならんには決して之に代るべき機關を設くる要は無かりしなり。然るに罪惡に滿てる人類は各其子女に義方の訓練を授くるに任へざりき。是に於て神は新國民の建設者としてアブラハムを選び、人の運命を家族の手にのみ一任せずして、教會學校なるものを創設して家族と共同して子弟の教育に従事せしめ給ひき。アブラハムは其人の父となる前に教師たりき。彼はイサクの生る、まで少くとも三百十八人の「家の子」に宗教的教育を授けたりき。神はアブラハムを以て曾に其子のみならず其「家の子」(當時族長時代には其一門一族を稱して家の子と稱したり)をも訓練して、宗教の教理を教へ、其躬行實踐を勸勉すべき所の者なりと公示し、而してアブラハムが人類の改善訓練の企畫に従ひ長く教會學校を家族との共同事業として子弟の教育に充つべきことを是認し給へり。摩西の時に凡そ人の親たる者は家庭にて其子女を善く教育すべきのみならず又教會學校の集會には必ず之を同伴すべかりしはアブラハムが前に明かに命じたりし所なりき。又教會學校に子女を集合せしむる所には家庭教育の缺陷を學校教育によりて補はんが爲めなるを「子等のこれを〔家庭教育にて〕知らざる者も〔教會學校にて〕之を聞きてエホバを畏ることを學ばん」とも亦明かに公示せられし所なり。此時より今日まで家族は其子女の宗教的教育及感

化に對して絶對の義務權能を有せずなりぬ、これ實に神の深き聖慮なりとす。

教會學校は摩西時代より起りて今日の最も進歩したる日曜學校となり、神の教會の諸機關中重要なもの、一となれり。利未の一族はヨシヤバ王の世には日曜學校の宣教師たりき、而して王の命を奉じて「エホバの律法の書を携へユダに於て教誨を爲しユダの邑々を盡く行きめぐりて民を教へたり」き。ヨシユアの時にもチヘミアの代にも亦然りき。而して教會學校、即ち聖書學校の、今日ならば日曜學校ともいふべき此學校の校長教師の其名及び課業の順序等は尼希米亞書の第八章に詳記せられありて、實に我主の降誕前四百五十年なりとす。猶太のラビ等は吾人に告ぐるに會堂時代の初めより第一禮拜に次ぎて第二の集會は聖書の研究會にして、教師生徒親しく打寄り問ひつ答へつせしを以てせり。彼等は此集會をベスミドラシ即ち研究室といひしとぞ、吾人は之を日曜學校といはんと欲す。主耶蘇が十二歳の時殿にて「教師の中に坐し且つ聽き且つ問ひる」給ひしに父母が出逢ひしといふは此の研究室、日曜學校なりしならんと臆測するに許多の憑據あり。げに當時この年頃の少年が殿にて教師の教を聽き又質問などするは一般の風習なりしなり。猶太の律法書に猶太全盛の頃エルサレムには四百八十ヶ所の會堂ありしといひ、又ラビ等はエルサレムの滅亡せしは職として此等の會堂に屬する學校教育の忽せにせられしに由るとを斷言せり。

教會學校の其濫觴より今日に至る迄一貫し來りたる特色は教師生徒一堂に相會し、親しく神の道ミチを研究し、問答の法を以て宗教的知識を得るに在りき。我主と弟子とは亦此法によりて一面説教を爲すと共に一面この教授に怠り給はざりき。アブラハム、モーセの昔より現今に至るまで其程度に多少こそあれ、亦かくの如くなりき。實に教會學校は神の大なる計畫中の一にして神の民は此聖旨を奉戴して盡し來りにき。兒童の宗教々育の爲め神が日曜學校てふ機關を創設し給ひしも、決して從來其責任を有したりし家族てふ機關を除外し給はざるなり。蓋し父母は其兒童の宗教的教育的日曜學校にのみ一任するに能はず、又父母たるものは日曜學校なる新機關の助けなくして、獨力を以て其兒童の教育を全うし得ると能はず。實に家族と學校とは車の兩輪の如く其一を缺く時は決して兒童の宗教々育を完うして神の聖旨に合はしむると能はざるなり。降てバプテスマのヨハチの時に至りて神は新に講壇なる一機關を設け給へり。是より先き説教者豫言者等の在るありしも彼等の使命は一時的のものなりしが、このヨハチの時より家族、學校と相並んで講壇は教會の三機關となれりき。世人は概して家族、學校、教會と稱すれども是は妥當に非ず、當さに家族、學校、講壇と稱すべきものにして、謂ゆる教會なるものは凡ての兒童を教育訓練して「神の子を信じ之を知り至き人すなはちキリストの満足れるほどに成るまでに至」らしめんために此等

の三個の、互に獨立して、而して且つ協同の働きを爲す所の機關の總稱なりとす。

日曜學校は教會學校として、兒童の教育及感化の上に種々の利益あること家族、換言せば家庭に於てするよりも、又講壇に於てするよりも遙かに優れる所の者あり。家庭以上の利益とは學校にて同一級に在りて多人數と偕に教育を受くるより生ずる間接のものなりとす。如何なる家庭とて同じ年頃の兒童を五人十人二十、三十人と有して、相互に激勵し、相互に同情を有し、相互に補助し感化すると日曜學校の如きと能はざるなり。父母にして若し能く注意しをらんには其子女が日曜學校より還り來て、平生屢ば父母より教へられ而して忘れ居たりし事柄を、今日しも學校にて教へ聞かされて左も珍らしく始めて聞き知りし如く父母に喋々するとあらん。是れは實に同級の朋輩より聞きしか、又は朋輩と共に教へられしかにて、是に於て其事柄を始めて會得し、又之に興味を有するに至りしなり。

大學又高等専門學校の生徒は其教師より教育せらるゝと同時に、同級生と切磋琢磨するによりて大に其智識を開發するを常とす。又如何なる種類の團體にもせよ其會員が受くる所の感化と教訓とは其會長頭目より直接に之を蒙ると共に、日常寢食を同うする同輩同僚より受くると頗る多きは人の能く知る所なり。凡そ人は長少によらず唯上位の人によりのみ十分に訓練せられ又指導せられ得る者に非らずして、却て其周圍

の勢力に感じ易きものなるが故に、間接の勢力は其人最終の品性の陶冶、智識の發達に至大の關係あることを知らざるべからざるなり。されば兒童の知識及道德を完全に發達せしめんとは家族のみにては到底能くし得べきわざに非ざるを以て、神は茲に日曜學校なる新機關を設けて父母をして其兒童に間接の感化を併受せしめ、智徳の發達を完全ならしむる特權を與へ給へり。

上述の如く兒童の教育には家庭の力日曜學校に及ばざるものあると共に講壇の力も亦日曜學校に若かざる所のものあり。抑も講壇の利は老少男女を一堂に集めて等しく之を作興せしめ、靈通せしめ、指導するに在り。而して其聽衆各個の精神上、生活上特種の情態に應じて、其需むる所の者を充たし、之に同情し、之と協議し、之を補助すると等に至りては講壇の能くし得る所に非らざるなり。之に反して教會學校即ち日曜學校は其生徒を個人としても級全體としても能く之を教練し能く之が需要を充たし得る所の者なり。

吾人は今人類に義方的教育を授けんため神の設け給ひし第三の大機關たる講壇に對して、世人の誤解を避けんが爲めに茲に一言辯じ置くべし。講壇とは決して教役者又は教師と同意義に解釋すべき者に非らざる是れなり。教役者、教師は其任地なる教會事業の各機關を總理監督する所の者にして、家族、日曜學校、及び講壇てふ三個

の相頼り相助けて道德上圓滿なる人物を陶鑄する機關を有する所の教會を代表する所の者なり。故に講壇にてのわざは教役者の事業中の一たるに過ぎざる者なれば、教役者にして、唯講壇の説教にのみ重きを置きて、他の家族と學校との二機關を忽且に付すならば大に其使命を誤れる者と謂ふべきなり。

日曜學校の根本的性質は神の之を設け給ひし聖旨より之を視、又基督教會の一機關として之を視れば實に前條述べし所の如き者なるが故に、日曜學校の教師たる者は深く自己の地位の重要な所以を知り、人類の教育、感化、義方的訓練に至大の關係責任あることを認識せざるべからず。實に日曜學校の教師は其生徒は神より委ねられ、彼等の幸不幸はおのれ神に對し、又基督の教會に對して責任あるものとして彼等に臨まざるを得ざる所の者なり。教師はおのれを父母又は牧師の地位に立てるものとして思ふべからず、父母には父母の任務あり、牧師には牧師の任務ある如くおのれは彼等生徒を教授し訓導する合法的地位に在る者として之を視るを要す。教師の代表する所は家族に非らず、又講壇に非らずして學校なり。彼は學校の代表者として教師たり、訓誡者たり、後見人たり、顧問たり、補助者たるあらゆる名稱の有する諸任務を併有する所の者なり。其地位は父母も之に當ると能はず、牧師も之を充たすと能はざる所の地位なり。其事業は父母も牧師も成し遂ぐると能はざる所の事業なり。其の生徒に於

ける關係は狹義にして術語たる「教師」たるに止らずして、且つ其指導者たり朋友たる關係なり。其の生徒に負ふ所は單に教場に在りて相對坐する時の教訓指導のみにあらずして、如何なる時如何なる處にても彼等に對する愛情たり、同情たり、相談相手たるなり、援助たるなり。日曜學校教師たる者上述の如き其職務の範圍、義務を能く識認して之に當らば日曜學校の事業は始めて其目的を達するを得べしとす。

都部の日曜學校に於ける最良の教師は皆常に其生徒の個人的稟性と其幸福に關し、多大の注意を爲しつゝあるなり。二十五人一組の生徒を有せる一教師が彼等日々如何なる業務を執り、如何なる缺乏を感じ居るかを知り、絶えず其精神上修養と共に日常の困難をもおのれに相談するやう彼等を勧め勵ましつゝありし一例を既に記るせしが、此の如き類例は實に一にして足らざるなり。予は今日猶現存せる人にして三十年間以上も嘗て其受持級の生徒たりし者に注意を怠らざる多くの教師を名ざし擧ぐるとを得。此等生徒は今日既に一家の主人主婦たるものあり、種々の業務に従ふ者あり、世界の各處に散在せるものあり、然れども彼等は決して其日曜學校教師の愛に富める同情を忘れ、其面貌を忘るゝと能はざるなり、彼等必ず謂はん彼等が艱難疑惑の時に際して、この日曜學校教師の如く眞實に相談相手となり援助者となり勸勉獎勵せしものは他に之れあると無しと。予は月又月、歳又歳其日曜學校教師を訪ひて、自己身上の

助言指導を請ふに、此教師ならで他に能くおのれを助け得る者無きが如くに信する青年を幾十人なりとも茲に擧げ得べし。予は又其受持級の生徒の爲めに適當なる職業を求めんとて彼處此處と再三再四奔走する所の男女の教師を幾十人なりとも茲に記し得べし。予は又勞働者、製造家、機械匠、商人、銀行家、學生、教師、教役者にして、其現在の地位、希望を彼等が日曜學校教師の感化と盡力とによりて得たりと公言する人々を指名し得べし。

現時著名なる教役者予に告げて曰く、予は日曜學校を去りてのち數年、始めて基督教を信するを得、公會に於て其告白を爲せり。前の日曜學校の受持教師之を聞き、大に喜びて予に書を送りて、「予は卿が早晚かくあらんとを知り居たり。卿は予が受持級にて最後に主を信せし者なり、予は今日まで卿が主を信するに至らんとを祈りて止まざりし」と曰へりきと。日曜學校教師が常に其生徒の思想を一變し、其一生を基督教の傳道に委ぬるに至らしむるのみならず、其一生の事業に就くべき準備を爲すに物質的扶助を與へし者も亦少からざるなり。現今日曜學校の生徒にして、其教師の勸奨によりては一生を傳道事業に委ね得べきもの蓋し尠からざるべく、又多くの生徒が一生有用の人物となり、又一生の運命を開拓すべきもの實に日曜學校教師が此等生徒の相談相手となり、補助者となる熱心と盡力との如何に繋りて存するや疑を容れざるなり。